



貴女任天田島象三編輯  
 至寢 六全女用父姪鏡  
 上の巻

来

□ 9  
 4097



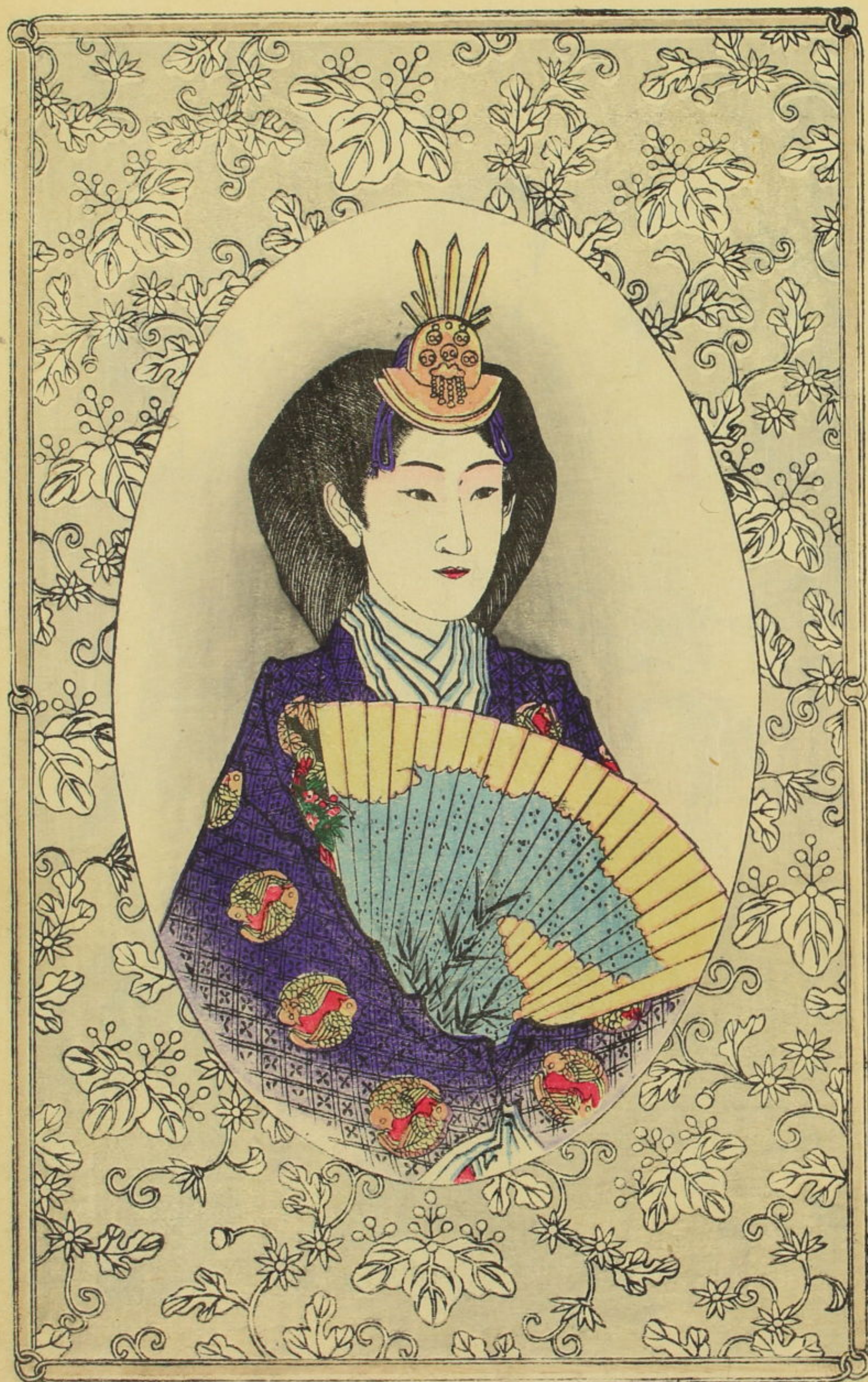












皇太后御像



大皇太后御像









婦人束髮出園









貴女 至寶 大全女用文姫鏡目錄

● 上のすじ

- 一 小倉百人一首
- 二 烈女三十六家撰
- 三 女子品さだめ
- 四 女子心もえ
- 五 化粧のすき
- 六 歌ぐた乃更
- 七 習字の更
- 八 九々の聲
- 九 源氏物語作者の更并香の圖
- 十 女子節用字づら

● 二 女學乃のしるし

- 義務 ● 教育 ● 才藝 ● 學徳
- 言語
- 六 女子禮式
- 八 樂器名とら
- 十 香をきく更
- 十一 文章の更
- 十二 和歌の更
- 體格 ● 冠辭 ● てよは
- 懷紙 短冊の書式 ● 歌袋

● 七 裁縫手引草

● 九 よろの巾色よの折形

● 世 新年中行更

● 下乃まき

- 一 女用文章 目錄凡例
- 二 女文章正字解
- 三 文乃封トヤウ
- 四 所帯のまゝとらえ
- 五 用文うなつらひ
- 六 諸藝道しるし

● 大 婚禮の次第

● 年 年中祝更女子とら得艸

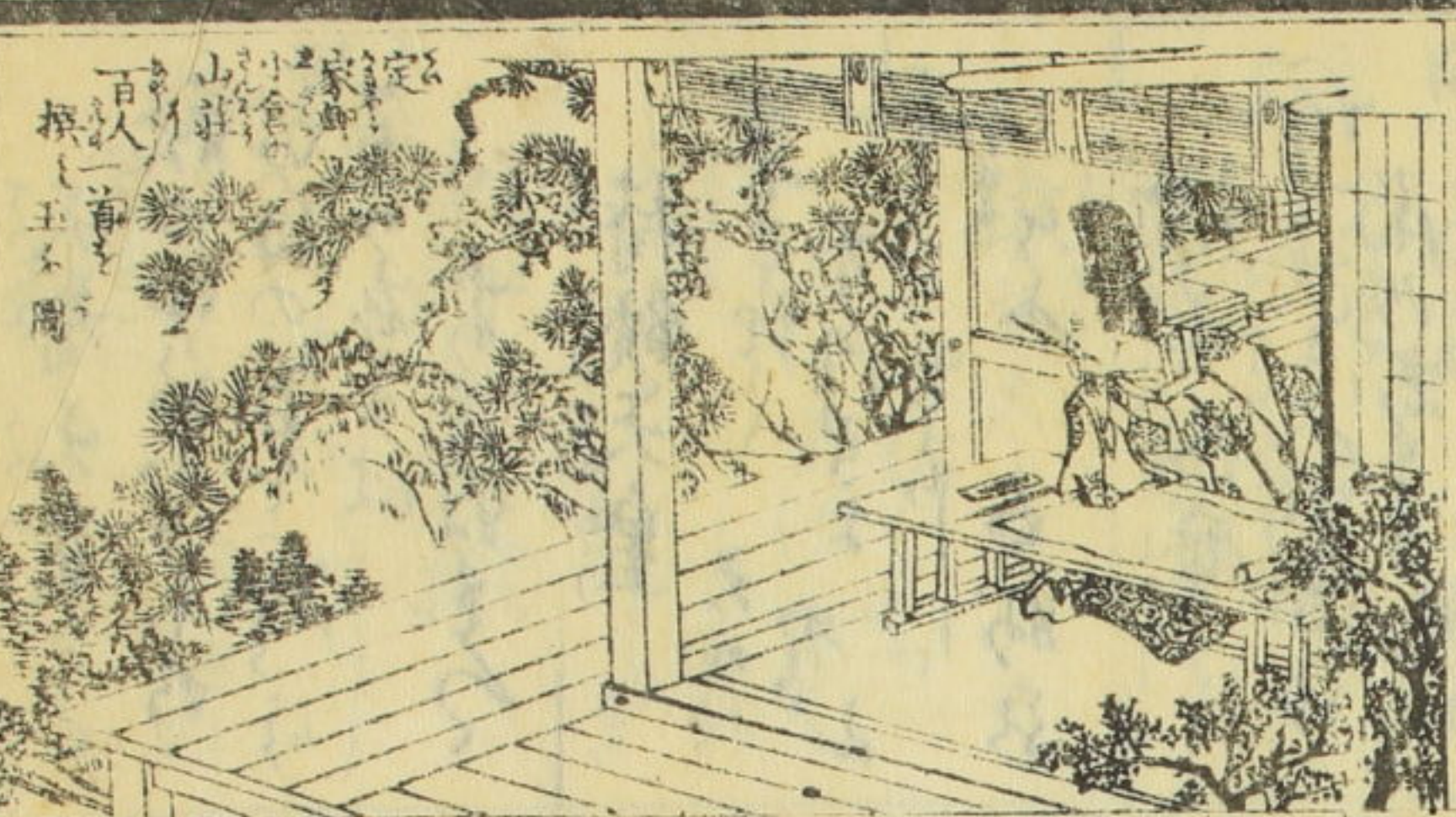
- 二 十二月の異名
- 四 玉章をよめ心得
- 六 兜育らき
- 八 新大和とら
- 十 百人一首讀ら
- 十一 女文章通語の解

上下通計三十三種





一 小倉百人一首



貴女 至寶 大全女用文姫鏡上のまら

東都 田島任天編纂

二 女學のいところ

性質

天の人を生か男子を筋  
骨逞し一ら一で能く勞  
働と智識を運用する耐  
ゆる性質を以て給へ  
り故に世に立業と營  
かゝ一家と養ひ育とも  
女子を之に反對の筋  
骨柔弱艶小優美性質を  
以てうやむ身あまは

三 烈女三十六家撰

凡と女子小智徳才藝のニツをせ  
け申身と慎しと志操を堅あ  
り夫より更しく世に女丈夫とゆめ  
功を立て世末の松山  
とくのけと優美名を遺きしむる  
古の善行貞烈ともしむるをた  
る女子の傳とも知らしむる  
如ちあり此は三十六人の烈女の  
傳並に小其より歌をうい記しを  
徒然の料といふるぬ







安倍仲磨

何れもよらふふり  
こゝろ かんざい  
のしり かんざい  
いそいそ かんざい

喜撰法師

ワの底に せい  
みやこの せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい

小野小町

そよのゝ せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい

と主張ありて、さき  
動ある天の責の  
かたに道理を

○義務

女子の義務ハ幼稚と  
ハその父母の仰せ  
うに孝行を専ら  
姉を敬ひ弟妹を  
いと教へ授けたる  
諸藝を勤まつて  
親のよろこぶを  
いそいそあり成長  
て他人の家小行  
舅姑を我父母も重

熊野



熊野を遠州池田の長者の女を  
玉顔海棠と羞むるの趣き何  
せられ都の内小在りか常小老  
の母も遠く隔るあはれかあはれ  
快々として娛ませば一年宗盛東  
山小花見の宴を催や糸竹の歡

蝉丸

あまの せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい

和歌

あまの せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい

僧正通昭

あまの せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい  
いそいそ せい

んとて尊く親愛を敬ひ  
舅姑小對して勤むべき  
業を怠たるべからば  
舅姑の命あらば何事  
もほろと行あひて背く  
なつては萬の支舅姑小  
問ふ其指揮小後が  
べし若し舅姑我を誹り  
憎むたやあとも怒り恨  
むるよとなつたれば我  
のたらぬことあるあり  
とて身を省りみく真  
の心を以て之を支へば  
後をわが親

を盡く慰さめたり小熊野よりあ  
つて此歌を詠下ければ宗盛大小  
其至孝を感下種々の引出りはを  
賜ひ遂に素願の下暇を與へら  
きしとぞその後壽永の風たれ  
平家の一門ありて西海小亡び  
宗盛ハ捕まれとなりて重ねて池  
田の宿を越して死熊野さしも榮  
華極りなき人の斯かとも果た  
るをえてかあはれ小堪へ一首  
の歌を贈られけり  
あはれ小思ひあはれ  
あはれ小思ひあはれ



陽成院

洋々子のぬる  
とわらう流る  
息を ぶんふの  
ほろりと 川

河原右大臣

みよりのれあのみ  
のちをりやわのちを  
こたえゆ  
あふりななくみ

光孝天皇

君のため 憂を  
こころの あい  
かり 悲しむ  
は こそか けむ

中納言行平

たもろくしんかま  
山の翠 ながる  
まの とき  
今つらうあん

在原業平朝臣

手早振 かんま  
神代 ながる  
龍田川 ながる

藤原教行朝臣

任のゆきま  
夏の ながる  
人の ながる

睦しうなるものあり  
且又女子ハ所夫の家を  
我家と其處を死處と  
と志すれば支那まで  
嫁を歸るといふは  
實家よめるの義なり  
さき縦ハ所夫の家  
いけむいとを厭ふ  
ら富バとて驕るなり  
ら貧富を皆天より興  
給つる運命なれど其  
家のまづハ我福祉  
のありきよて富貴なる  
ハ福祉のよれありと思

静御前



一度嫁りしはたらん  
あけ其家を出さずと女  
子の道と物物の書ふ女  
を三界の家ありと云ふ  
も所夫の家より外に歸  
るべき家ありと云ふ義  
なりかきも常ハ所夫  
の指揮を受け所夫ハ代  
りて家内のあつと治め  
あつとを憐れ縦ハ下  
女下男をめしはうあとも  
萬のあつ自ら辛勞と耐  
つゝ勤め一家の萬全  
和合を計らふべし若  
あつと留められ鶴の岡ハ怖おた  
法樂の舞をなせし世人の知る  
所見る人も其愛慕の情に感せ  
しつゝ時ハ梶原景茂戯して淫  
詞を通せし静容を止し  
妾を苟くも判官殿の小星のあり  
我君も一世ハ立玉も汝が如き者  
對面するも叶ふまじき淫  
詞をやと辱められ景茂赤面  
て退きしやのふ此歌を苦野あ  
義經ハ別るし死記念とて鏡を  
賜りしを朝夕君が形を写され  
しも今を影さく見るをいと  
嘆く詠しなり

香道文同文経鏡

香道文同文経鏡

香道文同文経鏡



伊勢

妻の行あひあゝ義務  
とほらさき嫌情あま  
家を破り人小笑される  
こと往かためあり萬  
更儉やうあゝ費えを  
省くべし衣服髪飾も  
身のみ限を守り奢り

元良親王

よのひぬまひん  
わあゝいひ  
所をほら  
おんこもかみふ

素性法師

そせいほうし  
まもろ  
つら

妻の行あひあゝ義務  
とほらさき嫌情あま  
家を破り人小笑される  
こと往かためあり萬  
更儉やうあゝ費えを  
省くべし衣服髪飾も  
身のみ限を守り奢り  
よのひぬまひん  
わあゝいひ  
所をほら  
おんこもかみふ

橘の妙



橘の妙  
橘の衣あがの  
にづ  
まき  
か  
ひ

妙を橘逸勢のむきめかり承和七  
年逸勢罪ありく伊豆の國小流窟  
せられし妙その別を悲し  
泣々跡を慕ひく下りし小警固の  
武士小留められく夜の歩  
さくさく父小離るべ半途か  
父身すのけま其遺骸を請

文屋康秀

つらひ懸懃謙遜りて  
和順艶柔の質を呈ま  
耐つきて不順相を  
なまべうらそ野夫教訓  
あらは其仰せふ背く  
くらそ疑がもしき事  
徐く小野夫小問あて其  
指揮小従があべし野夫  
小問ふこと何ら正し  
く答あべし其答へ疎け  
まが無礼なり小舅小姑  
ハ野夫の兄弟なれば愛  
敬さべし野夫の親族小  
誹られ憎まられば舅姑

大江千里

あはれ  
ちう  
つら

菅家

ひま  
つら

つらひ懸懃謙遜りて  
和順艶柔の質を呈ま  
耐つきて不順相を  
なまべうらそ野夫教訓  
あらは其仰せふ背く  
くらそ疑がもしき事  
徐く小野夫小問あて其  
指揮小従があべし野夫  
小問ふこと何ら正し  
く答あべし其答へ疎け  
まが無礼なり小舅小姑  
ハ野夫の兄弟なれば愛  
敬さべし野夫の親族小  
誹られ憎まられば舅姑



















大中臣能宣朝臣

御垣も清き水

おのゝ水のたけ

おのゝ水のたけ

藤原実方朝臣

かたがた

えぬいふたけ

さめりき

居を替らむたり始め  
 尚人の隣り住し小  
 孟子賣買の真似を游  
 びせり孟母あまを  
 厭ひ次小寺の傍らに  
 住し小孟子葬礼の真  
 似を更とせり孟母よ  
 たあまを忌て學者の  
 隣り小移りし孟子  
 真んご朝夕學問を働  
 みたまむ終小名高き  
 賢人となり國王の師  
 範となり出せせり是  
 母の染うたる善き

平群千左登  
 旅人のやうせん  
 痛  
 あふふふふふ  
 あふふふふふ  
 千左登を平群朝臣廣成の母也  
 賢くくくくく廣成を訓導せ  
 孔孟の道を授けしむ其交る  
 友垣も書よむり書なんど  
 益友と見れば母とつら酒舗  
 を調くく之を饗應し染友來も  
 病と稱し逢ふりけり



藤原実方朝臣

ねぬいふたけ

えぬいふたけ

さめりき

右大将道綱母

ひの夜の

ひの夜の

儀同二司母

ひの夜の

ひの夜の

ひの夜の

ひの夜の

なりし故あり孟子  
 のに賢人より善惡  
 のり小移り易し  
 王澆季の兒供をや觀  
 よつけ聞ふつを移る  
 ものをむる母が幼稚  
 とに學びたるに教  
 育るを肝要なれ殊小  
 女の子を成長しを他  
 人の家へ行ひたを  
 男の兒よりも親乃  
 教育ゆりせふまづの  
 らぎも親寵愛小耽  
 りく慮すふそむて

廣成も遂小惡習し海に一世の  
 博識となり天平五年遣唐使の  
 命を受け唐土へ赴らん  
 とに母諫め云く凡そ遣唐使  
 の任小當るを男子の名譽此上  
 あし雖ども若し疾忽のあと  
 わらば吾大皇國の耻辱となり  
 未世まを之を雪ぐふと難  
 我今吾子小別るる悲し  
 ども言ふたを吾の最も悲し  
 するのの吾子過る國家小瑕  
 つらふとつらんを教訓  
 了錢別お右の歌を與つらふ  
 誠小其言女丈夫と謂づ







伊勢大楠

のめ ちのりののり  
おのり 八市 橋  
おのり 八市 橋

清少納言

秋 関ハヤ  
世ハ 関ハヤ  
世ハ 関ハヤ

左京大夫道雅  
人 関ハヤ

のり 関ハヤ

義務の所云云  
何人の氣も逆ら  
人の中出く彼是と發  
明らしく口出さる  
者をつらああらせ  
出さる者才あ  
らば一を猿真似を  
藝の教育の所云  
外織縫績緝膳部  
立のあらす 其餘  
閑暇あらば書画和歌  
茶の湯活花香唱歌琴

左衛門局



左衛門局を後醍醐帝の中宮  
仕つた官女も容色の妙ある  
のののの 萬小勝をたる女あり  
けき 萬里小路藤房卿相を  
深く語らひ玉ひし元弘の  
乱は是非なく主上の御供  
て笠置に赴き玉ふと紀藤房卿

權中納言定頼

相模 権中納言定頼  
のり 権中納言定頼

相模

のり 相模  
のり 相模

前大僧正行尊

前大僧正行尊  
のり 前大僧正行尊

のり 前大僧正行尊

三味線等も身が小應  
しを嗜むもあつら  
むさむさも女子いと  
もそれの藝小慢ト驕  
あつら我知り顔をな  
まのけをりゆ多小諸  
けの小通ト達しあ  
とも知らぬあつら  
謙遜を奥中つけ  
色ゆく書物の上結  
夏を他人の前あて  
慎しく語るつげ  
○學徳  
凡そ女子の心さすを

賢の手を一切一首の歌を  
添く遣はさきける  
萬葉のみをせん世をたつた  
局是を見讀つ泣くつ  
入りたる折くら坂東の武士ども  
御所小乱入一局を捕つ狼籍  
小及むんとする局よりあつら  
う宥め夜あつら  
らせんと云ひぬけ藤房卿の  
歌の側ら小此歌を書そつ記  
念の髪を身添つ大堰川の  
深き淵小身を躍らせ果玉ひ  
けり



周防内侍

喜結おの けい  
うひ なるまはり  
ふい なるまはり  
たん なるまはり

三條院

ふも なるまはり  
うき なるまはり  
ふい なるまはり  
たん なるまはり

能因法師

何しやみまの  
山のゆき  
立川の川  
わしきまはり

貴とあく 賤とあく 悪  
しき病を和らぎ 順と  
さりと怒り 恨むと人  
を誹り物ねと 智  
識たらざると 慢と

岩倉のよね  
たぐすの  
蓮の上  
はゆ  
さう



あまのこころのさ  
けなり 學問の徳を  
其身と顧み 改め去る  
一就中 智識あきれた  
る小此六ツの病あり

親の菩提を吊らふ 作善を富貴  
の人と云ども ともまれば 疎か  
かり ずく 家貧 其日 鉢  
小逐る りのを 綴ひ ころろ  
りとも 難き 夏あつ 此米  
を京の 岩倉の 片や たり 小住  
最ま げき 孤子 たる 七月の

良暹法師

さび なるまはり  
たらい なるまはり  
い なるまはり

大納言経信

又ま なるまはり  
い なるまはり  
わ なるまはり  
秋の夕暮

治子内親王家紀伊

若 なるまはり  
し なるまはり  
う なるまはり  
ぬ なるまはり

る女子を陰性あり 陰  
を夜に 暗し 故に 女  
子を男小比ぶ 愚  
見や 見知り 知  
き道理さへ 知らざる 又  
人の 誹り べき 復 さら  
辨へ 我 所 夫 我 子 の  
不利 なるまはり 知  
ら 科 あり 人 を 怨  
み 或は 妬み 憎み 我 身  
獨り 立ん ごとく 思へ  
と 返り 憎み 疎ま  
さく 悉く 我 身 の 仇  
なり あり 知ら ざる 學

于羅盆 不の 亡父 其の 為  
仏小 供養 せん とも ね  
奉る 物 一 只 吾 身 小 纏 ぶ 古  
着物 一ツの 責 責 責  
裏 とも 捨 表 瓶 入 蓮  
の 葉 を 以 其 上 を 蔽 ひ 白  
携 愛宕 寺 小 全 名 一 泣  
供 怨 名 一 泣 泣  
家 小 歸 り 去 り 跡 あり 寺 僧 是  
を 見る 蓮の 葉 の 上 を 此 和 歌  
く 其 至 孝 小 感 慙 慙 小 回 向  
して 其 あり ざり 爲 一 め た

横女 文苑鏡

卷之七

十三



權中納言匡房

さくらさくら  
かみのかみ  
たふさあま

源俊経

うかぢ  
いひ  
いひ

孫原基俊

つゆ  
いひ  
いひ

問の徳ありて心  
て改たの去りて其他  
學問の徳の廣大ある  
あつて謂ひほく難  
らむくも學問の精を  
勸まはすべきなり

言語

女子を優美を天性と  
そつものなれを心ろ  
ささかしく眼をそろ  
く見出し人を罵  
る等のあらはしき  
言葉を用ゆをくらげ  
縦へ何やと口とさき更

菊地寂阿の妻



肥後の菊地入道寂阿を後醍醐  
帝中興思召し給ひ時御味  
方となり築紫の探題英時を討  
んと軍議を爲し味方の小貳  
大友忽小變心したうけは是  
を限りと思ひ定め  
古里ありてふかりののちも

法隆寺入道前關白大臣

わらわ  
いひ  
いひ

崇徳院

いひ  
いひ  
いひ

源兼昌

いひ  
いひ  
いひ

ありとも忍び耐ふじ  
若し忍び難きおと何と詠して笠印ふ書く古里ふ送  
りかばよりいふらんをう良黨と俱小潔く討死した  
静め優美ふ云ふをうり其妻あはれ記念を見武  
又男の遣ふべき猛く士を斯あそ有たきと子息武  
嚴めしは語を用ゆを重と呼び時運を待敵を亡や  
からぞ今の女子らと帝の宸襟と父修羅の妾執  
もまれを君の僕の又をもちらそと細々遺言其  
を議論の關係のと殊身を持仏堂ふ走り入心  
さらし博識顔して漢うふ此歌を書のこ入道殿さ  
語を用ゆをも聞づぞを待たふらめと自ら又  
らして心ある人々小伏しきまたりけり天晴菊  
氏よりたうあまを地の妻女うな敵も味方も不  
笑あたり是きふ優めけりとなん



左京大夫顯輔

秋風よたなひおほは

たえんきり

ほのねのまゆき

侍賢院海川

ふしとていふ

かきとてかり

後徳太子左大臣

朝

只

明の

美の性小戻さけなり  
努力角立ちたる語を  
つらうたうらび

四 女子品さだめ

天子の御妻を皇后と  
申し御娘を内親王と  
稱し皇族の御妻を皇  
妃と申し御娘を御息  
所と稱し太政大臣左  
右大臣等の妻を御臺  
所又北の方と云ふ  
祝言の夜西枕北向ふ  
御寝たる故の名あり

探題英時の妻



英時の妻を赤橋相模守の女  
し足利尊氏の北の方妹な  
り河夫小順て筑紫の任乃よ  
まけり元弘の乱小官軍襲  
とて數度合戦小及んよ志を  
敵をなやませし衆寡敵せ  
さりけし其妻子を関東小下

道因法師

かゆひとひさきも

余い何ものよ

あしとたえぬい

おしとかりけ

白皇后宮太夫俊成

世の中

山の

う

う

う

う

う

う

う

う

華族並び小位正三位

以下従五位以上或ハ  
奏任官以上の妻を興  
様と云ひ判任官並び  
小豪家の士族商人農  
家のを御新造と云ひ  
其他ちあつとんと云  
ひ内儀とも云ふ内の  
儀則を治むるとりお  
義をり何ともそれぐ  
の品くらぬふ由唱  
つも異をさばなり心  
むく風俗まやも違ひ  
ありさきは賢より賢

一 跡あり心よく討死を遂り

けり妻赤橋氏之を聞悲しき  
やあつとなく冥途中やり己  
小自害せんとせしを人々小留  
めらま且護る者のさびしく  
て暇をりまけさあらんさらば  
も年月を送り其翌年即ち建武  
元年五月廿四日河夫英時が一  
周忌あつと日追善作法のお  
とく行をひ後ち此歌を讀む  
自害し身すかりけりそのあ  
らうぎりの堅きと増荒雄も  
愧ぬる

續女

下

臣

鏡

天

下

二

二



俊惠法師

俊惠法師の  
あまのこころ  
のちのこころ  
ひびき  
はまな

西行法師

西行法師の  
あまのこころ  
のちのこころ  
ひびき  
はまな

寂蓮法師

寂蓮法師の  
あまのこころ  
のちのこころ  
ひびき  
はまな

佐介貞俊の妻

佐介貞俊の妻  
たのしみ  
人のこころ  
たのしみ  
命せられけむる寄依の僧と



あうのこころ我より上  
つ方の心をも風俗と  
見たりひよりそめふ  
も下さず卑し心  
た風俗をすりあ  
からむ  
但し今を上つ方と  
ハ云へ藝者女郎の  
卑しきりのが奥様  
とすり者あれば  
より品うたれ  
見極む  
風俗とい進退挙動の  
変なり分小過たる衣

皇嘉門院別當

皇嘉門院別當の  
あまのこころ  
のちのこころ  
ひびき  
はまな

式子内親王

式子内親王の  
あまのこころ  
のちのこころ  
ひびき  
はまな

殷富門院大輔

殷富門院大輔の  
あまのこころ  
のちのこころ  
ひびき  
はまな

裳髪飾りせしと云ふ  
いわりぞ衣裳くま  
りももむいふ適ふ  
を善くも後令バ資本  
百圓の商人の妻が万  
圓富けんの内儀と擬  
ひ判任官の御新造が  
勅任官の奥様似わ  
どの衣裳髪うさる  
をか小過する驕り  
後々を大なる愁の種  
となるぞうさるれど  
これ身の分限を知  
らぬあわれねども女

頼み臨終の引導を授けし時  
不貞俊累世傳ある刀一振と  
封の遺書とを其僧に託し古册  
贈らんとして請ひ遂にのりて  
自盡せり僧則ち其品を最  
期小着したる小袖とを携え  
鎌倉小下り妻と尋ねて與へ  
くば妻悲嘆して此と見ると所  
夫の辭せよ  
みおのせあふ付かきあいで  
らゆるもの思ひやうたあて死  
と何れけむの思ひやうたあて死  
し同蓮華の上生まん贈  
らむかて忽ち自害したる

貴女

女用文類

十五



後醍醐攝政前大臣

ひり  
うねん  
さむらひ  
あやめ

二條院攝政

あつね  
あまの  
あまの  
あまの

鎌倉右大臣

あまの  
あまの  
あまの  
あまの

子を美きか上りも美  
かきと一目の華美ふ

奢りよ流きやと故  
なり東京の風を他の

競ふく其風を真似  
も競ふく其風を真似

京の風も上つ方を格  
別中等より下の衣裳

結びやう髪飾り身で  
時行風と云を大低芝

身を

人の痛

大内の室貞子



貞子を大内左京大夫義隆の室  
なり義隆都より上り三歳小及  
びくふ日ごろ寵愛せる妾も  
屋形の留守に在けし貞子よ  
り小袖の留守の物をたすむ  
文細々と殿の久しく在京玉  
ふをさぞ待遠あらめ何方も

参議雅経

あつね  
あまの  
あまの  
あまの

前大僧正慈圓

あつね  
あまの  
あまの  
あまの

入道前大臣

あつね  
あまの  
あまの  
あまの

貴女 更用大臣鏡

郎權妻の風を真似た  
るものも艶ふやき

しき上つ方の風をあ  
ら言を茶屋の女房

下女もたの賤き風  
品を軽蔑笑ひくすね

是を東京の人も他縣の  
人も此所由をばや

てかる賤き風を見  
ならひ給てきたる

其分をゆりゆく目ふ  
たぬ風俗をな給

心をと言やう興小此  
歌を書て入らまう妻られ

を見貞子の嫉妬の心つあを  
かりあけ其情のあやを感て我

身殿も愛せらるるも斯る有が  
なき御方の為身が眞理のわ

どもをわらうと己小尼となりんと  
せを貞子き傳へくたう

さる禍をからんも知るかこ堅  
く最むらましく語らむ

暮さましとを尋常の女子か  
らめわのうなる變更を惹起さ  
ん貞子の心んぞ







も人と生きたらんも 嗜まざとも嫉妬の心  
のい是を辨まへ知り なく慾まなく情ふ  
て萬物の又長うたふ けい物を憐れ心も切の  
ろむうさる様したま ぶうら優美かものあり

起居進退

○起んとするは右  
の手と膝の上も置き  
左の手の指さねを  
膝のさねお着け腰と  
なてあがり足のつま  
さねをもたて右の  
ひざと少しく上ヶ体  
のたろよーたぐひて



勝頼の室  
武田勝頼の室ハ北條氏康の女  
あり勝頼運うらむ紀元天正十  
年三月田野天目山の麓に楯籠  
りて討死の折柄内室の方へ秋  
山紀伊守を使として申遣  
けり一門の運命今日を限り  
と思ひ候御身の女性おなをん

左の足より起



○歩に様を両手と  
膝の上へ揃へて  
をもち縮めど肩  
と平らかり腰を  
屈めど胸をさす出  
さぞ踵を地おつけ  
静ろ小歩むべ

小あまのしに限りな  
りあり嗜まて  
心をなを優あやさ  
く玉

七 化粧の支

紅粉翠黛を女色とい  
ろくら具あく日本支  
那あても古今皆是を  
支とを眞氏揚貴妃衣  
通姫小野小町をそと  
め化粧せあとの歌  
お讀詩お作り物の書  
よ見くらされば紅

ハ幸ひ小田原の路より送り帰  
し申さる此後つらある方へとも  
身と寄玉ひ一期を安く過さ  
せ玉有り有けも内室之を  
見一樹の影一河の流も他生の  
縁しやりすを相馴らるりの他  
年を経恩愛のやと氣色よつきて  
思ありのと情を御とばるふと  
返支細々と認めく使をうら  
間を敵せ來うて矢玉電の如  
くありけも御介抱の人々立退む  
と勧めけと今果も身のまらん  
せう矢玉を恐るふと公達を刺  
殺し心より小自害さるぬ





○坐り様を右の足と少し進めて跪まつき左り膝をそろへて右のあしを指あかしくねく坐り両手を膝の上に置べし  
但し貴人の側も

○女を髪のためたからんそと人の目だんべうめと徒然草あも書きたねの女子の風を第ふ髪あり當世の結やう品々あれども大抵藝者權妻又芝居の女形かゆひ始め

捨女を京白河の邊り住りのなり夫婦久しく睦み暮しけるふ所夫をのらむ他妻を迎え愛せしむ妹背の川を浪たぐなり終に離縁となりぬ捨女は其家を出んとせし兎俄に大兩あり出り風を烈しく歩



白河の捨

く江戸までと両手の掌をまじり外へ向け膝の両脇を指さねとつく

○人を拜し様を両手の指さねとさへならぬ臂をつけむ両手の指しとつた合せし其上の額をつけ腰の高くならぬ様お背を平ふし拜するなりまじり子

てより流行するものなまの何をも其風華美おる申し直に見さめおるものなり尺それく似合しき



風小結玉少くはさる乍ら御所風士族風町

行難儀なるべき様なきは所夫捨女小向ひ今風雨とげし暫らく齋間を見合せ行よかると云うるに此歌を讀ん答へけむは所夫大う其心まへ感ト今さら其身の放埒を悔ひ遂小捨女をとり新婦と追ひ出り鴛鴦再び元の水小帰りこれより一層中むつりく一生をたのしむ暮しけしむ此時もし捨女小めぐる智徳をけむる覆水のごとく帰るさつらひ逢ふすしもの世の女子よくくろ得く

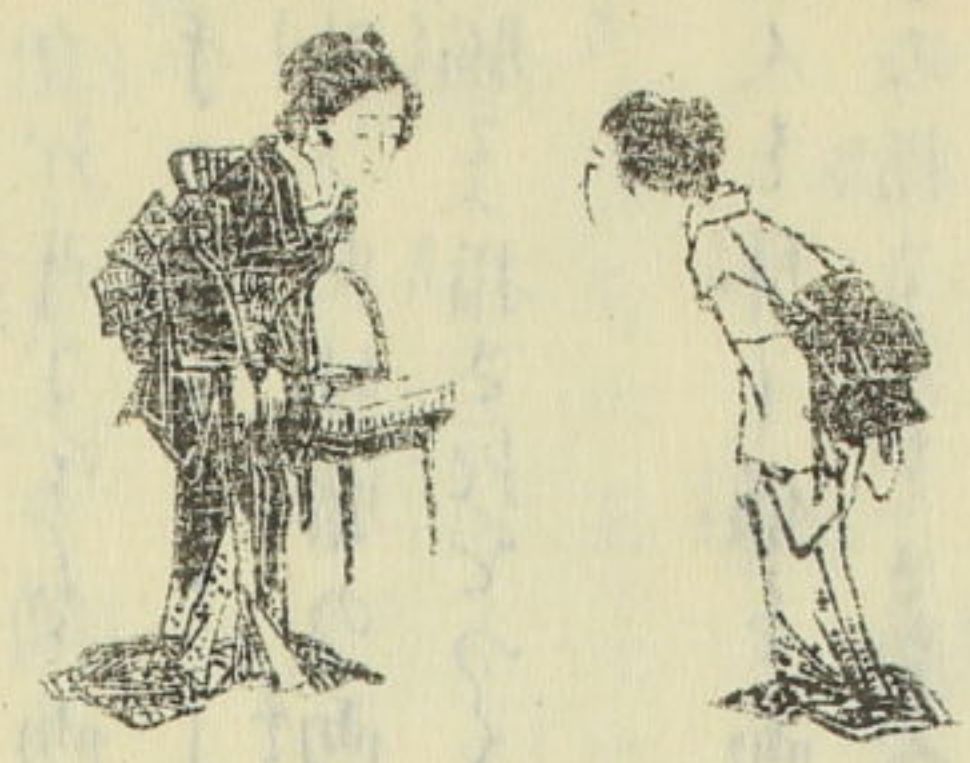
貴女 文用文姫鏡

卷之五

下



お依りたる人を拜せ  
るとは手を両手を膝  
かいらす下り礼  
まぐり又椅子におあ  
まゝ人お礼せむ時  
ら椅子を離せ起て



風と多少もまぐりの差  
別あまの角その丹  
の善風お従がふり又  
只管古風がよして昔  
のゆひ様もなる中  
若き女子ハ又格別な  
まの流行の風お従ひ  
玉いとい云いあやう目  
おたぬやうお結たま  
ふべー老たる人の癖  
とく我身の若うじ  
時の風を云たし今の  
風を誹るものなきと  
是も大なる邪じあり



辨の内侍を南朝の官女たり容  
色せふ比ひなるものねは高師直  
の爲に奪も武士どもお昇ま  
る芳野も出るしに楠正行の御  
所お参るお行合辛く助けられ  
る御所お帰りけむは帝感あ

そくー其脇ふよりて  
前の如く礼まぐり  
總て立ち礼拜せむと  
れを腰を屈むやも  
膝ならびお臂の曲  
らぬ様お心得ぐり  
○起ち還り様を右  
の手を膝の上お置  
左りお手の指さた  
と膝の脇おはけ腰  
を立ち足を爪たて  
右の膝を少しあげ  
まぐり右の座の方  
お向ひて起ち下座

萬おつき移りかたる  
しお髪風の風おかりお  
非を小袖の添やう備  
弁の形すて十年二十  
年の内あを悉くかろ  
りおあり變むおあそ  
職人も商人も營業と  
なると想ふべー  
○眉の剃つけ際をほ  
のうある遠山の霞また  
とへ又弓より月の入  
りもたるとさるを  
際たぬ様悠遠や  
てけむりしうらぬ

りて内侍を正行の宮のまこせ  
よと賜ひけむは正行辞うて  
とせせなからふさふおぬは  
候のちぬりいひておぬは  
と答へ奉り幾やもたつて四條  
繩手よく足利の大軍と討やあり  
数々所の手傷を負ひ一門と共  
小討死しけむは辨の内侍を正  
行を一旦君の定め給へる所夫  
たりなと浮世お立んとく忍ち  
髪を落し大和の龍門と云ふ所  
お庵室を構へ先帝の菩提を修  
し正行の冥福を祈り一生行お  
ひまをて果しと言ふ



還るべし  
但し座あつて模  
様みよつて左り  
へ披くとれば右  
の反對とまゝろ  
得べし

○人の前より後  
ろを通るあの上輩  
の人を下座の方  
の足より進みま  
づき両手のむねに  
をつまみ會釈をな  
し下座の足より起  
り通るべし同ト格

やうお心玉あべし  
額ぎんの墨を何ふ  
もわのうふ薄々とあ  
るべしさねむあふれ  
ふしむふも其まお雲  
井の雁の羽をのり  
霞をのりふ比ひま

○白粉をうもれがよ  
し顔をよしくみだれ  
く抹まひ光澤あり  
美濃くろぐとぬり  
耳のあたり鼻のり  
おむらくと残りたる

一休禪師の母



一休禪師の母を後小松帝お召  
仕せられ上臈かり帝不審と思  
し召あとなりて疊を上させ給  
ひつるふ一振の懐劍ありけむ驚  
くせ給ひつ此上臈お御尋あふ  
答申さく妾は南朝の者なつるが  
芳野の帝より君を弑し奉れと頼

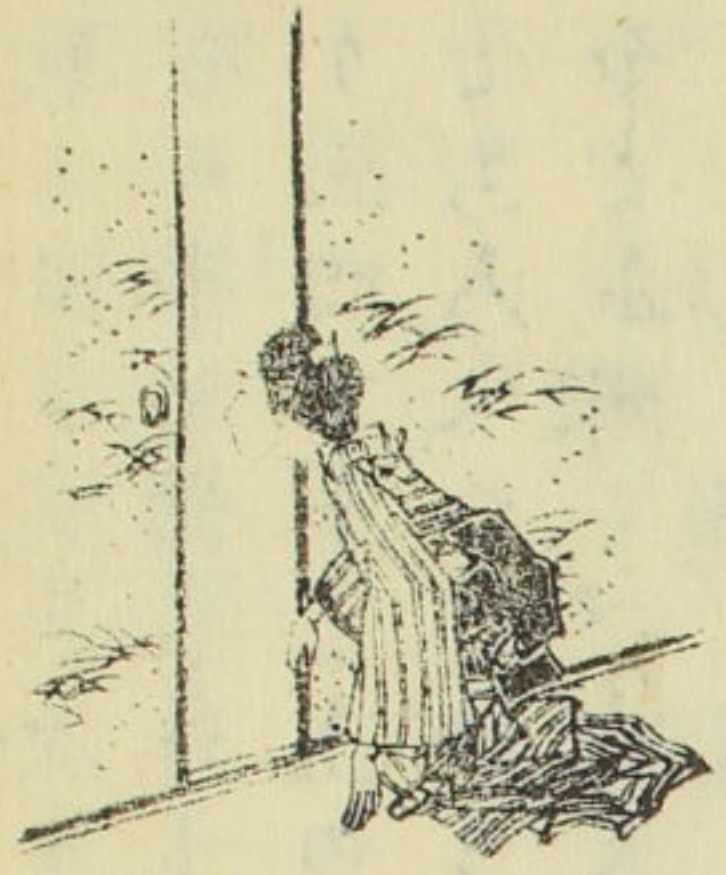
の人つち両手を膝  
の上より下げ會釈  
し通るべし  
○障子襖の開閉を  
まづ右へ開かん  
とせむ右の方より  
て常の如く跪つき  
左の手みく引手と

をみあつて記りのたうり



○鐵漿を毎朝まへ  
齒に白くけがたる  
と下賤女の支あし  
見らるゝたものなる  
總ト化粧を早朝の

少色候も君命黙止し一斯忍  
び入つてけ狙ふ奉まど是すての天  
恩海山小譬へく御情のむと  
も忘らまを斯く今日すて企を  
止り侍り今あらまを天命  
お候あひご御殺し下されと  
包すを申上たまふ其悲びまぬ  
志を敷感あつて武士お預けれ  
けむが懐壯のあり奏聞しけ  
し誕生の上を出家せしと仰せ  
下され此御腹一休ハ産色玉  
なり御母常々禪師を申けり  
釋迦達摩を忤履しりふかき器  
量なく出家も止させたりと





取り少し開き次り  
右の手を柵きの上  
り三四寸やど上の  
とあろくつけ能き  
やどお開くべし夫  
より起る柵を越え  
右へ廻り障子襖の  
方お向ひく跪づき  
左の手よくわらわ  
たして右の手あて  
開つらそべし但し  
左りへ開くは左の  
右の反對と心得べ  
あつかり人のつら  
起さるる顔あらひ  
髪おひ鐵篋つけ等し  
たまのべし朝ね寝  
とだも髪姿と所夫  
不見ともい無此上女  
のはちと知べし

樂器名所

琴瑟琵琶三味線を女子  
の弄あそぶ道具なれ  
ば其身縦へ弾トひら  
ざるとも名所を覚ひ  
置ざれば人の前あて



小谷の方を柴田勝家の妻女を  
り勝家賤が嶽の軍お利おく  
て越前の北の庄は楯籠り今や  
最期と思はせけむ内室お向  
ひ御身を信長公の妹おれ敵も  
疎畧より致さず何きありと身

○路行く行逢ふと  
き結礼のし様を上  
輩の人へ六七尺をど  
前あく右に斜めお  
一足ひらね両手を膝  
の上へ下げ礼をか  
しあつて其人の吾  
前を過さり玉あく  
後ち右のあしより  
進み去るべし同ト  
格の人はい三尺か  
ど隔て互ひお右の  
方は斜めお寄り一  
礼し同時お進み去

恥をかきつるは故  
其圖を出し名所を知  
しむ

○琴を樂器の一つあ

と占へ聖賢のりてあ  
そひ玉ひりの琴は  
瑟の二ツなりが秦  
の世の時蒙恬と云人  
筆を作り十三絃あり  
弾せられ此法日本筑  
紫の彦山お渡りて傳  
つたり善道寺あて  
仏法書お用ひらる  
より筑紫等と唱ふ世

を委せ玉と云けり内室涙せ  
き敢せ世も情多かりとをのた  
すののろお妾と女おまて子  
矢の家お生きたりあまのあ  
あめと所夫を身救めし敵お  
降らんや死なすべりんともい  
させ玉と縦容とて最期の酒  
宴を催し盃をあぐる折柄時  
鳥をけり此歌を詠せ勝家  
も打笑ひし  
夏の夜の中おちげけり  
かく吟トつ男女三十四人居並  
びく城は火をうけ自殺せしとぞ



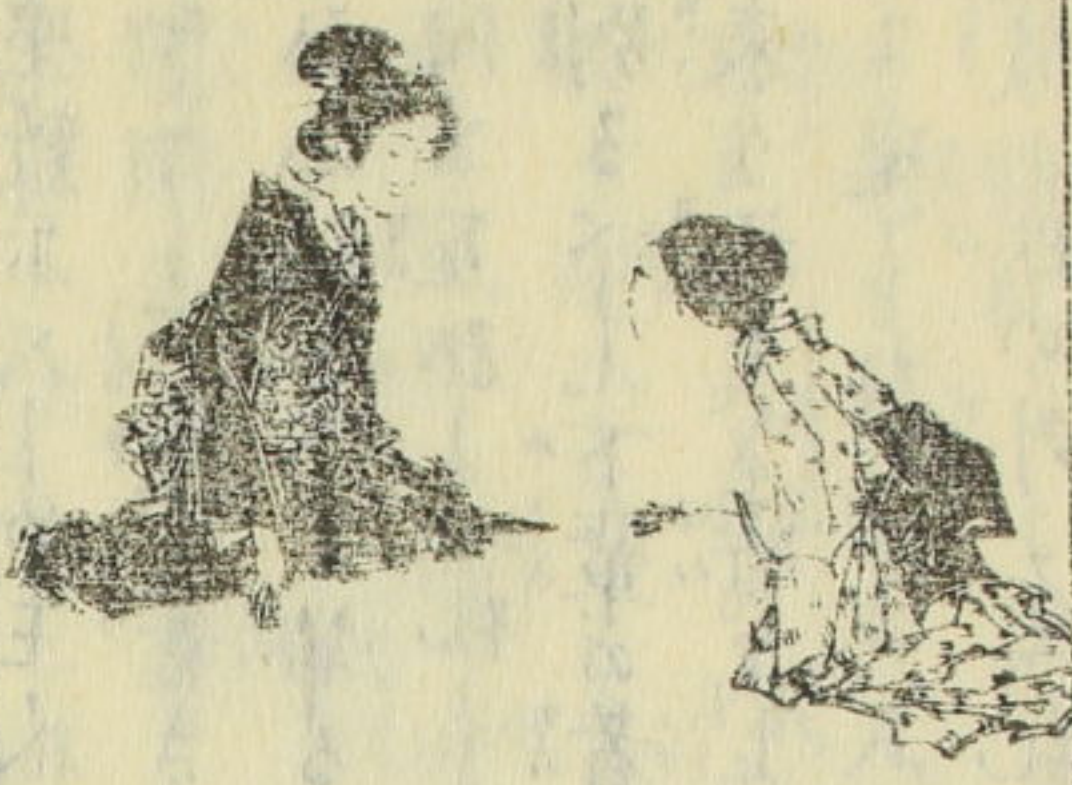








再び礼する時う両  
手の指さきびつき  
て一礼をへ



都て上輩同輩への  
應接の時も床の向  
ひ側を客の座あ

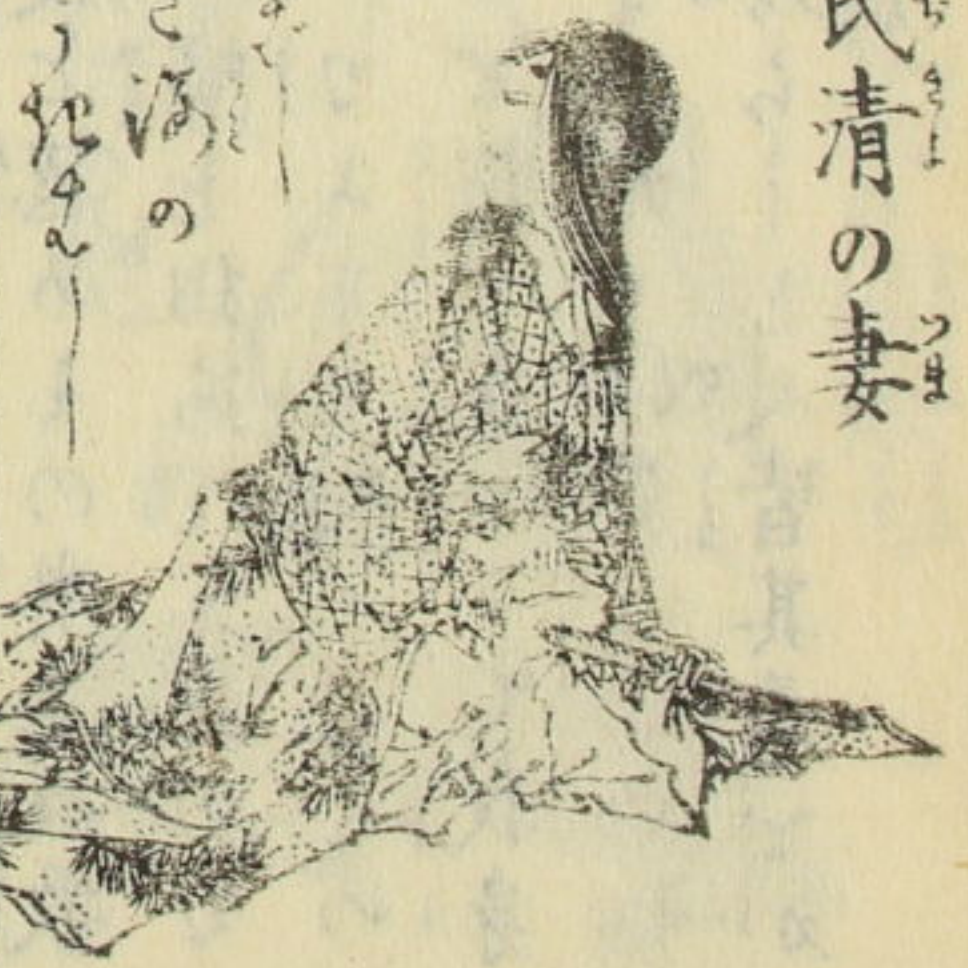
龍角つたり糸  
らと枕糸と云ひ真紅  
紫とあり向前一總  
をたる糸をつめす

上よかざり糸をかく  
龍腹よ大磯小磯の名  
あり寄木のかざり有

舌を龍甲よせつむし  
り山田流よの菖蒲  
箒と云ひく紫檀又を  
角なとの飾あ

○琴瑟も樂器の一ふ  
て古くより天子公卿

山名氏清の妻



沈むる  
かな  
越ん  
るのうたの

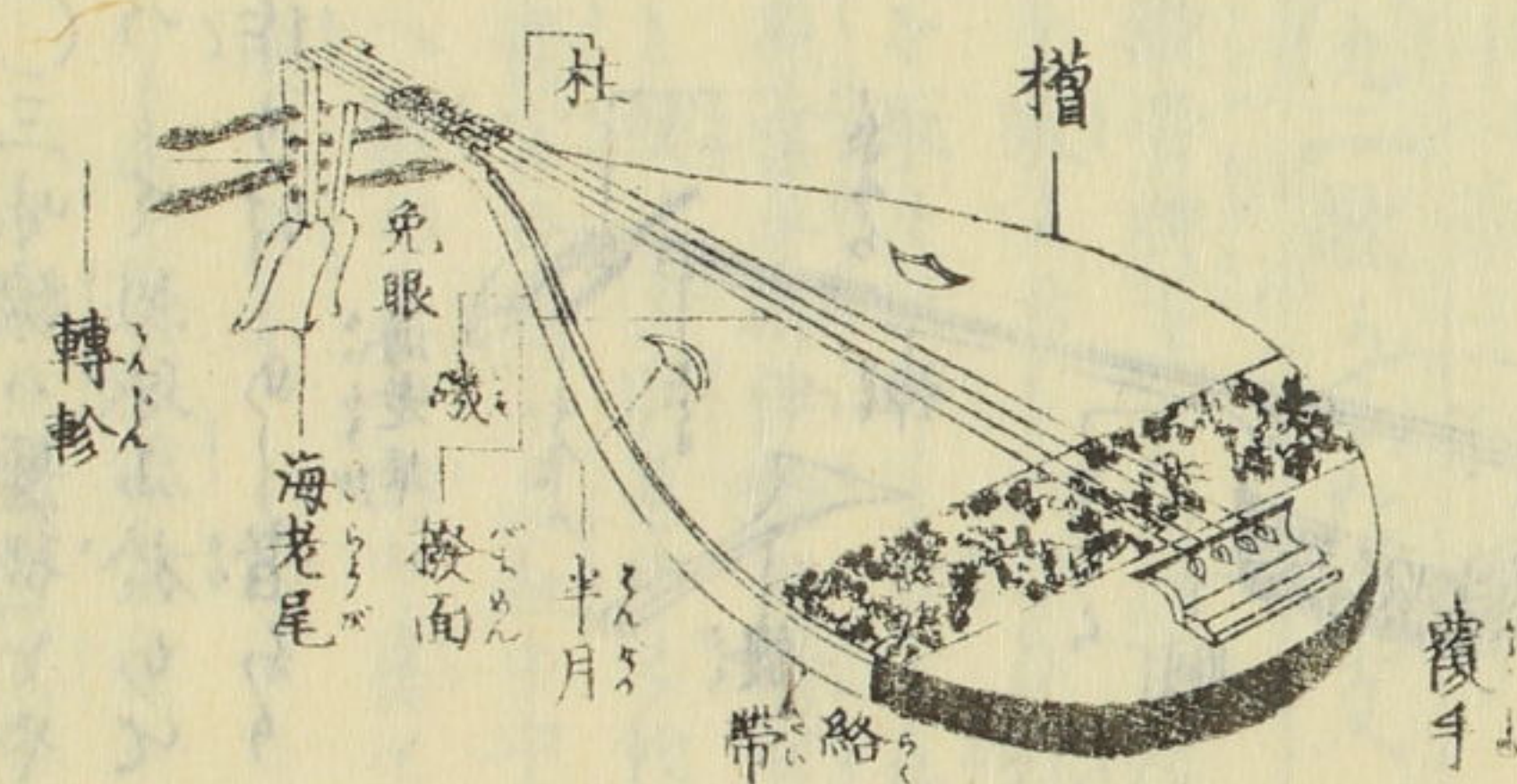
山名氏清の妻を氏清明徳の戦  
ひ破れ討死せしと泉州の堺  
ありしが此地敵陣近しと郎  
等とも輿小乗退ぞけけるふ  
妻を敗軍の恨みふ堪へず輿の  
内あく自害せしうり皆々驚き  
介抱し樂々と進らせける折

て床の有りと主人  
の座ありと心得む  
べし去り乍ら家  
より床の附く種  
々あまはるなり前  
の様不着座の出来ぬ  
しなり其時をよと  
き様見計あべし

○煙草盆進らせ様  
并ひみね様をすい  
煙草盆の内お火壺  
を客の左の方ふ  
唾壺を右の方うて

○物品薦櫛

のもてあまび玉ひ  
ののあり

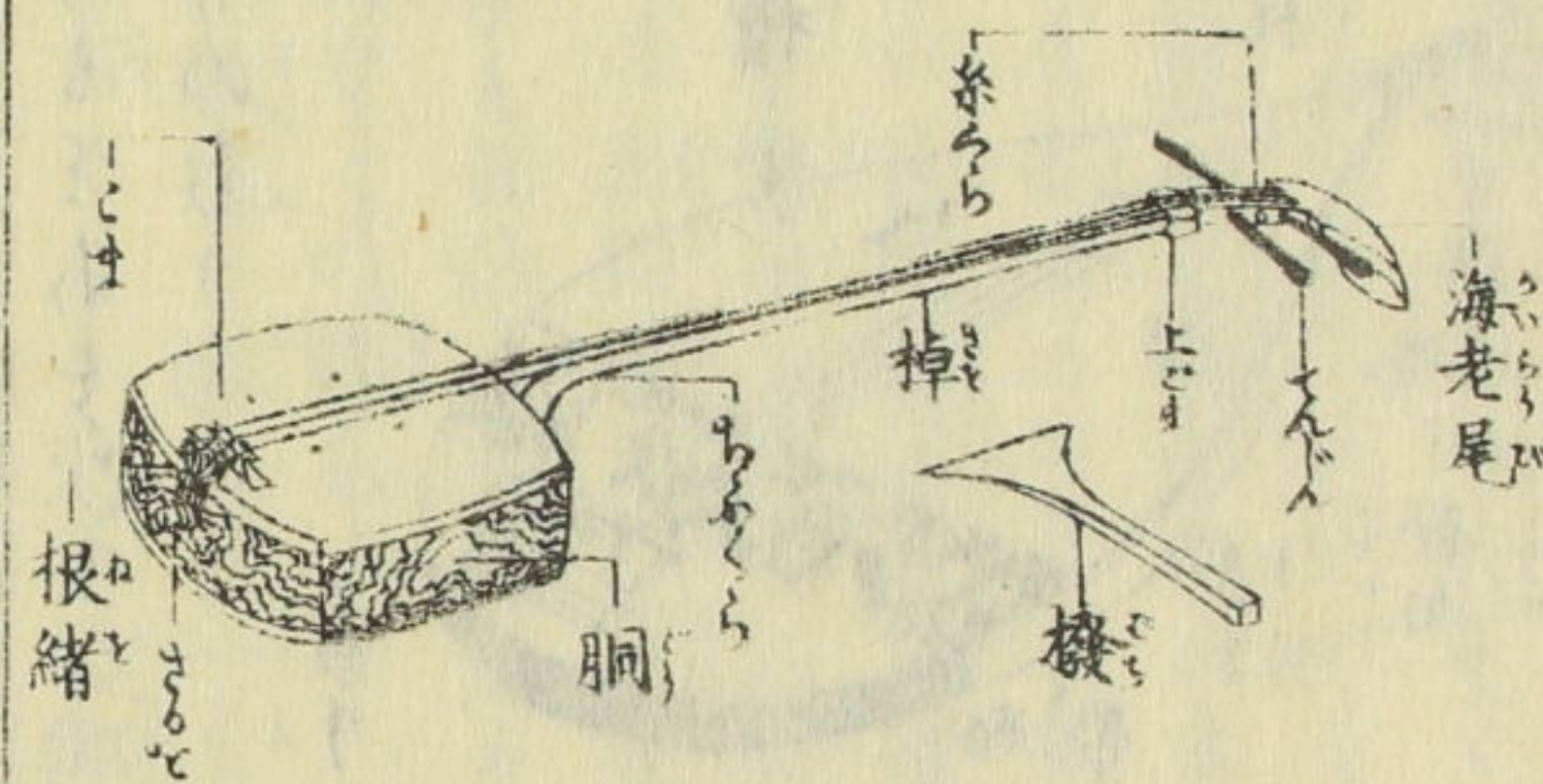


しも子息左馬介同し則落延  
者之を聞て取て返し母の傷を  
勞もく小母大叱り對面を  
許さば局を以て云けり人し  
しと勇あはれ士ふあき子と  
しと孝あき子しゆらば現在  
父の討死を見あがり逃る者  
を我子ふあらま怒り罵り  
其休息を絶ふけり然るふ手  
放ぬ物あり人々不審く思て之  
を尋ふ所夫氏清陣中送り  
し書翰あり其輿小歌あり  
しりるをいふと男持り引て  
此傍に我歌を書きありしとのふ



之を両手に持つて  
客の前へ跪つき  
少し進め上座へ廻り  
て起ち還るて  
出る時は前のて  
煙草盆をき手  
前へ寄せ両手を持  
て還るて  
○火鉢進め様をら  
び小収め様は大くた  
煙草盆と同トをり  
火鉢のあらニッあ

○三味線ハ琵琶とや  
つて玩球ハ於りて  
作りけめる者あり



八千代ハ京島原の遊君なり  
致のあらやらならのとあらに  
心をくし艶々水竹の業も精  
重雅親王此頃法体ふておしり  
けん僧となるを好む王と  
也常ハ髪を剃り小戯をも



るののいニッと上座  
の方へ向けニッと  
座とふら置づ  
又耳ありのい耳を  
左右ふふら据を



○茶進らせ様をら  
び小収め様を茶碗

其音深声をもはとそ  
樂器ハ入る

九 歌うたの支度

歌骨牌をうたぐた  
を取と云もはつひね  
を取と云づ昔ハ在る  
原業平卿伊勢の齊宮と  
契り別れのとに  
齊宮の方より盃の中  
へ歌の上の句を書て  
送り玉ふ

玉ハ相馴奉り下結ハ閑らし  
くけ鶯の衾をもらひけも或  
と化親王ハ

年甲斐國ハ流るて玉ハたれ  
ハ八千代ハ悲し堪を主人ハ暇をも  
て俱ハ甲斐國ハ至り朝夕ハめ  
冊を進らせ辛苦と同くした  
後ハ歸洛の恩命ありけもハ  
再ハ都よりと得親王法体ハならせ  
玉ハ其身ハ尼となりし

貴女ハ用文臣竟  
長三之世  
二三



茶臺ふ載る兩手  
小持く出く客の前  
よ跪つて進むら  
を客直ち茶枕を  
取らるる臺を以て  
還るる客直ちふ  
取らるる時を臺の  
下置て還るる  
又客の方を臺の  
取らるる時も同く  
心得へし

○菓子進らせ様并  
び小収め様を菓子と  
し

十 香をさく支  
○香の火を炭團の製  
一方を胡桃の売松  
さ此二品をより焼  
てうを糊あかため  
用ゆべし

鳥井與七郎の妻  
河合安藝守  
の女なり羽夫與七郎朝倉勢敗  
軍の折り父と俱小計死せしよ  
しを聞き自害せんと覺悟した  
る小早敵兵とだち入て狼籍し  
げふ此妻の美麗きと見く捕  
とりわし雜兵ども各々手とめ



鉢小盛を多と膳小  
居へ兩手小持く出  
で客の前より跪つ  
き進らせし進らせ  
せ方を煙草盆小同  
ト収むる時も同く  
心得なり

○香炉の火を炭團の製  
一方を胡桃の売松  
さ此二品をより焼  
てうを糊あかため  
用ゆべし

此女云けし様  
此上を力ふし尚身の望も不達  
るらんされと母や婿上の定め  
案し玉らんおと一筆知らせ參  
らせを其後免も角も玉ひ  
りしと硯をたひ受て文を以て  
と認らぬ之を届け玉それと使  
と出し其後雜兵の隙を見て那  
邊の井戸に身を躍らせ死し  
けし雜兵ども周章あせり  
井戸より遺骸を引あげ詮を記  
あしして天晴貞女を殺しけし  
と心なき荒男も其涙と流  
し尊く葬むりしとぞ



一旦くきと下小置  
き右の手あり右の  
隅をとり標題を客  
の方へ向けて進ら  
まべし収むる時を  
両手と向ふへ取ま  
る前の如く持く  
還るべし但し書物巻  
物ありと相應の臺玉  
載り出を時とまれ小  
準として知べし

○料紙硯箱進らせ  
様ありと収め様  
硯箱の上小料紙

香をきくべし火強き  
時を香と雲母板の真  
中よありを片隅にお  
くべし衛士うごと云  
ふなき様の時を火を  
強くとりて真那班ふ  
との惡き香とまきく  
火つけんを見よくな  
りたる時ととりて善

九重 の川  
かきりよきをき  
香案  
湯の川  
たもひ

九重を新吉原江戸町西田屋の  
遊女あり京都五條の生きたり  
家貧の爲に賣まを江戸不來り  
けしが朝夕をなく古郷の父母  
を案ト常々絶えを安否を問ひ  
又いひの衣類を贈り  
孝行をつらけり餘り不遠く



を載せまきと両手よ  
て持て出るは前小  
置き料紙と載たる  
す其蓋を取て右の  
脇小置き蓋の内小  
模様ありのい仰む  
けく置きまは上小  
料紙を載るべし水  
滴を取る水と注ぎ  
墨と磨筆と墨汁よ  
浸し而して硯箱と  
客の方の向け両手  
あり進らまべし収  
むる時を硯箱で手

○香とまきく左りの

父母よ聞るを嘆ちて此歌を吟  
トあふ其孝心や神明よ通しけ  
んりくも賤しき遊女をうら感  
心の名歌なりと將軍家の上聞  
は達し勤の身と御免ありく不  
思議もも苦界を逃し自由の身  
とありなりおげを實は孝心と和  
歌の徳を貴くらむして高位の  
御耳よ觸れ禍を變トて福とな  
る神田白龍子九重のみを聞  
て斯く讀で稱しける  
なぐくせよあはれあはれと  
あまのや川竹の  
あがきくむも

貴女 文料 文語 鏡  
三九



前へ引寄せ料紙  
とも引寄せ硯箱の  
蓋をあけて元の如  
く持て還るべし

陪侍周旋

○燭臺扱ひ様を燭  
臺のさそと右の手  
持り臺を左の手  
持り出で常の如  
く跪つきあはれ

べしニッ出まると死  
上座の方よりつゞ  
下座へと置くべし但  
し三ツ足の者ハニッと

指三ツを香炉の底  
あて人指しゆび一ツ  
さへさへつゝ様より  
たしきく人大勢なれ  
む上座よりさへはけ  
一とわり通つて又  
返して二度つゞくべ

返して二度つゞくべ  
し人数十人より上  
きハ一通りあてた  
つゝ香をさへお鼻  
さあらく手まで薫  
すねた又手をか  
あてつゞくべし

さあらく手まで薫  
すねた又手をか  
あてつゞくべし  
殊女子を見らる

元姫

ひよき

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ

かみ



元姫と山名の郎等喜家九郎の  
妻ありしが應仁の乱ハ所夫九  
郎出陣し此を最期の戦ひと思  
ひけり  
そのねてもよと何ふと  
かみひさやかきなりけり  
世のみをれが

上座の方へつゞけ一ツ  
を下とし且燭剪け  
あつものい其うたを  
下とまへし

燭の剪やうの燭臺と  
左りの手小持右の  
手は燭剪と持すが  
ら燭臺を漆く進み  
出で燭臺の前へ跪  
つき燭臺を下り置  
き燭剪と其上に乗  
夫より燭臺を両手  
あて引寄せ前の如  
く燭臺と燭剪と



椽あはれつゝ内へ入  
るまきつゞ風を忌む  
かり殊さら扇つらひ

と此歌を髪に毛よ海  
送りけり元姫廿といふ年の  
春なつて是を見くみづから黒  
髪をお切りて此歌をせりそ  
つゞ返更しけりつゞわらわ  
く所夫討死せしと沙汰しけり  
を今を何をし思ひ残とべし  
せり所夫の冥途やらん侍  
たすめらぬいざ追つき奉らせ  
むし持仁堂へ入りて高らるふ  
称名念仏して潔きあり自害  
て貞烈の名と後の世すべし傳  
つあは



持て燼をきり再び元のぶくく燭臺と



進らまへー  
○小袖羽織の類着せ様々常の如くたみたるは両手おて左右の袖口を把小指をそけ内より入

あしはあしをり  
○一香ききりのち龍涎香春日野を焚とたの雲母板を換るたらる一總て名香とさきたる雲母板をたぐづのらま前の名香わくふ香の移りて善悪を失あつてあり

十一 習字の良

文字を唐山の蒼頡とくくく人鳥のわい跡と見え作りくと云ひ

歌妓竹松



竹松を西京三本木の藝子あり文久の末のころ天下の浪士西京小集りては頼三樹三郎橋本左内等の人々ふりて聘せらる常小尊王攘夷の説をきりうはあまふ薫陶せらるる懐慨悲憤の情を起しあはれ吾も

き扱指と人き指とあく襟を持て引立右のわいより立袖口は手と離し左りの手より着せやひらまへー

○袴の着やうの常の如くたてを向ふ後の腰板を向ふへ垂る前組を左右に分け前腰を両手お持て進らまへー  
○掛物あつらひ様の掛物と掛竿とを相

傳ふさきふ手と書ふとと馬の跡とすあると云ふ文字お真草行の三通りあり

貞孝

右を真とも又楷書ともいひ

貞孝

こまこと行書と云ひ

貞孝

これを草書といふ

男子なりせむと思ひついで折故贈從二位木戸孝允公末と桂小五郎と云ひ頃西京小在が彼の元治の乱の後ち幕府の追捕密に身を遁るる處ありを此竹松うひりるも家の床の下に潜し置れ三食も紙の色をこ送り養ひ不思議も命を全たあせられ新の後公青雲の望を得らるる其日竹松を迎へて内室と為し再生の知遇を報せらるぬ公述去の後ち髪を断り貞松院と号し今やとめを度さうへた

貴文

長

三



應の臺に載せて持  
 ので「まゝ」の臺に載  
 せど「まゝ」の臺に載  
 軸の中程を持ち右  
 の手は撰筆を持ち  
 あがら軸の端を  
 へ持ち出るも「まゝ」  
 床の前より「まゝ」  
 臺と右に置き軸を  
 右の手を取りあげ  
 左りの手は「まゝ」  
 「まゝ」の「まゝ」  
 の間「まゝ」の「まゝ」  
 を把り「まゝ」の「まゝ」

法大師行文字を和げ  
 る女子の爲「まゝ」は  
 を作り玉ふ凡そ女子  
 るいろはと「まゝ」書き  
 のありとも「まゝ」物語  
 を読む昔「まゝ」を知  
 り新聞を讀て世間  
 「まゝ」を解す「まゝ」王  
 章と「まゝ」我心を通  
 用「まゝ」調の「まゝ」れ  
 「まゝ」初め「まゝ」る  
 いろはより書「まゝ」ひ  
 後「まゝ」文章「まゝ」つら



やまき女

近披き床の上を置  
 風帯あつものち右の  
 方より「まゝ」の「まゝ」  
 及ぶ「まゝ」右の手は  
 撰筆を把り撰筆を  
 「まゝ」此時左の手  
 「まゝ」撰筆を「まゝ」  
 程より「まゝ」で披き  
 右の足より「まゝ」折  
 針へ「まゝ」筆を左の  
 脇へ「まゝ」け左右の  
 手「まゝ」軸を持ち坐  
 り「まゝ」ら「まゝ」披  
 き「まゝ」二膝退て「まゝ」

ぬ男文字も「まゝ」覚  
 なり誠小人と生「まゝ」て  
 書を「まゝ」ぬ「まゝ」を明育  
 文盲と「まゝ」む縦へ筆  
 の跡「まゝ」つ「まゝ」から  
 とも文章「まゝ」つらねよ  
 「まゝ」文字と「まゝ」て第一  
 と「まゝ」べ「まゝ」能書「まゝ」て斯  
 何らんを元より結構  
 の「まゝ」たり昔「まゝ」の女  
 子を賤「まゝ」た女郎の身  
 みるも書「まゝ」つ「まゝ」文を  
 作らぬ「まゝ」稀あり往昔  
 名高学者貝原益軒先

貴女  
 三十二



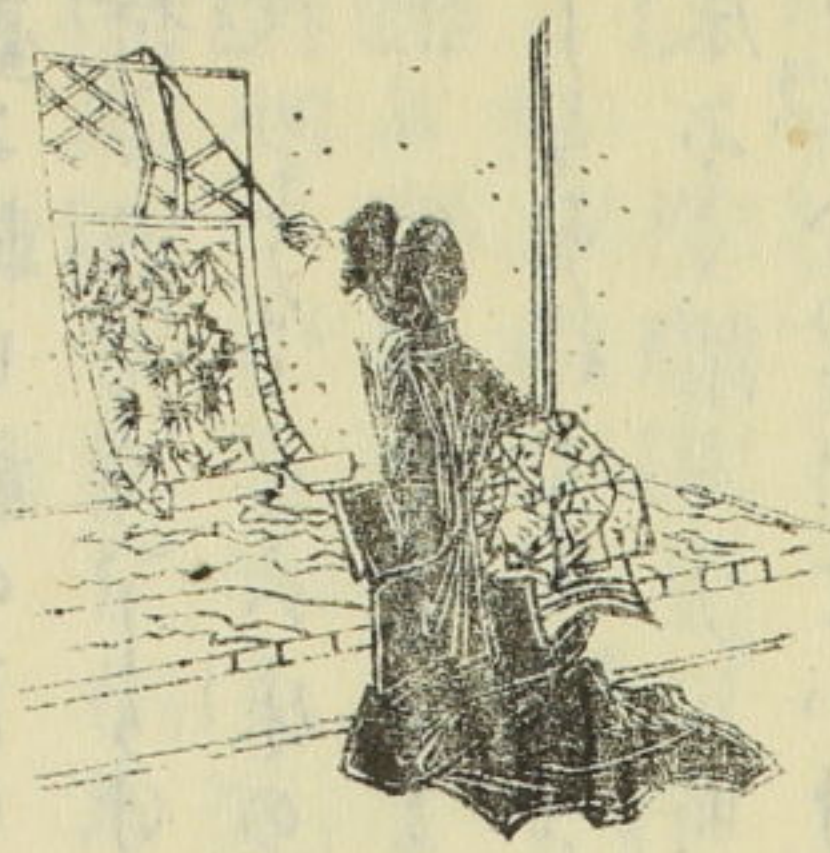
至宝 女用 女鏡  
 再び竿を取らば立ち  
 前てひづらを直し  
 又退て跪つと一覽  
 位置よりと思を  
 次は竿を臺に載て  
 持てくぐり収む  
 時を撰竿を臺に載  
 て持て臺より時  
 を竿を右の手で携  
 らべ床の前は跪  
 つた臺と右の方  
 置き竿を取て床の  
 右のかたに立て兩  
 手よて撰物の軸と

生京都遊學の時折  
 々島原小遊び小紫と  
 りふ遊女も馴と一  
 年たちを歸國の時小  
 ぢらさじに痛く其別  
 と惜と己が姿を画  
 子し其上  
 姿をくづりしはせ  
 づかしく心  
 筆もあつと  
 と題したると妹女郎  
 ちや吉野是を見  
 先生を尋常の人非  
 卜妻も一言贈らん

望東尼  
 望東尼を筑前黒田の藩野村新  
 十郎の妻を賢ありてたけく  
 嘉永よりあはれ幕府の政道  
 正しからを殊あを西洋人が日  
 本の乱をかき幹に乗る  
 種々の難題を主張を遺恨と  
 天下の浪士と謀るあり



取く巻をのり立ち  
 程すに處あくと軸と  
 左りの手は持ち竿  
 と右の手は取り  
 拭緒を弛し二足不  
 ど退く跪すに撰  
 物を其より床の上



とて車の上  
 夢野のひびくは  
 の流るのい成あつと心  
 ほくも人あをいれ  
 せかかき總て男  
 何れいれいの  
 らと我のい  
 知と古の仏の自  
 靜あんの中を  
 いと云んも  
 儼わくし神の愛  
 きんあんいの  
 あんじんを  
 をあひひ

げもい遂不審と蒙り慶應  
 元年十一月捕らぬと姫島と云  
 ぬ處に流さる茲にあつと三  
 年同ト三年の春心つらも  
 島と脱走長州のつらん  
 ぎ遂も同年十一月六日周防  
 國より身すがりぬ年と云六  
 十二支其孫小定省と云ふ者  
 り祖母と俱に尊王攘夷の議を  
 せしけり捕らるる慶應三年  
 獄中死を辞せしむ  
 うに雲のすむもやらぬ  
 身をたも海のあつと  
 せしけの

青女 女用 女鏡

夢野 女用 女鏡

望東尼 女用 女鏡



不置き竿を臺に載せ風帯あるも然も左より取り収め右よ及ぶづし拭物を巻つらし左の手も持ち紐を右の手もて元の如く結びく臺に載せ前のしく持ち退るもくし床の扱めするもくし床の上のちらざるもよ

いづれも用ふまほあぢきもまじらるる見原氏より書かたり遊女をら斯る舉動あり人の女子又ハ妻女たるの結此心掛をて叶ふたからを殊よりうたから書きて文章と艶おのしるくはるる文をえまへ其人を見ねとも安心とすやまの優美ありひやらるるの

松子水戸の藩士田丸稻之右衛門の長女なり父を武田耕雲齋烈公の遺志を嗣尊王攘夷の念を貫ぬんと藤田小四郎等と共に同藩の奸黨を退げんとし兵を起したる小與せが運命拙なく戦ひ敗ると



田丸松女

授受捧呈 辭令書授け様を側小侍の人授くべき人の名を喚上隨ひ其辭令書を右の手も持ち左りの手も添く字を向ふの方小を之を授く其人拜禮するも然領て禮を受べし

なり其為習字玉つと云ふをらねども縹致うはくくとも書のつとを人をも心かきし人あも疎る者あまなり故女子の藝を習字を第一と呉々も朝夕あたらけ玉あを習字を急よ上達せんとするも長習ふをすとい昔小野道風と云能書の方江ある人より

京師に登る小のを松子も手なと長刀とあう一方と切ひらに父に従ひ處々あて合戦なり遂に越前の木の芽峠あさ雪路を塞ぎ谷と填めこれ雪ならぬ兵餓あかき兵士も凍え疲を勢ひ窮せりたも加州藩に降参せり已あて慶應元年幕府の手も渡され越前の執賀あ諸兵あわぐ刑せらるると松子もこの小誅さるる時小年十九才あり

貴女女用文外鏡

三十一

三十一



前より両足を揃へ  
一礼し右の足より  
二足より三足  
より程す処  
より前より辞令書を左  
の掌より右の手  
を添へ敬しん拜し  
載き左より二三足  
退く足を揃へ右は  
手より右の端をも  
ち左の拇指より順  
次より披き一見し  
元の如くたす中  
より右の手より

手本書く玉と請  
まけま道風古筆を  
澤山箱小入る贈られ  
し其古人古筆を丹望  
よりあらば手本のあと  
なりと重ねて申しけ  
ま道風の玉ひけり  
此の如く古筆のつら  
様小心をもち長く習  
ひすば遂に能書小な  
るふんと申されり  
かやこれ故に我習ん  
とぬふ手本あつた  
きまふ心を入る習ひ

田村の子  
いの子を江戸神田明神下の煙  
草屋田村某の女を水戸の藩  
士関矢之助と云との佐野竹之  
助等以下十七人と一時の大老  
井伊掃部頭を討ん為江戸お潛  
伏する世の疑を避んためら  
く此いのを妻とて徒らふ日を



十二 文章の良

ち敬礼し上座に  
披き退く夫より  
椅子小倚り扣へ居  
る時左の手を膝  
の上より置き右の手  
小書を持ち膝の上  
より置たり又懐中  
に入るも妨げあ  
二通も三通も一度  
より授けらるる時  
前より做あし数通を  
一時小受け一通宛  
あきを披き見たり  
たるを順小下し重

玉と後々い必せり  
し宛書となりぬべし  
文章より男文章女文  
章とを別く別り有り  
て詞づつひも自くら異  
なり四季とりくめ文  
ならび小祝ひ又を吊  
ひる他贈答の文は  
何らすい本文より  
ねるもともとの宛  
ふし玉ひてを何日も  
同し文よりぬりし

送りけり遂に萬延元年三月  
三日櫻田ふ於る本望を達し自  
首して熊本藩小預けらる死刑  
近きふありと沙汰しけり  
始め天の助の斯る大望あり  
し人と知り親の難儀小遭ん  
と嘆と一ツあり矢之助が恩愛  
浅くはるをと思ひ起し継ひ處  
を異ありとも同くと死して未  
だも解らんと他更ふあし寄  
親しんるる暇をつげ駒込の  
香華院小至り称名念仏し潔  
く自害したるける實小商家  
の女あり珍らし宛女子ふる



ね而く右の手小  
持ちかへて敬礼  
て退くべし。又一通  
づつ授けらるる時  
先小受たるを見  
りく懐中へ入る再  
び前みく受たるを  
一見し後ち懐中  
何と取つた一係  
せく右の手小持  
換へ

進饌程儀

○二汁五菜七菜膳  
部式

からきさむの文を作  
らんあとも心げけし  
まづ女文章を作る小  
伊勢物語竹取物語源  
氏物語あしと閑の徒  
然ふ其文の様を浮べ  
おれ玉も綴ひ夫小  
似よりまとも自くら  
艶ある詞の出るも  
なり又右等の物語り  
書を見せしも女文章  
ふいづくすやも女  
子らした文章をわが  
もいけは然るふ今の



時子  
おねく  
かち  
なり  
あはれ花白  
散るるやまき

時子を水戸の家老武田伊賀守  
源正生の妾なり伊賀守の齋明  
公即ち烈公に仕つく文武の道  
小長ト赤心報國の志すし小尊  
く其君尊王攘夷の議を思ひ立  
ち王ひより側小侍りて力を  
添る夏まきふくらむ烈公逝去

出次小二の膳三  
の膳を出るべし客



食更小就く後ち列  
肴を出し飯汁一二  
へん替りたると記  
小酒を出るあまを  
中酒と云ふ而して  
酒一廻りくる時も

貴女  
文臣  
文臣

女子をとりのまむ内  
のち下々のりせと  
云べきを家来又下人  
僕と云ひおまねと云  
ぶきを以來自後と云  
ひ師匠と云を先生の  
先生家と云ひ男ら  
く又右の様を語を文  
小用おべきと誠小  
聞づらぬ限りなりよ  
くく心得玉へ

十三 九々の聲

九々の声を算術小必

文臣

の後をかを其あつてを成  
んとせし同藩の奸黨市川三  
左衛門朝夷於太郎等小阻てら  
を刺さく不義の名を受りり  
遂に兵を起して是等を誅せん  
と常陸の筑波山野州の大平  
山小戦ひしが幕府の援兵の爲  
に敵力を得りて軍さ敗きて  
京都へとこころを時と云子も  
道とら合戦つて後ち俱小  
加州藩に降り田丸松子等と同  
く越前就賀ふく刑せらるる死  
せり正妻小あらむして生死を  
俱よむを得がら女子と云べし

三十一





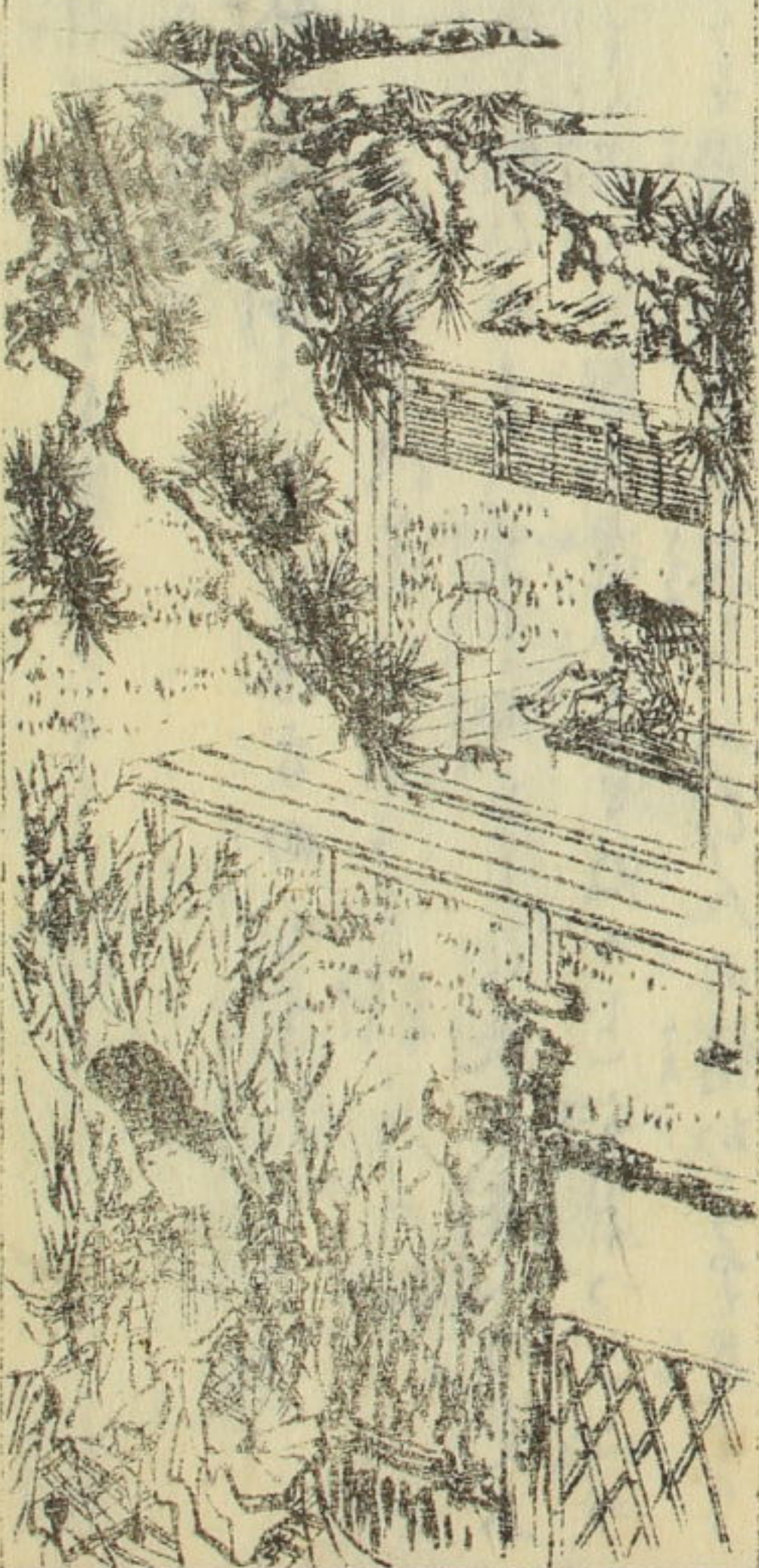


座にまゝりて立も  
行なはば配膳の者  
も二行よ客一行あ  
ら配膳の者も一  
行たるべし退りて  
ハ上座の者かつて  
次座の者の脇を通  
るとは次座の者  
つて一畧式よは下  
座の者より順ふ  
べし膳部を持ち進  
らるる時ならひ小  
退て還るとは皆

和歌を天地のそとめ伊邪那岐伊邪那美の二柱の神  
天の浮橋よ立して美哉善少男とのたすひと始め  
なりしをねども言葉定まらざる素盞高鳥尊  
の出雲國あり稲田姫を姫り玉ひ一時  
ハ雲よりあまの御魂つらふはつらふはつらふと  
と詠王ひをばめとをなかく歌を我國の風よ  
て神代のむらうの管の根のふく傳り今絶  
とよまを讀らうかゝる者ら貴うを高く絶  
交りしと簾几帳の内よ居るのら國々の名所と見  
男女の中たちたり猛き武士のあつらをも和ら  
げ目よ見ぬ鬼神をも憐れとあつらをも罪ある人も  
歌の徳よしり身と助くる例多し女子ハ殊よ  
讀らひたすべし容貌のくも歌ふとよた

右の如くなせし以  
下一々記さす  
○二の膳三の膳進  
らせ様ハ本膳も同  
ト二の膳と客の右  
よ三の膳は客の左  
りの方よ置べし  
○引肴進らせ様と  
肴を重箱又鉢ふ  
盛て膳ふ載せ其内  
よ箸を入る但し手  
前の右縁みうけんし  
て出る客の前めて  
膳の上座の方斜

すふときけを優く艶く押のけりめをれば其  
女を男の見限るあつらもめありさす妹背のか  
たらひとちたは三十六家撰よ出せる白河の捨女衣  
手をとのおとろ又むらう在原の業平河内の高安  
とのふととろ隠し妻ありと志めびく通されけ  
る其妻さらふ妬むあつらもめも異夫の  
りやせんりと思ひく河内通ふありて庭のかさ



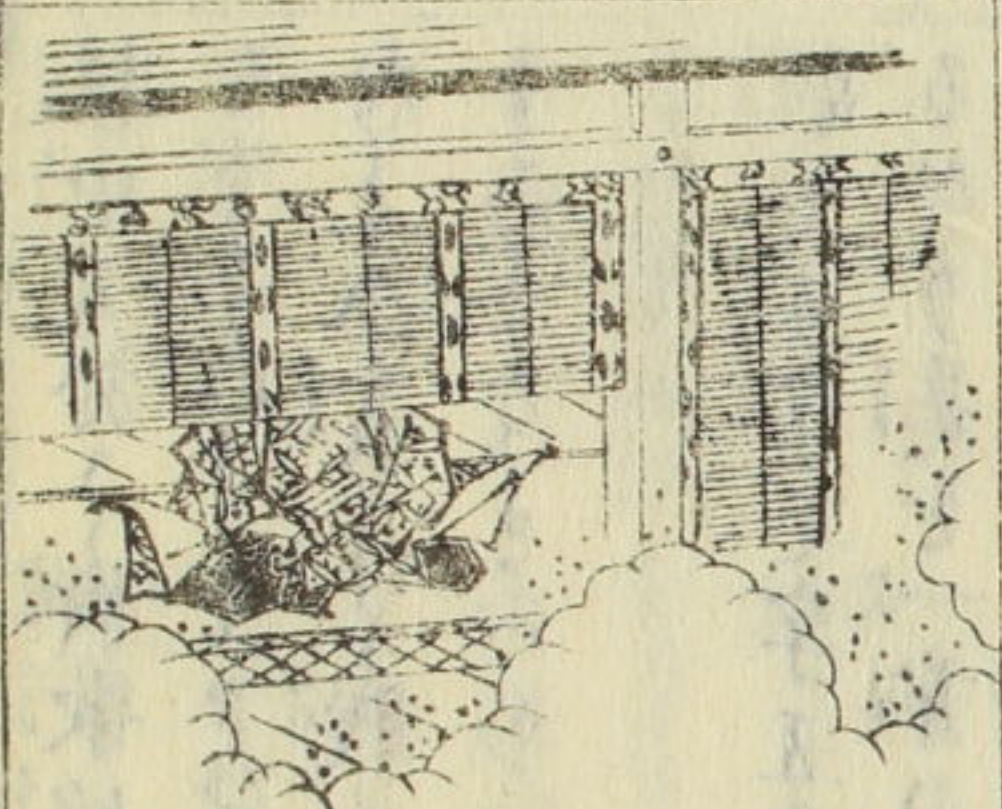


お置き両手く吸  
物椀の蓋を取り肴  
を盛り進らせ下  
へ被まき次の客へ  
も右の如く進らま  
す  
○飯を替へ進らま  
るふち臺に飯鉢を  
居へ其手前ふ抄子  
と置き蓋を取飯  
鉢の脇にお立ち飯  
椀を左の手で持し  
糸底を拵指と人さ  
し指らふち摘と他

隅に潜り様子を見  
とどろいだ  
風がうらやましい  
夜あけはあけひら  
と繰返し歌ひけ  
て路に盗人の難  
わどろそ優け  
河内通ひを止  
倉の頼朝卿ある  
門前を通りけ  
のちうらやま  
と遊むと仰せ  
つる息はつと

と返歌申しあ  
と宿と見よと  
の妻なりけ  
去らんと  
女房去るべ  
思ひとより未  
とあんなも  
頼朝卿や  
梶原源太左  
梶原源太左  
櫻の返歌  
梶原も  
とあんなも  
頼朝卿や  
梶原源太左  
梶原源太左  
櫻の返歌  
梶原も

の指を伸く平  
もち右の手と添  
受取り二三抄  
り盛り左の手  
持し糸底を離  
手あき進らせ  
の蓋をなし臺  
て下座へ廻り  
座へ還るべ  
○汁を替へ進  
様を盆を持  
の正面へ前  
受退きさ  
汁を盛り替蓋













○取肴進らせ様を  
小皿盛り膳よ居  
へく出る客の前  
膳を上座はくへ  
斜め置き両手で  
小皿を取り吸物膳  
へく後膳を持



右の如く縦へもくそと切まべれりて止る  
「膳の音いたんくくさるぬきとるを膳を控まへかれ  
音よまきくす師の漬の能たういかにや神のぬきとるを  
ゆさやと切まべらんと止る  
神ひらいて結びぬれぬきとるを春さうの風やうらん  
春たてば花やえらん白雪かきまはる枝よ常ぬきとる  
此類ま古くうりたり創あるとと知べし

又  
「哉」はなを云ふ種々ありうる哉中の哉ふま  
「若」のあゆりうりて常く長くもつなとおもひげり  
中の哉とい  
「畏」まる幣のなまきりて哉又の門まてと思ふあまれ  
かく三の句はなまり中ふあるなり

○本膳二の膳三の膳  
を撮棟を酒吸物と先  
小出したるとはの式  
なり三二膳と向とよ  
り出たる膳を先へ

「横」まきまきいりぬきり尾のなまきりり  
うく心の残らぬとふれあうの哉といあなり  
「らん」うり疑の文字を置らんと止るなり前よ出  
せる例の如くあていつまいつてささういたるの  
がひの詞を置て止む

○湯進らせ様ハ湯つ  
き右手を右の手小  
持ち左の手を下小  
添へく出ると進  
むべし

「雪」ののりたるたあて撮花の小散ら風は吹らん  
「山」は春の麓を恨めきつれ都のさうおをうり  
「て」てふ三あり詞の外よ心の残りて上へ心のうりて  
ひなをがて餘情を含むて  
「よ」さらば散りてい見山梅花の盛とありけあて  
是ららののりてなり

○抹茶進らせ様を  
茶椀を右の手居  
へ左の手を添へく出

「目」くまきり何人かあよ木を嶺の嵐はまはけりして  
是上へ心のかくしてあを  
「梅」のひらきうりふかりる都のけを月やそりて







手の指さねをつとむ。用を化時ふ動うぬ様あまふ。又客の顔とながめ居ハ失礼なり。仰々を俯々をさし客の方へ心をとらむり居べし。

飲食程儀

○茶の飲様を茶碗と右の手ふ取り左の手を添へ吞といりて臺の上置べし。

○菓子の喫様は懐中より紙を取出し箸又

是ハ露のうらもとめし。心あり

「も」その字の止つらあり前よ出せると又るの字ふて止るりの多し。花どちうぬ。月どやまらふの類あり。きかき止るる。夜どまびし。トせ止るる世まをふまめ。の類なり。其他五十音のそくぬつふむの文字までも止る例あり。

「こ」こそと云つゝあけてぬへめえれゑの字をどま止るなり。ありとこそまげ。君をこそす。此類まで餘をかき知るべし。

「ぬ」ぬとぞんぬ「畢」ふ「不」のぬとてニツあり。ちうぬとも重とたのむせ梅の花とひま時の思ひでせんちうぬとぞんぬとぞんぬと詞なり。

まき道のくろまどとちうぬ山中まわつちうぬも呼ぶちうぬ那是ちうぬとちうぬとちうぬなり。

を揚子し菓子を紙の上ふ載けしを元の處に納め左右の拇指と人さしむびの先より菓子をニツ小割り左の方を紙乃上ふ載あきまづ右の方より食まづ。○膳うけ様を膳を据る人上輩の人なまを両手をついて禮をふし。同一格の人をまみ両手を膝の上す。下は挨拶し。

「う」うとニツあり疑ひのかくの通まらう哉。通まらうか。あきまらう玉。なまらうとかな。の類と疑ひのうなり。「つ」つとちうぬとちうぬのちうぬの月のまらう。神のまらう。まらうとちうぬのちうぬ。「こ」こまらうまんのちうぬ。「あ」あまらうとちうぬのちうぬ。秋葉のちうぬ。けり人のちうぬ。うつりもあ。哉の心なり。「し」しとちうぬあり過去。現在のし。やまのちうぬなり。「ま」まらうとちうぬのちうぬ。浪るふらう。浪るふらう。「は」はらうとちうぬのちうぬ。義のし。の字なり。「白」白はねわらう。雁のちうぬ。みゆのちうぬ。秋のちうぬ。ちうぬ。花のちうぬ。とちうぬ。あまのちうぬ。我業のちうぬ。ちうぬ。やのちうぬ。ちうぬ。の字。まらう。義のちうぬ。た。た。唯且不假餘縁と云ひく物のまらう。



下輩の人をよび挨拶  
ふ及むを



○酒うけ様を酌人  
我前不來らむト座  
の者へ挨拶し右  
の手小盃を取り左の  
手と添へ酒を受け

たるとたきびく用ゆるてはなり初心のうらみの  
文字のたらぬ處へたりくとわらぬきとも邪しくな  
まはせりしきまありたるありあきの月ぞのそわり  
の用ゆるてはなり

「だふだふいそれぞふ斯あふふこそいさもな」といふ  
心も用ぬすいそわをさも「わらんせめくそれぞふ  
斯あまう」と云ふ心も用ぬ

「是は海士社袖たよぬまをのを我うもち恨の袖をか  
まはせぬまをらんやとおうてく云い義なり

さつさつを大くさだよと同一心と知るべし  
くさだふあまもさへ 落ふたよ つゆさへなとふ  
くさるべし

「とい」といを句のおまうり用ゆる上へかつてふはあり

呑どけりく盃を吸ひ  
物の側小置下

○箸の取り様を右  
の手小箸をとり左  
の手を叙多々持

直一夫より物を食  
まへに但し箸を休  
むる時を箸を元の  
方を膳の右は緑小

くけ置き食し終り  
て膳を撤とけり緑  
へくけぞし膳を

内へ置べし  
○吸物吸様の右は

「さうりさ今らんまのやの雲のふくへさあまうと  
思ひまやあまのさうりさ今らんまのやの雲のふくへさあまうと

を皆返しくさくてよはなり又ありひまやあまのさうりさ  
上ああらば必らむといと止むるし心得べし

○又歌仮名文より仮名遣のやと必用なりたごへを  
思ひを思い知らむと知らむ紅葉とりと小川をか

うの大井川をわりのいかに書い皆謬りなりあふあふ  
豫る仮名遣の書物を備へおれ物うくとは小仮名づ

うひ小迷ひ玉もさうりさ今らんまのやの雲のふくへさあまうと  
漫りふかきさうりさ今らんまのやの雲のふくへさあまうと  
恥となすべし

○懷紙短冊の書様  
懷紙を清和の帝の御時よりありと和歌物語に見へ  
短冊を日本記にも其名見おきと今の製と同じきや







至  
物を左の手より取り  
右の手を添て取  
直し下を置き右は  
方の物を右の手小  
て取す様休を前  
小同し蓋を取の順  
飯汁平二の汁坪  
と心得る  
○汁の吸ひ様を吸  
物小同し  
○廻り物食様を飯  
汁再と飯汁を  
食次より平を食  
次より鱈を食次小

三首懐紙

和子  
 三首のや  
 ほのふ  
 春用  
 夏秋用  
 冬用

女子の二首三首懐紙の  
 圖の如くちりて書く  
 べし但し五首すてを一  
 枚の紙と認めその色より  
 上を紙をつまみ用ふ紙  
 を定まきそののなすと  
 つと大方を大高檀紙  
 ぬしく高さ一尺二寸五  
 分よりを定まきその方  
 ともが如しり大高  
 檀紙をき處より大奉  
 書を重ねの色よそのく  
 用ゆるもやむとあり

二の汁次り壺次り  
 猪口次り焼物と順  
 二食をばり總く平  
 より焼物より至り一  
 たり食をすすむ  
 飯汁を食する様  
 あり後ちすなり  
 の物を食すべし一  
 ずはをり後ち  
 心出かせ小何品あり  
 とも食すべし  
 然ども菜より直ふ  
 菜へ移り食すべし  
 らむ必らむめしを

懐紙の重ねおろあひのりくあきとす左の  
 式に従ふべし  
 春用  
 夏秋用  
 冬用

- 紅の薄葉 同紅
- 紫の薄葉 同紫
- 山吹 同黄
- 夕花 同青
- 白菊 同白
- 紅の薄葉 同紅
- 紫の薄葉 同紫
- 紅梅 同白
- 柳 同青
- 櫻 同白
- 紅葉 同赤
- 菊重 同白

横女  
 女用  
 女用  
 女用



食一 次ふすちり 此  
 物を食まべし  
 ○凡そ物喰ふも  
 慎むべきあと種々  
 何れも今そ最  
 も忌べき夏がらを  
 左に記を常ふ心か  
 けあるべき夏あり  
 箸をとりとく 鱈  
 を喰んう汁を吸ん  
 うと考へる夏  
 一 移り箸とて焼物  
 と食う直う煮物  
 移る夏

○うつろひ菊 同紫 同青  
 ○松くまね 同青 同白  
 右の外さあぐあり 詳くは重ねの色目といふ書物もつ  
 いづれ見玉ふべし

○女子の短冊を上句のまゝを一二字やどあまうく傍  
 小書と常のてらなりまゝとて何れも式もあり飛鳥井宗  
 世の説よれば御製も何れもかたがた人も自然よ  
 何れもかたがた短冊題をた下句を一字やどまげく書こ  
 とは常の儀と云り兼載雑談のた下句を一字さげてか  
 こ女房よかきる也但し又貴人なるといふも何れもとん西  
 「青雲を上なり」  
 紫雲ハ下あり

ふとやふる 秋の山はかき  
 い川のくさくさ 織い

一 もぎ食とく 箸小  
 付たる 飯粒を口う  
 てとる夏



一 ねぶり箸とて 箸  
 を深くねぶる夏  
 一 おみ箸とて 口中  
 箸とてねり込夏  
 一 おち箸とて 煮物

女子ハ名を裏よかくする

代筆の短冊を左の圖の如く表よ 讀人の名とくま  
 裏よ筆者の名と認むべし

志まほしき川はうらふ小神ぬま  
 わの心をいづる夏の世は中 たる

何ぐ書

○歌袋を詠草と挿し 柱かうけかく料のりあり  
 此小頓阿法師の造まる 歌袋をうらびふその折うたを  
 示すべし

但用紙を大高少くも 檀紙奉書よそもよ



汁の實など底小あ  
る者をあち起して  
食支

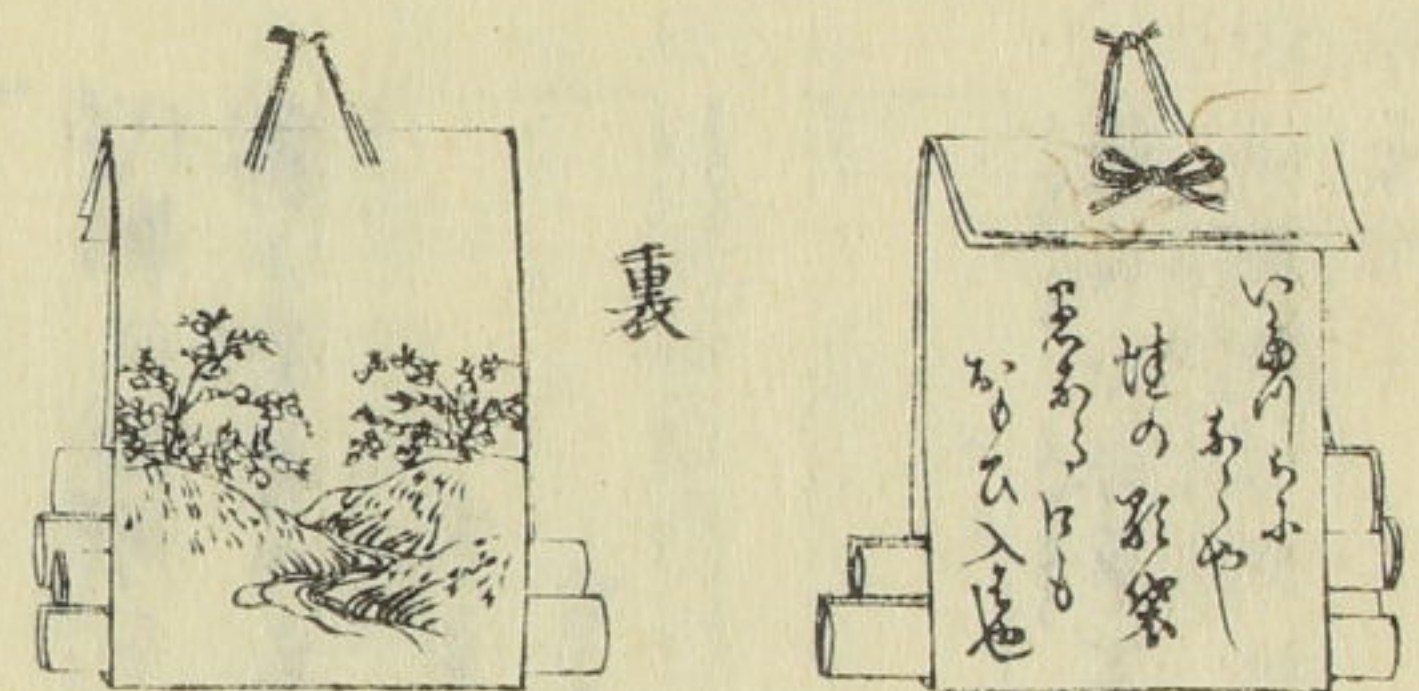
一さくら箸とくよ  
だ何ぞ何やと探  
りみる支

一そら箸とて食せ  
んとく箸よかけ  
一物を食ちまて

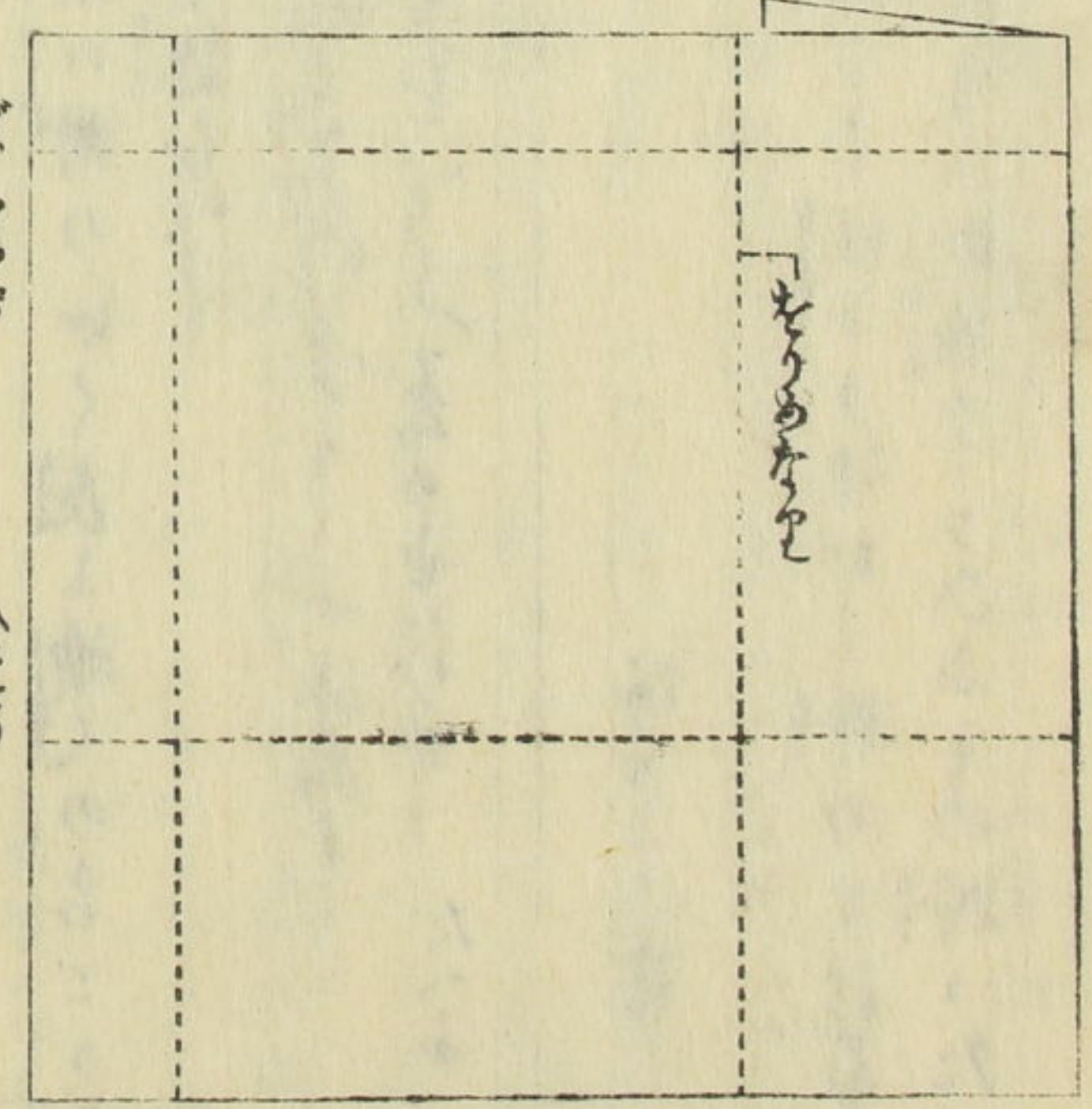
又かく支  
一うけ吸とく汁の  
督と給仕よりうけ  
て膳小置をまぐふ  
吸ふ支

膳おとく膳  
向ふ小ある者を取  
りまもせと箸とく  
直小食する支  
一箸よせとて箸小  
て腕又を皿を動ら  
る支

右の支ともよりく  
慎とてなまべうら  
○揚枝遣ひ様を少  
一脇の向き右の手  
よ揚枝を持ちと遣  
ひ右の袖あく之を  
蔽ひ鼻紙を出しと

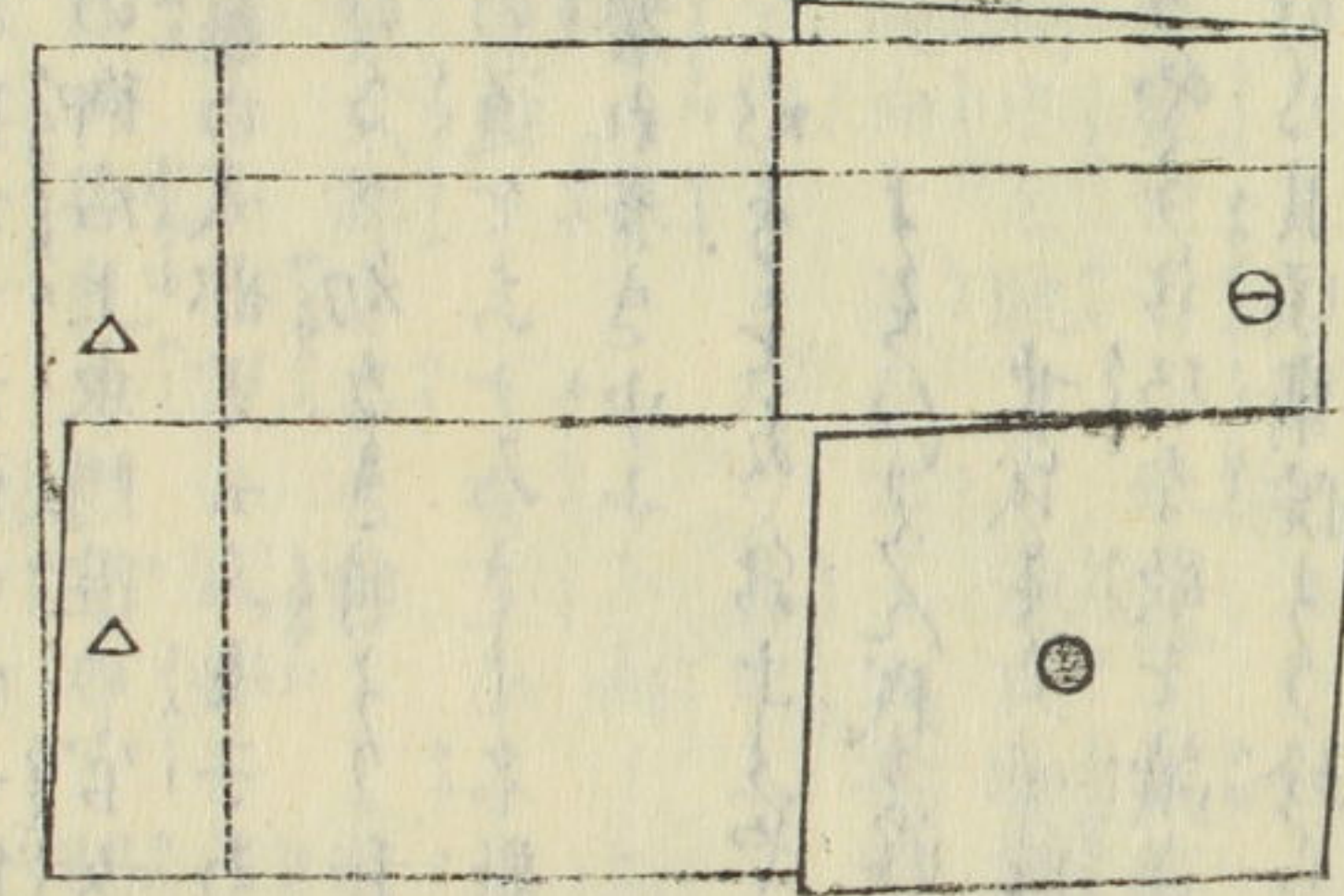


裏小山吹  
なままてかく



第一圖の如く一折とりて第二  
圖のおとくすこどりくつは小  
△印のところと○印を中より

第二圖



○印のところと○印を中より  
あむありさままの自然と  
袋となす上とどりく紅白  
の水引あてしと柱あり  
け置づ一但一詠草とけさ  
むと圖の如く  
○歌學必用の書目  
○古今集 ○和歌八重垣  
○言葉の八千種  
○冠辭令 ○和歌ふひやあひ  
○正誤仮字遣 ○組鏡中の心  
○萬葉摘落葉



口をぬぐひ揚枝を  
其紙小包と懐中又  
を袂へ入るべし但  
し久しう遣ふづ  
らむ  
○抹茶受やうを茶  
碗の底を左の掌小



居へ右の手を向ふ

源氏物語作者の夏  
人皇六十六代の帝一條院  
の御后上東門院の官女小  
藤の式部と云ふ女子あり  
ひるが幼なき時より和歌  
の道とあそびし名歌の  
譽れ多き中  
水多をみればよや  
よもにん我も深る  
世はまことしほ  
うやうの巧な歌を讀り  
ける其頃齋院より珍ら  
き草紙物語御覽らうたき  
よし仰せありしより式

部小物かたりと作らしめ  
すふ折節八月十五夜の夏  
なりしとを近江の石山寺  
の觀世音小參籠式部を  
湖水を眺み源氏物語の  
趣向を思ひ出さ五拾四帖  
と作らきたり其中おも若  
紫の巻をあたふ面しるく  
書たりとて誉玉ひしより  
紫式部と召しけるしな  
りさある説小式部ハ一條  
院の御乳母の子なり門院  
の奉りける時よゆのそあ  
る者なり哀きとわがしめ

○衣服の字  
緋袴 上被 汗衫 單物 振袖 下帯 合羽 胴着 腰纏 袂子 蒲團  
緋袴 下着 布子 帷子 吳服 拘帶 襦半 帶縊 手巾 浴被  
綿帽子 綿襦 綿入 小袖 浴衣 襦半 長襦 帶揚 缺掖 足袋 夜着

のちあつて受とり  
夫より右の指を  
茶碗の手前をあ  
他は指を向ふの  
伸し茶を三口半  
ふ吞りて下置  
○人の招待小應ト  
て行くと早きも  
遅きも然るを  
む時刻來らむ  
用事ありとも差置  
て行へし座あつ  
る主人よ挨拶し

部小物かたりと作らしめ  
すふ折節八月十五夜の夏  
なりしとを近江の石山寺  
の觀世音小參籠式部を  
湖水を眺み源氏物語の  
趣向を思ひ出さ五拾四帖  
と作らきたり其中おも若  
紫の巻をあたふ面しるく  
書たりとて誉玉ひしより  
紫式部と召しけるしな  
りさある説小式部ハ一條  
院の御乳母の子なり門院  
の奉りける時よゆのそあ  
る者なり哀きとわがしめ

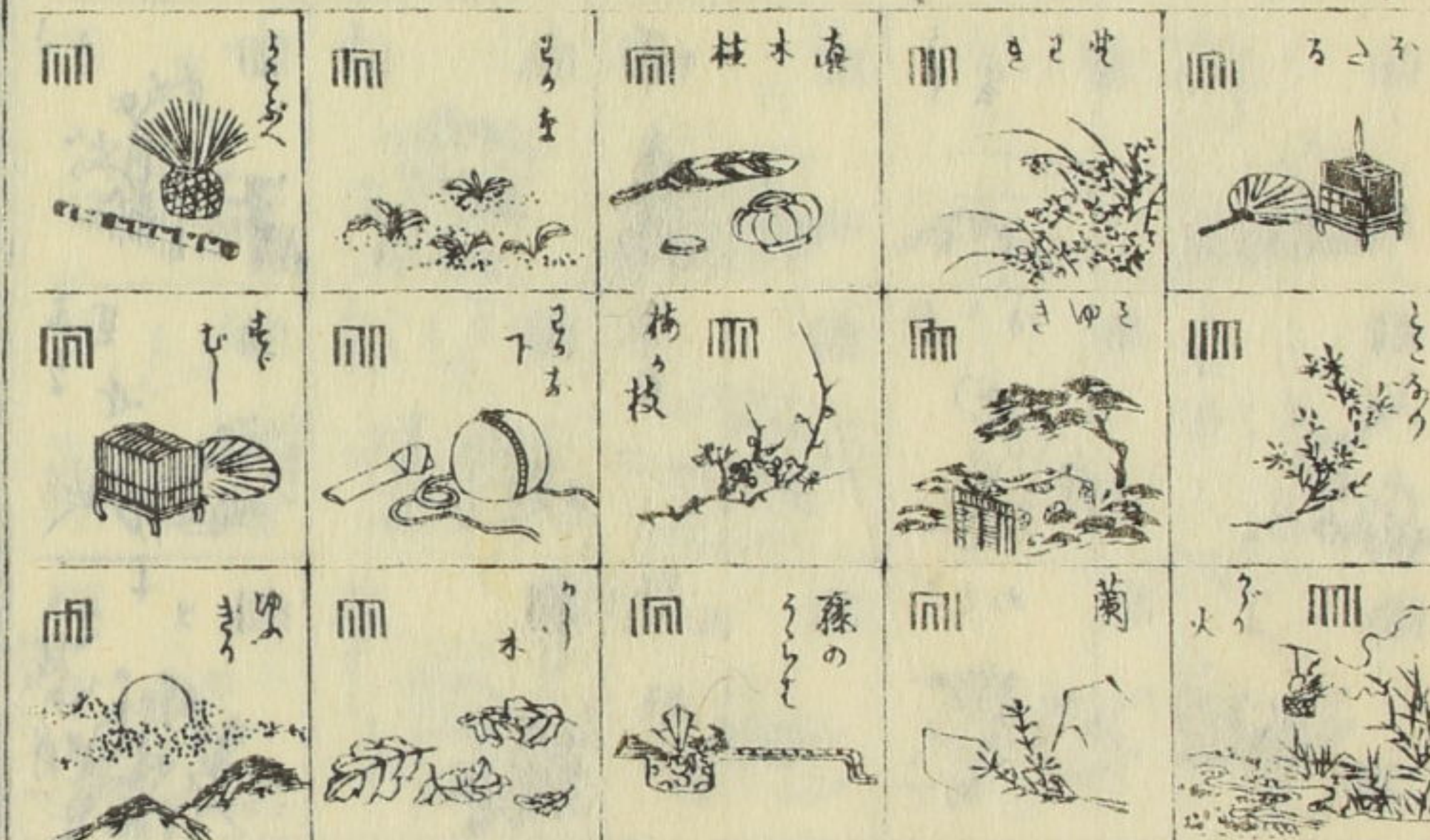
蚊屋 手纏 産衣 肌帶 被褥 純子 紗綾 龜綾 金襴 羅紗 生絹 雲絨 琥珀  
蚊帳 濕布 被衣 襦半 袴 綉子 縮緬 流紋 金紗 絹紬 絳緞 毛織 海氣  
綉子 綾子 羽二重 壁著羅 兜羅綿 天鷲絨 西洋布 熨斗目





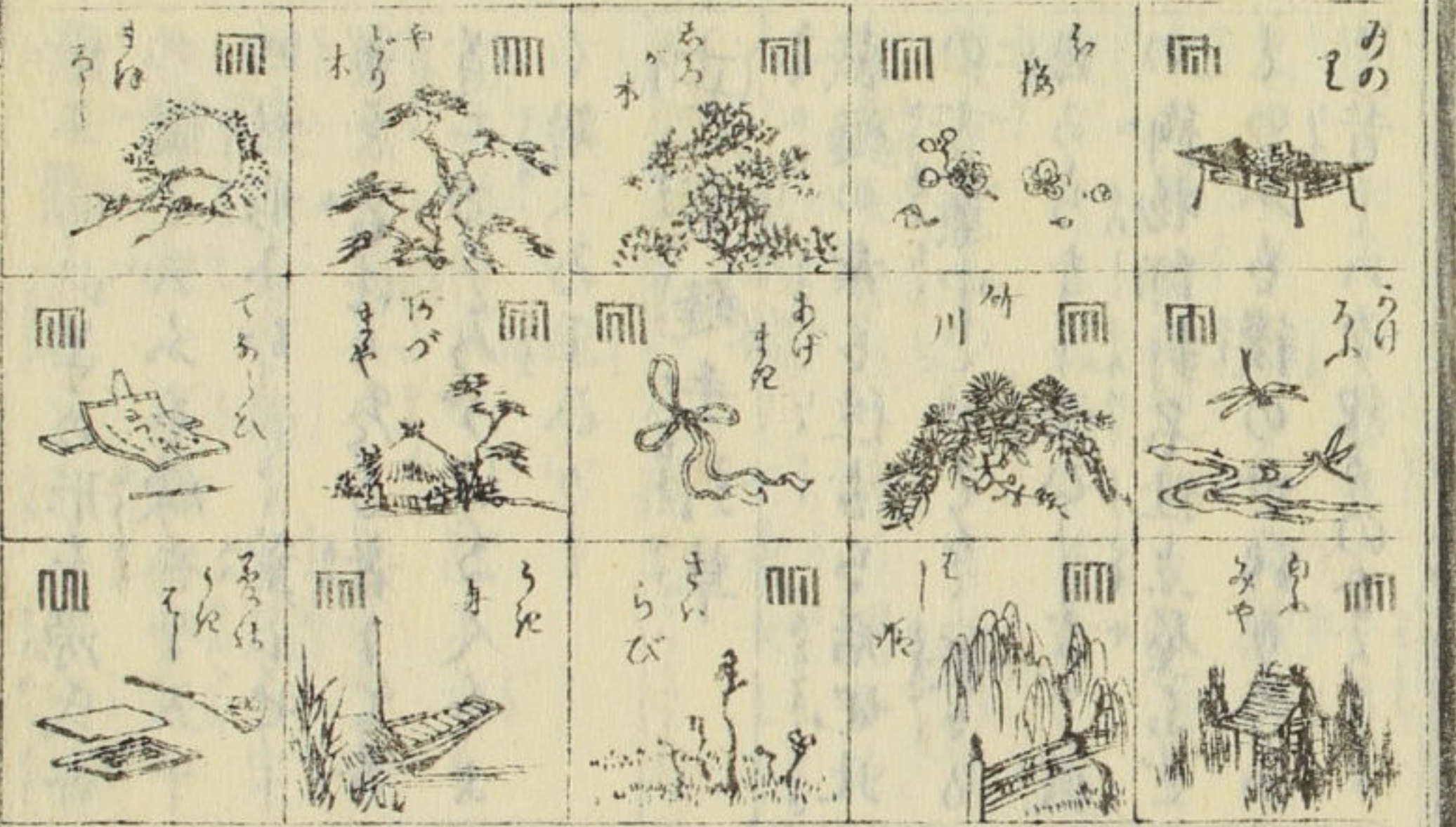


なく口重みなく  
かからぬ様小云  
べし殊小常は氣を  
つげと慎むべし  
賤しき詞づりひ俗  
の流行詞なと云  
らふ人の前を不  
圖のふ者たるを縦ひ  
人の云ふ詞ありと  
も聞づりた詞を云  
さる様ふ心くけふ  
又人の咄半は我も  
咄し出まると失禮  
り辛とも人の咄し



正更濃彌挑栗似鶯藍卯鶻鶯媚空  
平紗柳茶色梅紫色巖色鶻茶茶色  
凍凍  
上憲薄礪晒萬鐵巖藤樺藤濃樺崩  
代法折茶茶色色巖茶色茶色黄  
凍凍  
換千蘇瑠鬱朽霜山葡萄木御藍煤黃  
擲草抄璃金葉降鳩萄葛賊納媚竹韓  
凍凍凍色色色色色色色茶色茶

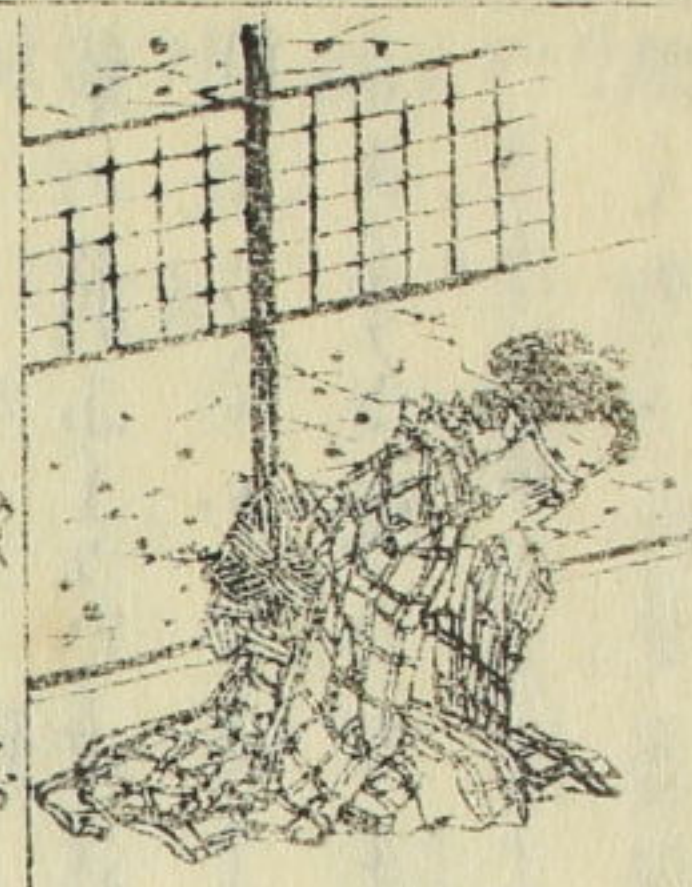
篤と未す間を  
○途中人と連ぶつ  
よ上輩の人たるは  
雁の行が如く跡ふ  
付く行べし  
○鼻をかむ心得  
輩の前あつた次は  
間に立ちかむを  
立まざる場合なき  
下座へ向ひ  
低くかむ鼻をぬ  
ぐひ置べし同ト格  
の人たるを下座小



角筆鏡飾筆狹屏黒貝鐵藍江紺  
盤臺臺筒筒墨箱箱風棚桶御海戸桔  
見臺臺筒筒墨箱箱風棚桶御海戸桔  
角筆鏡飾筆狹屏黒貝鐵藍江紺  
盤臺臺筒筒墨箱箱風棚桶御海戸桔  
短漢御手文硯長料御  
冊紙臺箱匣箱持紙厨  
箱臺箱匣箱持紙厨



至宝 女用文姫鏡  
向ひかむし 總鼻



高く低く短く  
かむし失礼ふり平生  
かかふふらふべし  
又屈伸伸唾くく夏  
をど人の前みくを  
堅く慎しむべし

世ふ此等の形を源氏香  
の圖と云ふを練香を五十  
四帖形ふわく薫らせし  
もの名はたたる者よて香  
道をころろけける人よ  
く辨へる玉ひく

裁縫手引草

裁縫の業を往古ら后妃北  
の方簾中とのまろ歴々も  
自のちを玉ひなり彼  
の御物師針名仕立屋ふど  
といふを後の世おりのふ  
昔いひなりのなる

- 漿子 瀧續 眉拂 針箱 糸巻 裁刀 悦架 兩傘 鬢櫛 反鬢 根拭 香包 香箸
- 漿子 鐵漿 紅血 刺刀 掛針 針刺 芋桶 日傘 虎枕 鬢櫛 梳櫛 句袋 香箱 香炉
- 五倍子箱 鐵漿壺 白粉入 毛拔 吳服尺 火熨斗 紡車 編蝠傘 鬢盤 元結 鬢搔 伽羅箱 香盆 手倍

○田き物らみ様を  
饅頭蒲鉾其あり總  
て田きりの小口小  
二口づ食ふりおふ  
一口お喰まると  
たの三日月の形小  
齒のあと残る故小  
嫌ふなり  
○扇子の遣ひ様を  
上輩の人の前よて  
の成丈つるの様小  
心得るべきもども  
盛暑の時分又は  
時宜ふより遣ふ時

別く四民の妻女を一日も  
欠ずしき勤めて兩親男夫  
次は男女の兒どもに汚色  
綻びたる衣類を着とくや  
妻女一人の耻とならあり  
又處女たち時の間は他  
人の家小嫁して妻女とな  
る身あるは昼夜あくるら  
む心かけ給ふべし  
一衣類の丈ならび巾を  
男女とも其人々よりよく  
相違あまを確と寸尺を定  
り難し此小出せる本裁の  
圖を丈を二丈七尺小巾と

- 手炊 綿絨 機棚 膳椀 鉋子 德利 鍋釜 簞子 鼓弓 太鼓 簀笥 羽子板 雙六盤 草紙
- 疊紙 綿弓 倚子 蝶足 提子 血鉢 三寶 琵琶 月琴 鼓笛 柳刷 拍毬 水引 團扇
- 紙入 機籠 懸盤 臺膳 盃洗 重箱 用篋 三味線 八雲琴 扇 羽 歌骨牌 熨斗 鮫 翠簾

貴女 女用文姫鏡

裁縫手引草

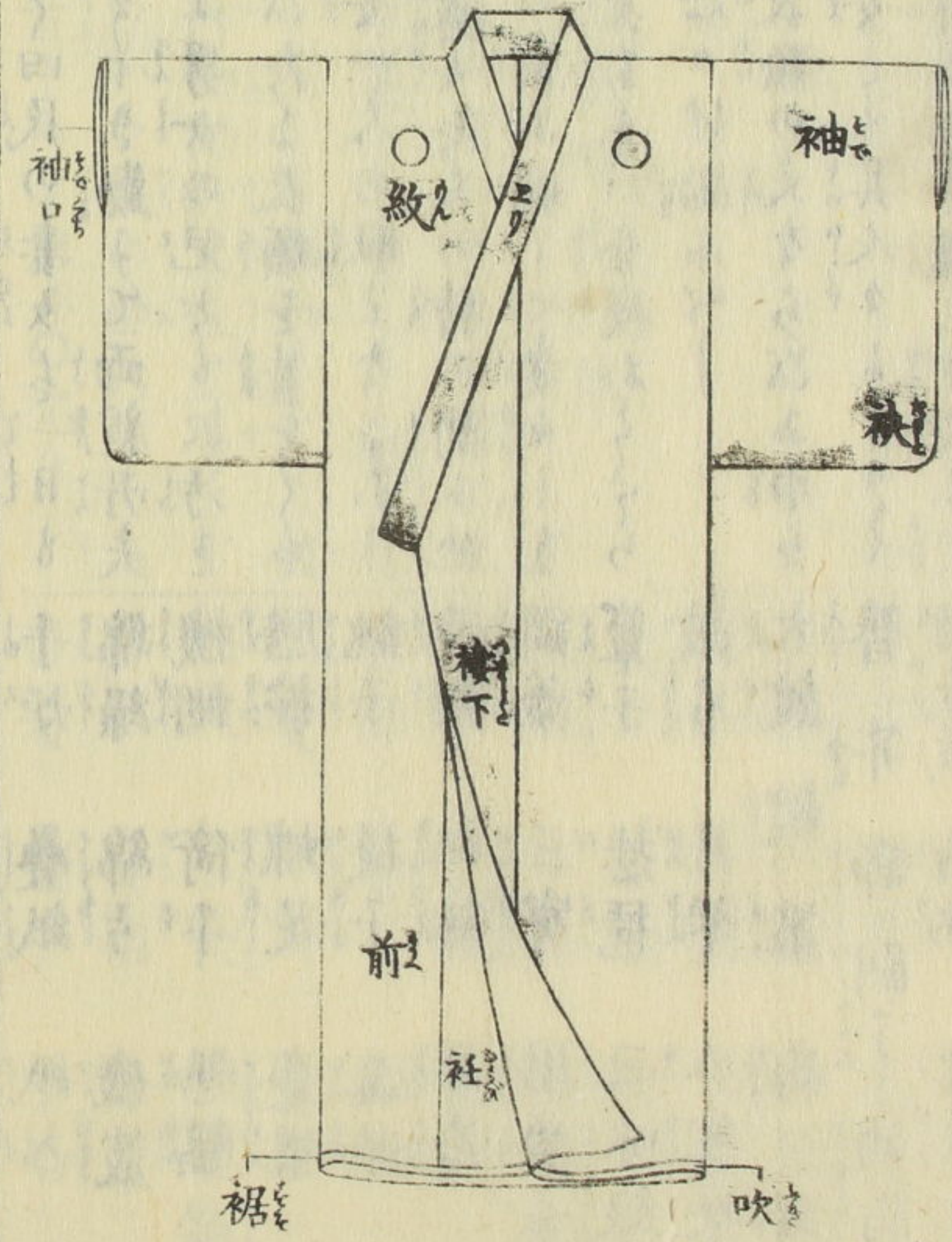
五十二



ち半をわと扇を披  
き俯ふきそそりく  
と扇くく

○煙草吸ああ上  
輩の人結前まもも  
吸ぬくそり若し時  
宜ふ依り吸くそあら  
バ挨拶して吸あそ  
又吸くそそりたそ  
上輩つゝ勿論同ト格  
の人結前まも直小  
唾壺をけそり失  
禮なりまも掌へら  
と受くそたそへ縦

衣 服 名 呼

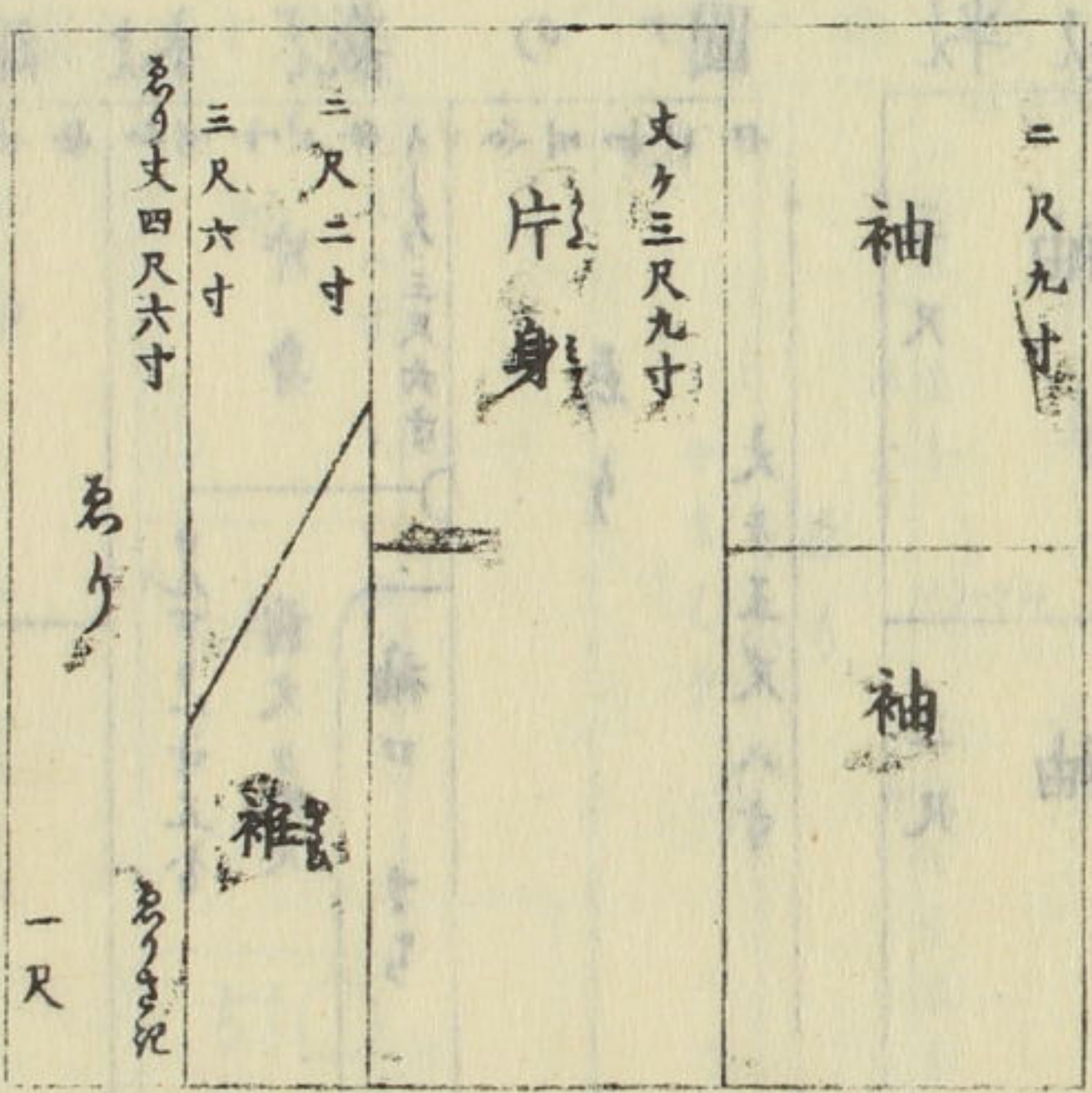


九寸五分と仮よ定めたり因る長短ハ此圖ハ順う  
く定め裁づ

ひきく小けくま  
あふも高き音のせぬ  
様よ心得づ

○人小對し或ハ物を  
扱ふあそ時ハ恭敬  
の心を失なわゆる様  
小心かそり肝要  
なそり然むしそり餘り  
恭敬をゆるも却つて  
失礼ふなること往々  
あそりそのふり譬へ  
人の家へ行くと  
我が坐まそり處へ招  
ぐそり頻り小辭退

○大人物衣服本裁の圖



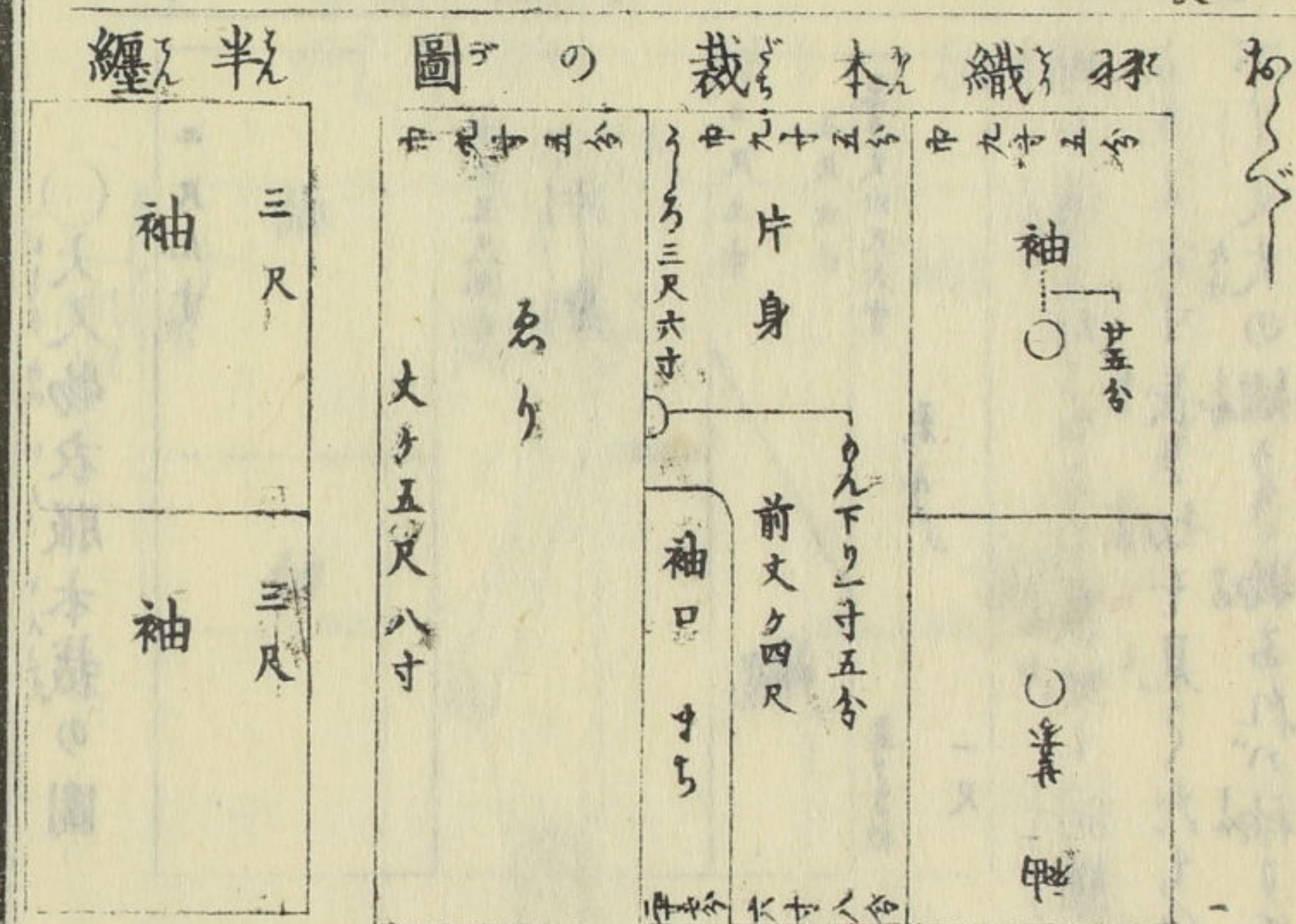
襟を通しおもす裏地も同様  
より五六寸長き切を見くらちて吹五分とそりつる  
づ又丈の短き物あれば袖そりそり丈を長く裁ち

總丈二丈七尺の反  
物をまづ袖をなら  
残り五つ七分を  
折り四つ分を取り  
身ぶらそり残  
一七分と堅二つ分  
を襟襟しそりむも  
棒かそり裁んと  
そり少の襟下へそり  
て棒たつづ又  
ありそりそりそり



て行きなす如く又  
 ち菓子など出し饗  
 應さるる時よろ  
 遠慮して一も喰さ  
 るが如き人皆失礼と  
 なりて主人の機嫌を  
 損なふ一其他こもら  
 此し食の中にあまきと  
 恭敬を犯し却て失  
 礼となりぬ様よ心を  
 用むるべし

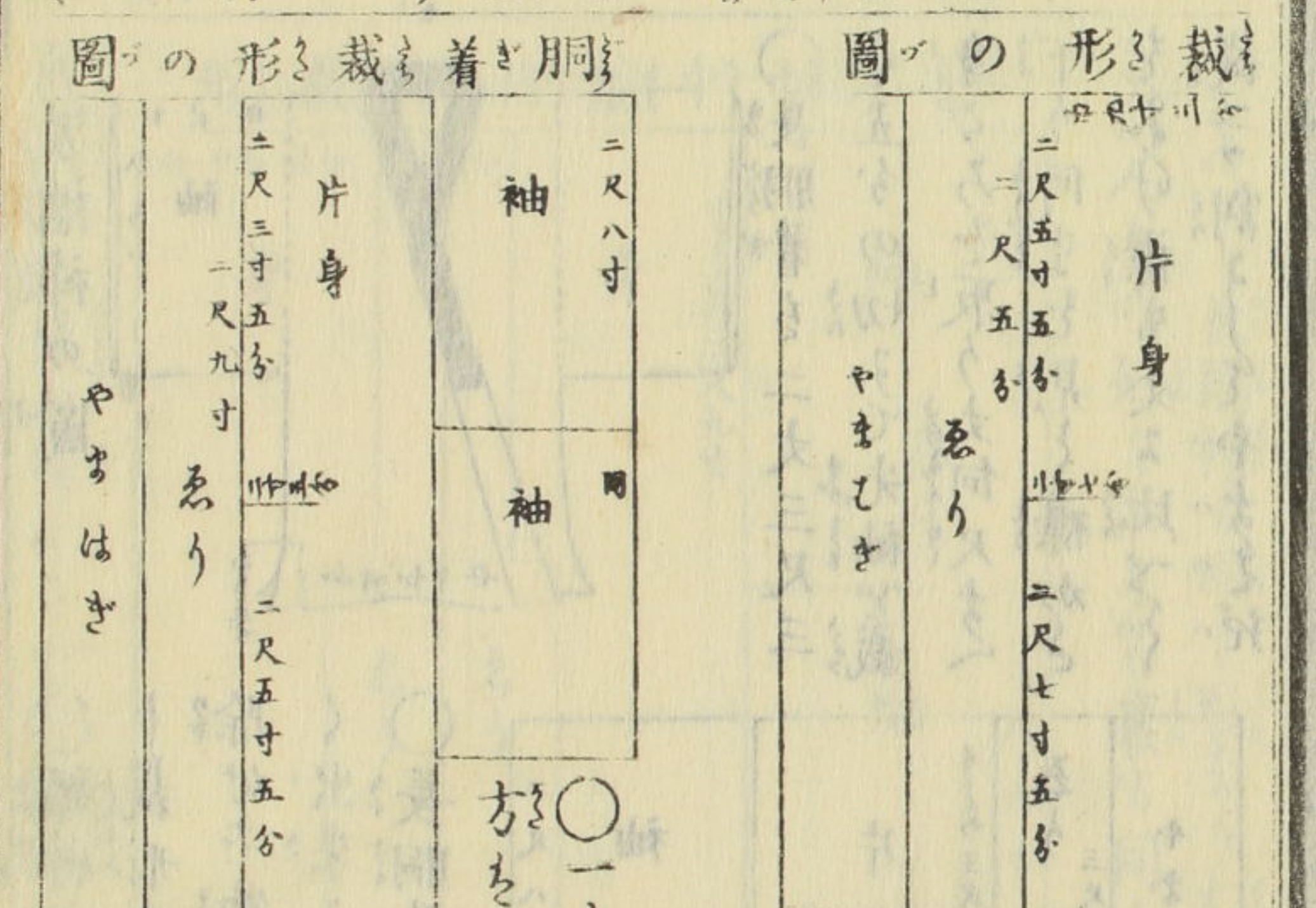
○嗽とくは吐嘔吐の  
 声を出さるるべし  
 ○顔を洗ふとけ手水



○二丈七尺の反物  
 をまづ中より両袖  
 とたち跡丈ヶ何尺  
 よあらう見つりて  
 残りをもろとす  
 身ぶらひ前下りて  
 極め襟肩とあげて  
 前巾をうけて袖口  
 とすちとふさぐ  
 ○一丈九尺一寸切  
 を袖をたち身ぶら  
 を取りあがり身ぶ  
 らの丈に應じ襟肩

を四邊 濯ぎぬ様よ  
 せべし

○食食するるとに  
 嘔吐とくは勿も彼邊此  
 處と見まると勿も  
 箸ふつとたる飯を箸  
 るる落さるる香  
 物ふく湯茶の中を  
 廻さ勿も箸あくる飯  
 を椀の中へあしあみ  
 固めるとふ勿も  
 ○鼻淨を食食す前  
 よかき置べし  
 ○襟縫も常正



前下りを見つりて  
 裁ち堅ニツ小裂  
 てやちをうけてま  
 かり長半纏あるし  
 半纏もあふと裁  
 くらあり

○一丈八尺三寸切  
 を半纏と同唯そを  
 丈と着いげも短く  
 裁つなり尤も圖の  
 如く前下りい又下  
 り分を見つりて  
 裁べし

貴女 女用文類聚

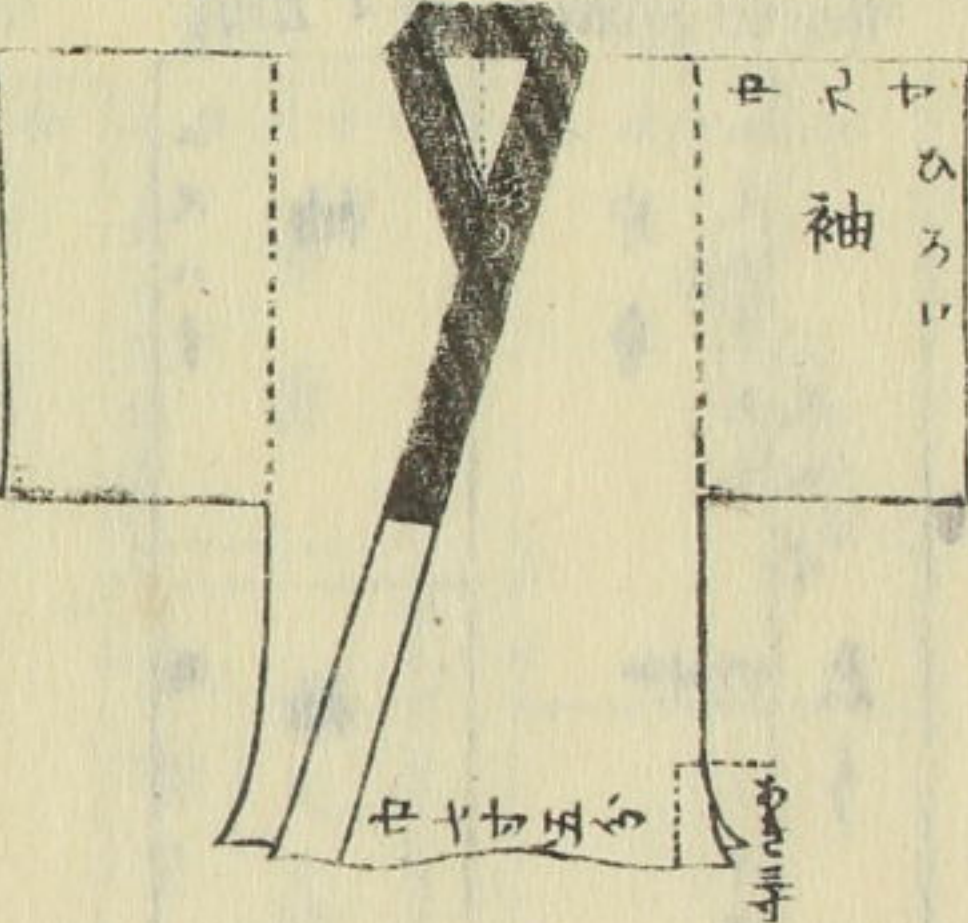


まづ一人の前を襟袖口を繕らふ失礼なり

○歩く時ハ小歩よく静うふ歩くべし躑つくと埃をくるとおとなと總く大失禮あり

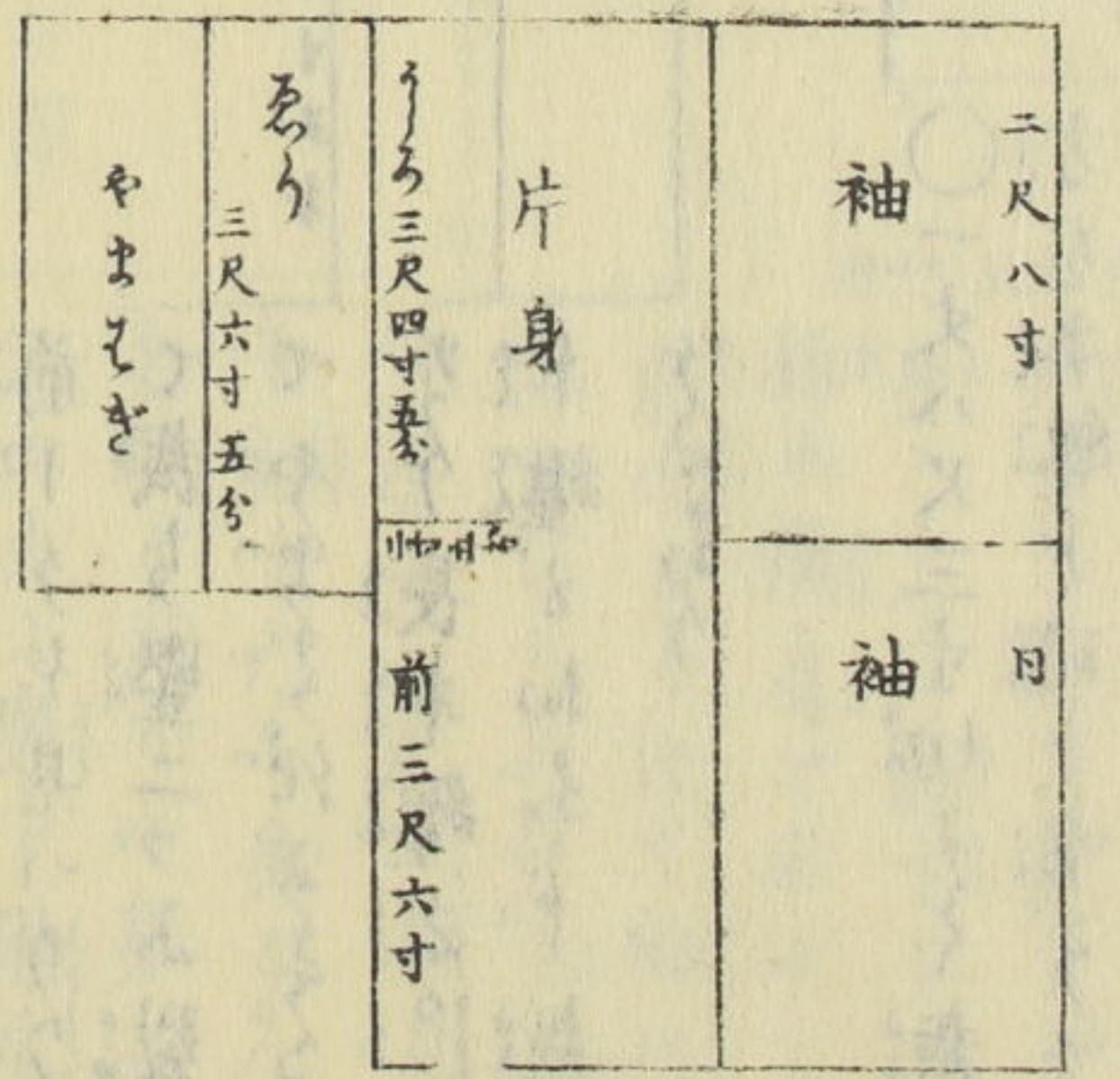
○上輩の人と物に授受する時を少く其身を屈め手を捧げ其品を戴たぐ様小まづ一硯料紙を進らざる

男襦袢の圖



○長胴着を二丈三尺三寸五分の切りて先袖と裁身ぶらを取り丈何尺も下り何寸を見襟かをわけ襟も丈は比づく裁ニツ割りてやまをた

○襦袢の裁形を胴着と同ト裁形あましも見反しを除けを惣丈け胴着より短く出来るなり

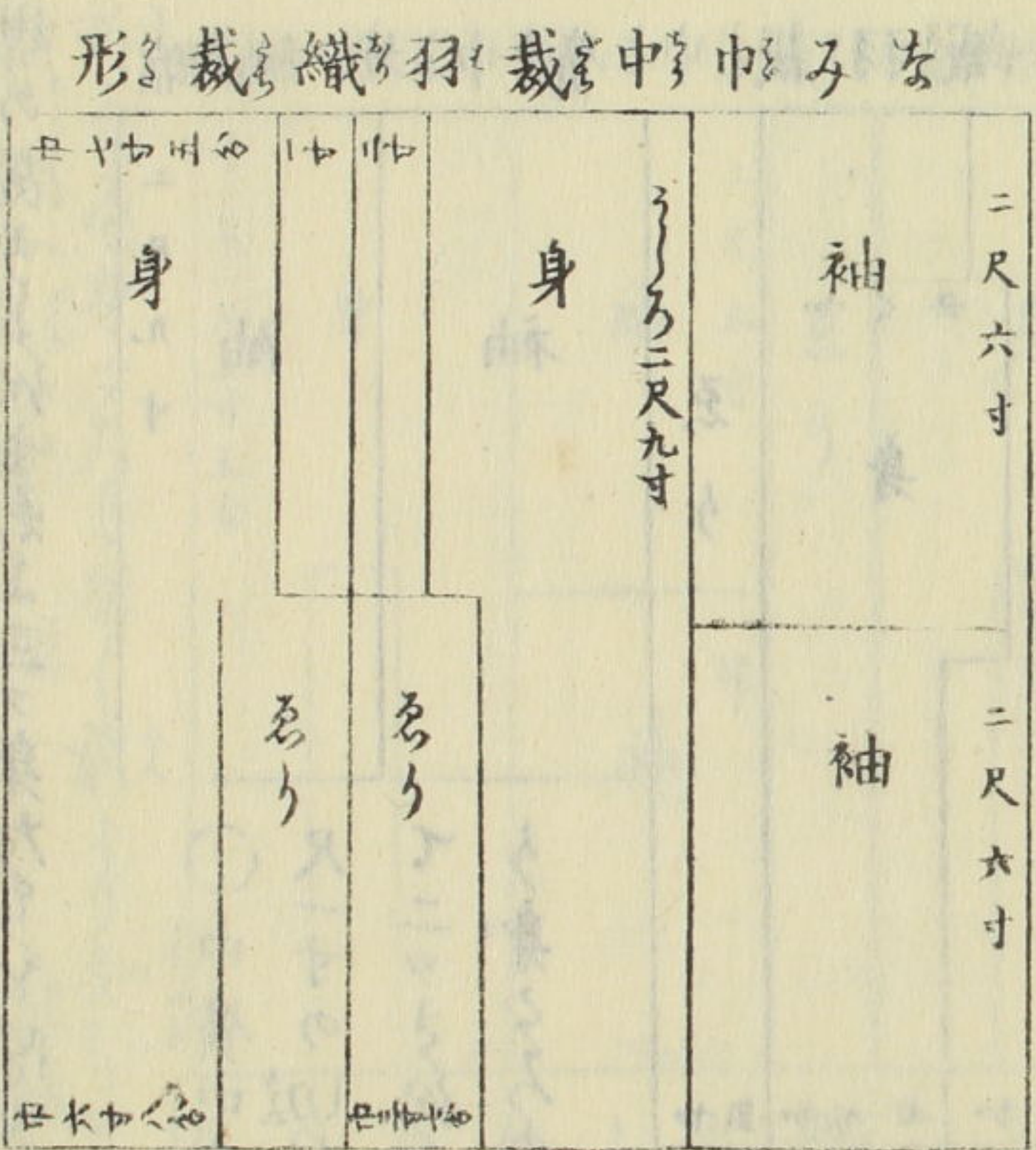


と沼の硯の海の方と我が前より紙の切目を我左り



方おなまづ一扇子を進らざるあち右の手あき要の處を持ちあま

おまづ一長襦袢も同じ形なり尤も前下りの長き短きハ人々の好まふを裏も同ト丈もた



○並中裁羽織を一丈七尺二寸の切を先袖を中よりたち跡をニツ折し着丈何尺と定め縫をを見前下り何分とえつり襟肩と切り前よりえりを



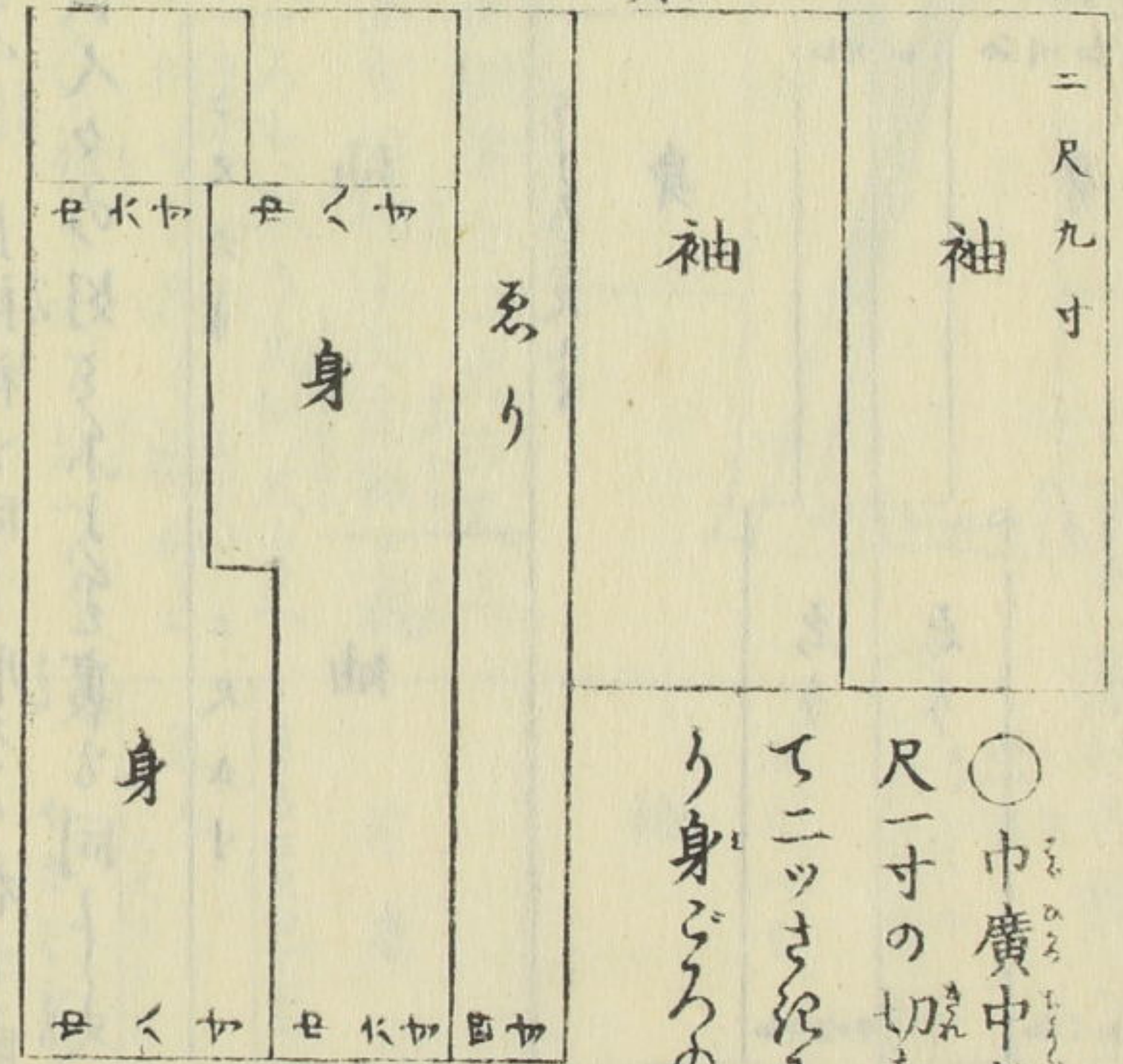
立ち出まへ  
○小刀を進らざる  
其柄の端を持  
刃の方と我方に向  
て出まへ



○朝起あを父母兄  
姉などよ礼し日く  
まを寢室おり時

て三ッ身裁をまへ身ごろ裁ちひとも羽織の分ち前  
襟の裁方よ記申あよ三ッ身だちと除き出まへ

縮緬地中廣中裁羽織の圖



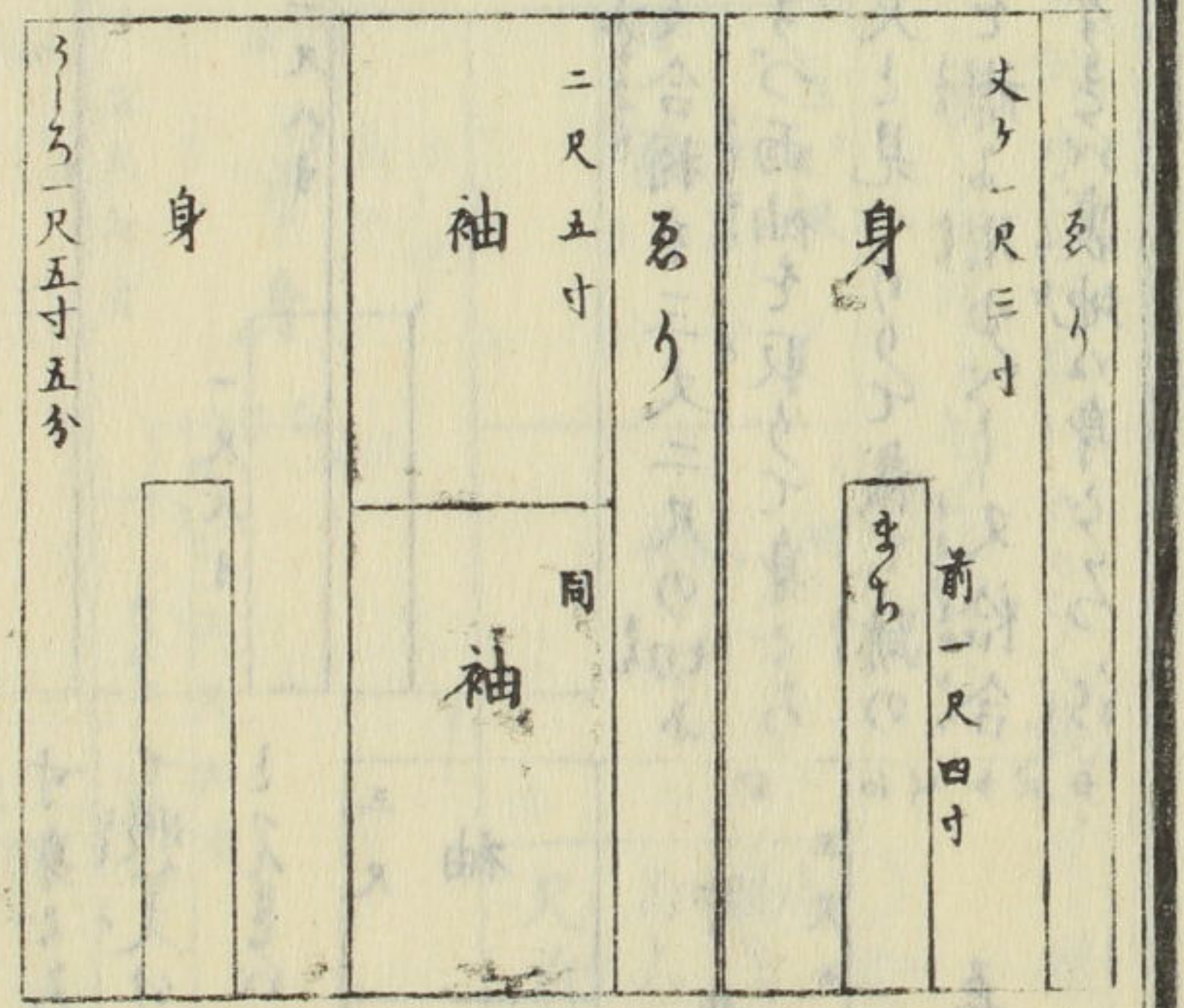
○巾廣中裁羽織を一丈一  
尺一寸の切を巾のすく小裁  
て二ッ身記あして両袖と取  
り身ごろの中より襟とと  
りすち袖口は  
切を何寸とほ  
りゆく裁跡を  
二ッ折あして圖  
の如く身あろ  
とまへ

亦くまへ  
○起居進退まへ  
静穩あし清淑を  
るを要とま

大 婚禮の次第

女の所夫の家お行  
次和らげく云ふ祝  
言といひあつりと  
云ふ男文字おつと  
婚姻とも嫁まとも  
歸ともいふ祝言の  
時刻ら昏と本とま  
るゆゑ女へんお昏

縮緬中袖無羽織同小裁羽織の形

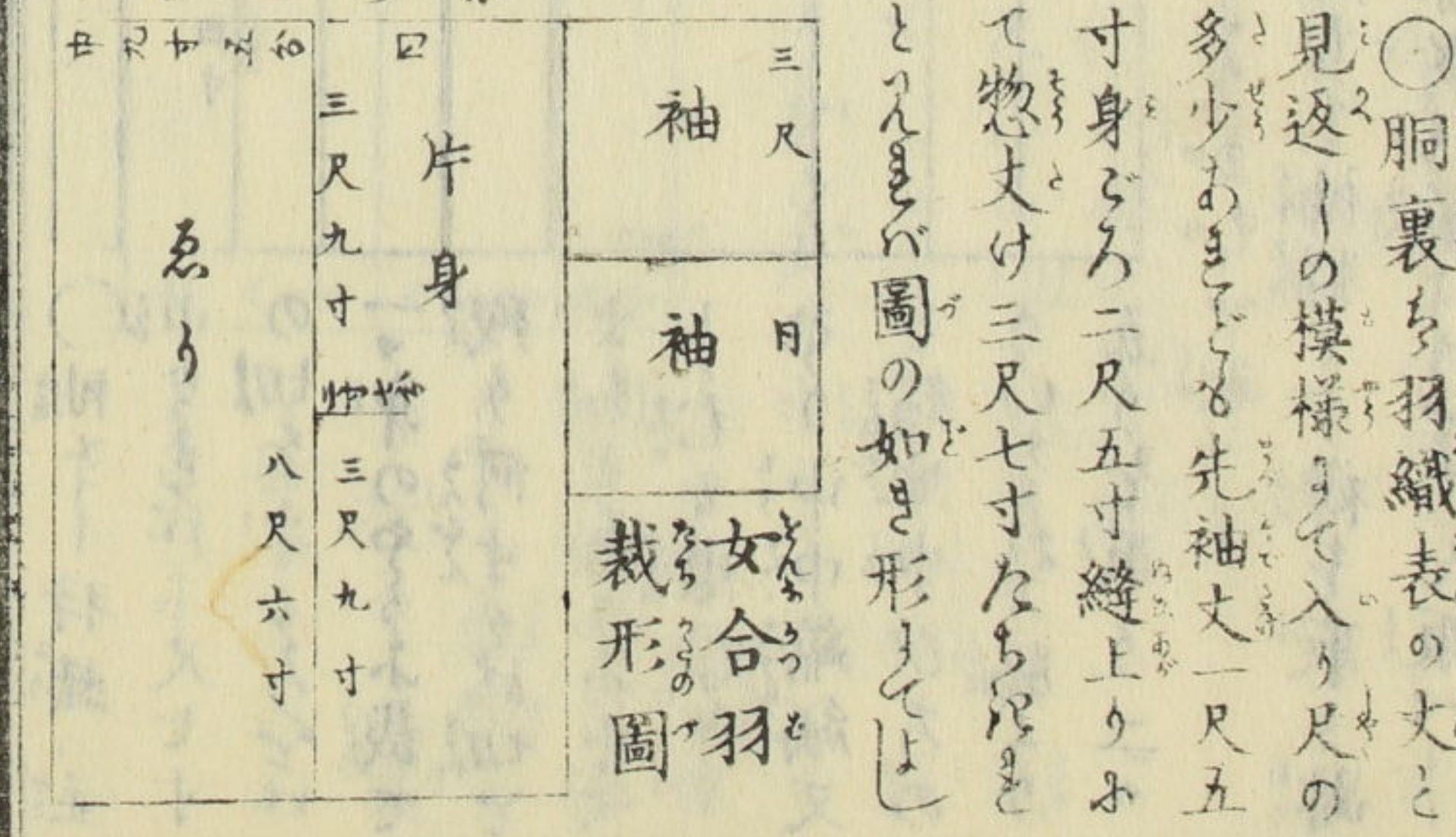
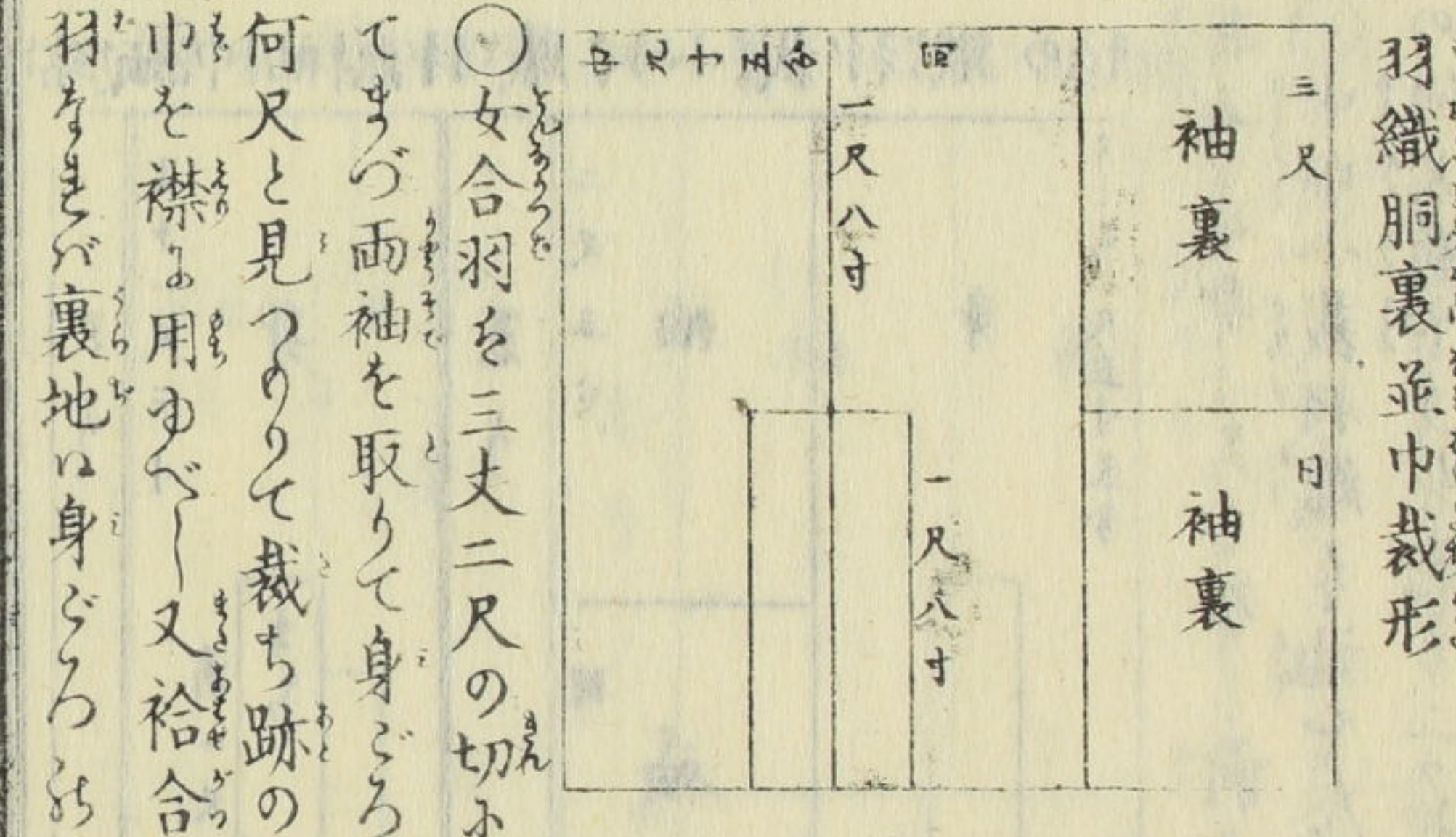


折あして身ごろと前よりまちと取  
○中中小裁羽織を袖をたちて袖脇より襟を取り跡  
の何尺前下りを見く二ッ折前よりまちと取べ

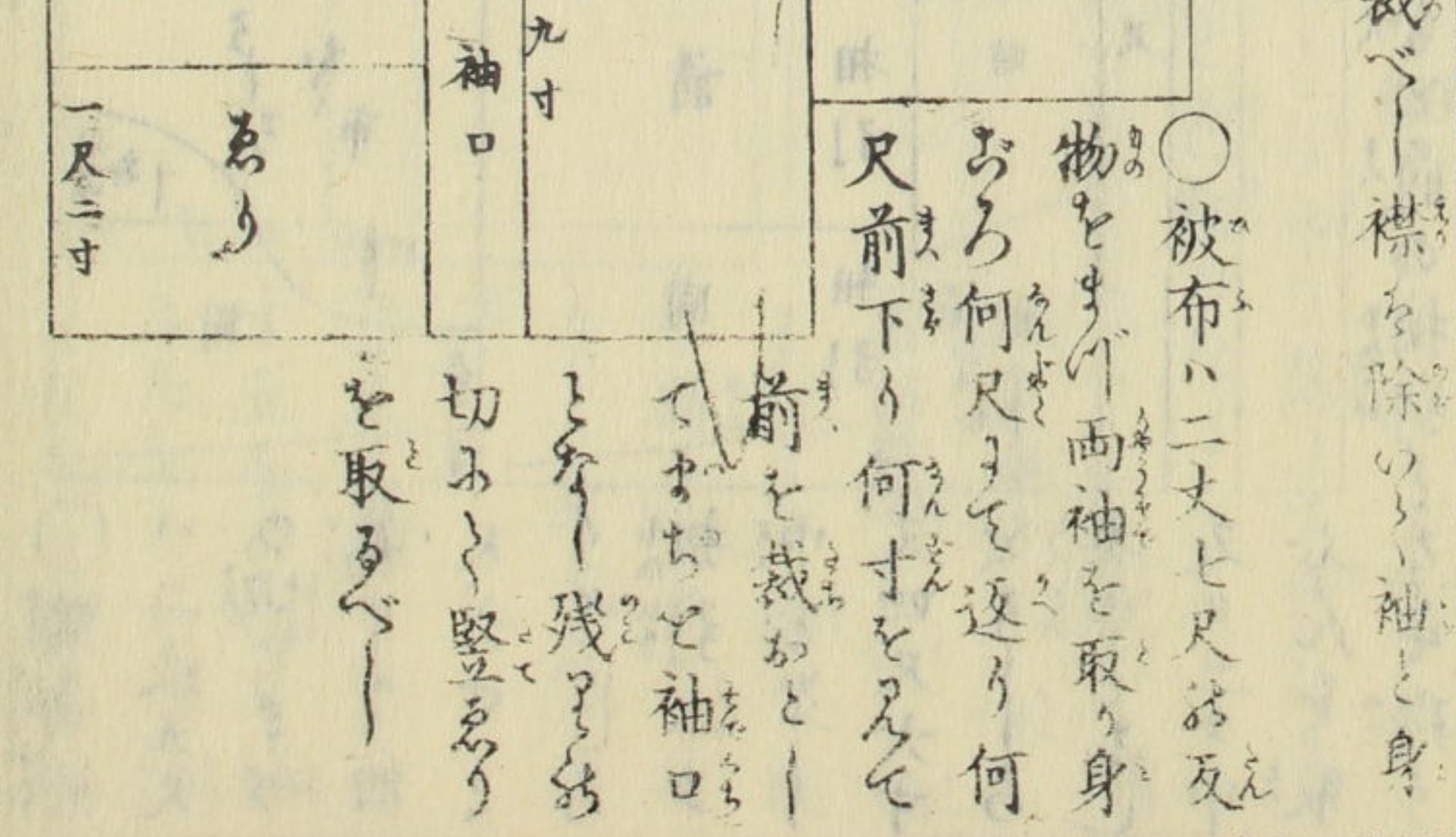
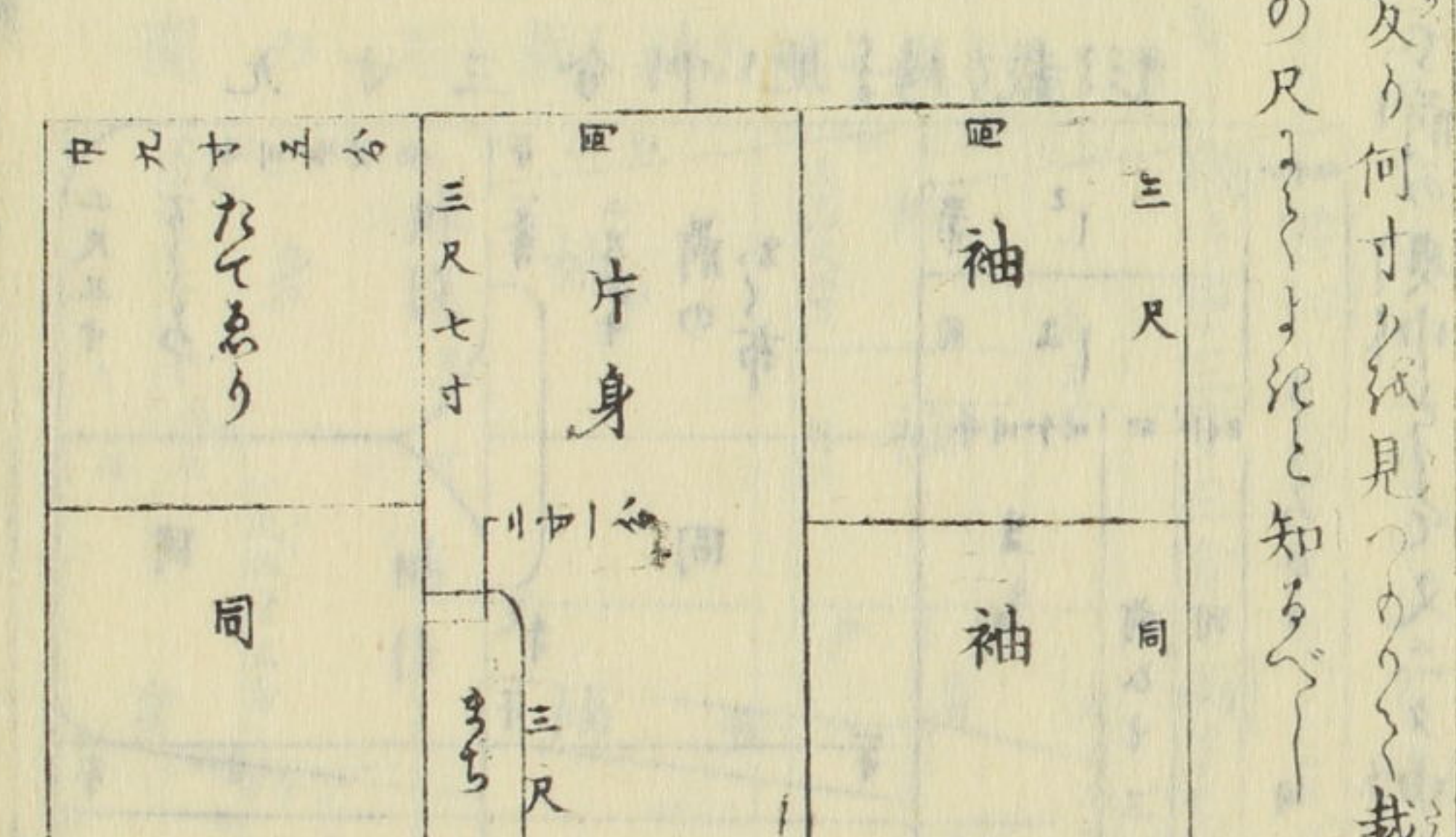
○袖を二尺七寸  
の中を身ごろと  
の切を身ごろと  
一ッ身のやろ小裁  
残り何寸と切と  
すちとあろふま  
むも襟ハヤク  
かり中巾縮緬又  
を縮地巾びろの  
りのすれ脇より  
あろを取り二ッ



といふ字を書き婚  
と訓せ男むらひみ  
出く女が男ふ因く  
行ゆる女なるん因  
といふ字を書き姻  
と訓せ女を所夫の  
家を我身の終る迄  
の家とらるる女  
つん家といふ字を  
書嫁と訓せす女を  
父母の家を家とせ  
む所夫の家を我が  
真の家とらるる女  
よ所夫の家へ歸る



といふ義まで歸くと  
もゆふたり然ら死  
たるりのいあそびか  
つらぬならひあまひ  
嫁していあそび父  
母の家へ歸らぬと  
いふ所由を取て輿  
乗物をいとみとり  
出し門火を焚く鹽  
と灰らふくうち出を  
おと死人を出さぬ  
とそらふと上黨輩  
よら何らなうらひあり  
そめく祝言のめく

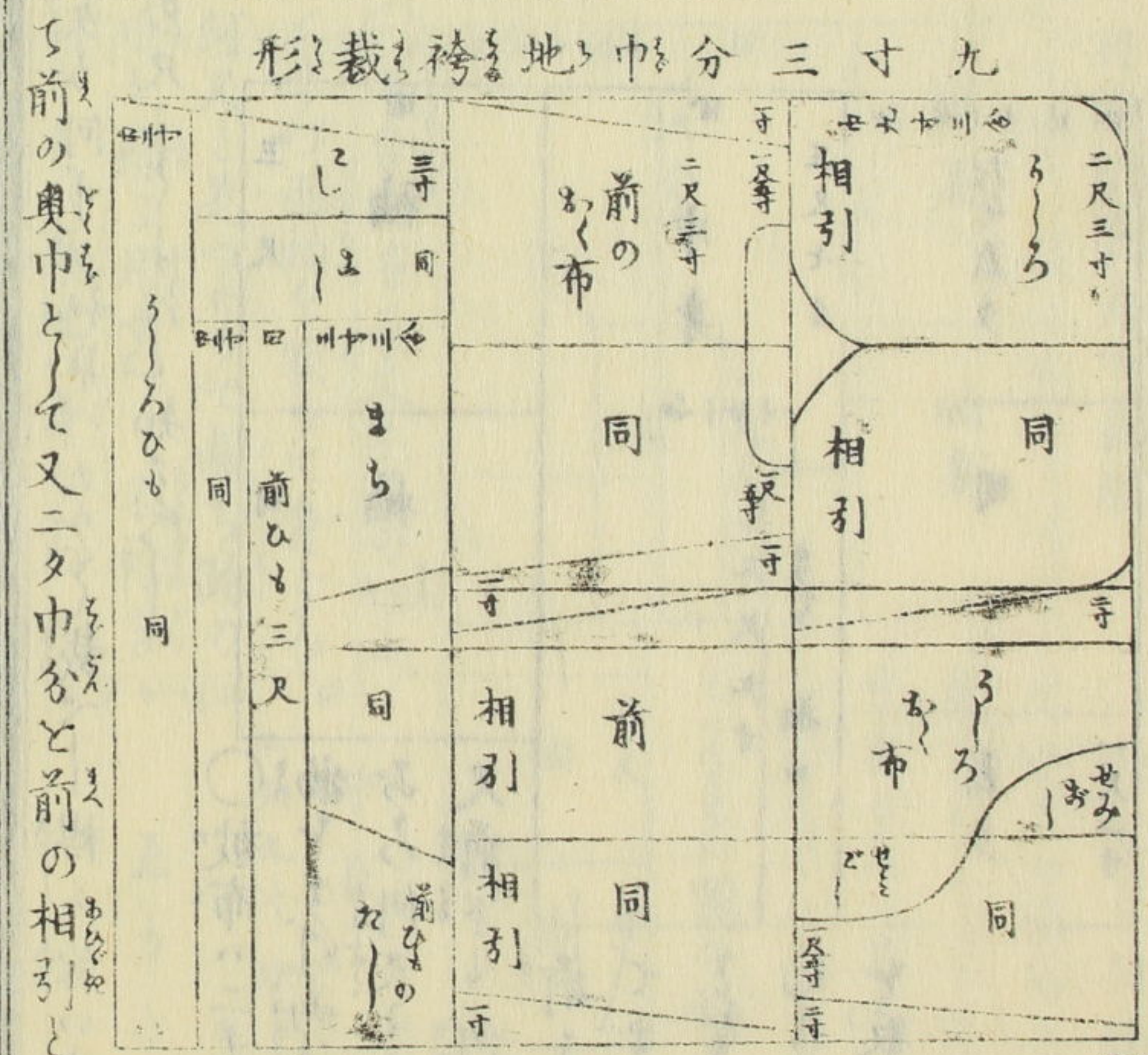




たき首途よ死人  
真似をくつて呪ふと  
のふいふくく帰る  
おとど忌む名をわい  
よめいりて女子を舅  
姑よ孝行を法く  
所夫を敬すひ下々  
の者を何とせしむ



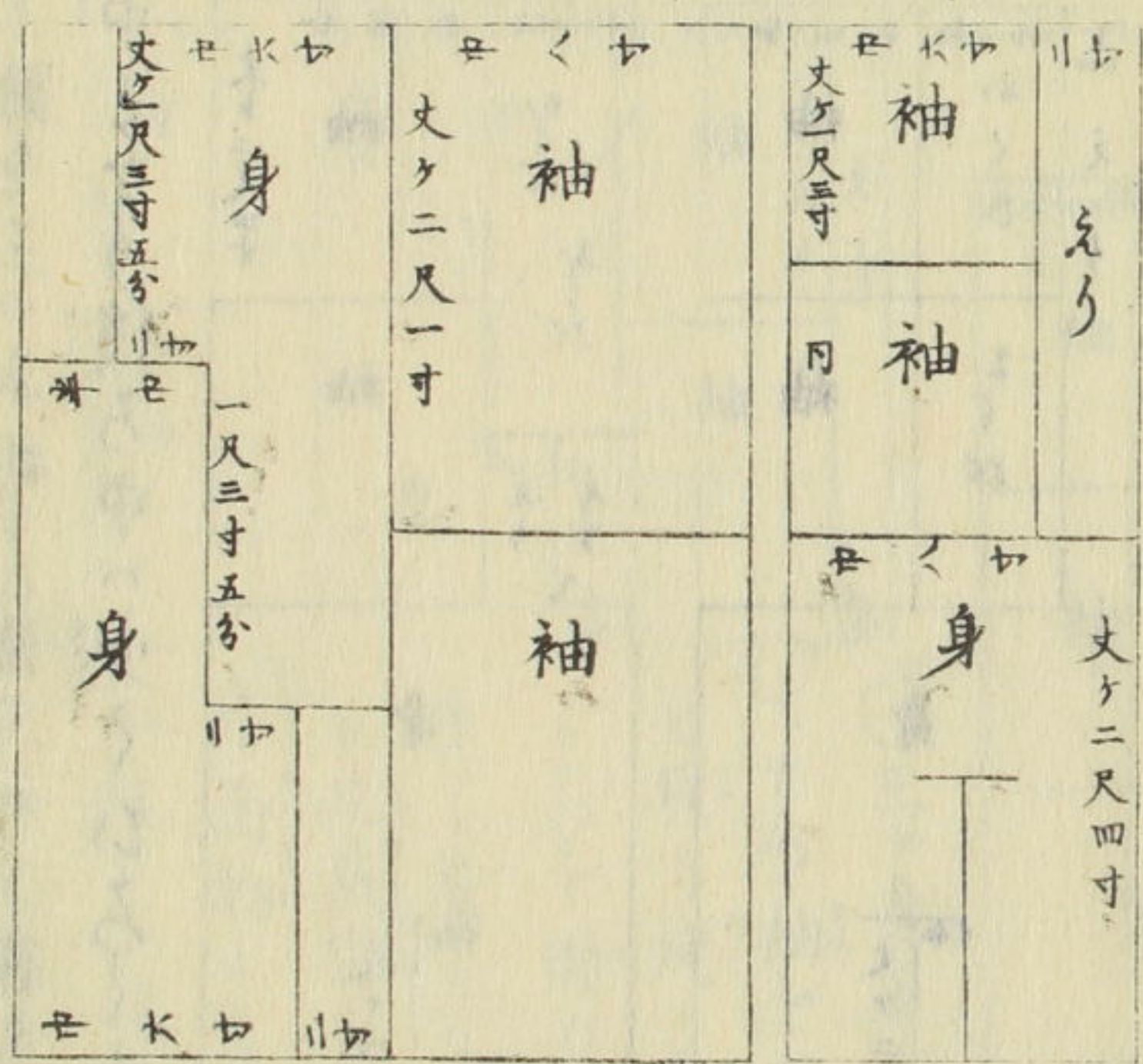
形裁袴地巾分三寸九



○襦高袴  
ハ二丈五尺  
の切とまづ  
端より四  
尺六寸と  
りてしる  
相引二丈  
巾とす  
又四尺六寸  
とす  
又二丈巾  
ふんを取  
る

歸らぬやうたふと  
玉ふべし  
○凡そ婚禮の式と  
いろくの法ありて  
一定せざるも上  
つ方ハ其家の例又  
ハ國風自くら残り  
て方式あり中等よ  
り下るても其家々  
慣習の吉例ありて  
執行ふを第一とせ  
身ふ應せぬおやよ  
法と正し花美を好

圖の形裁袴襦小

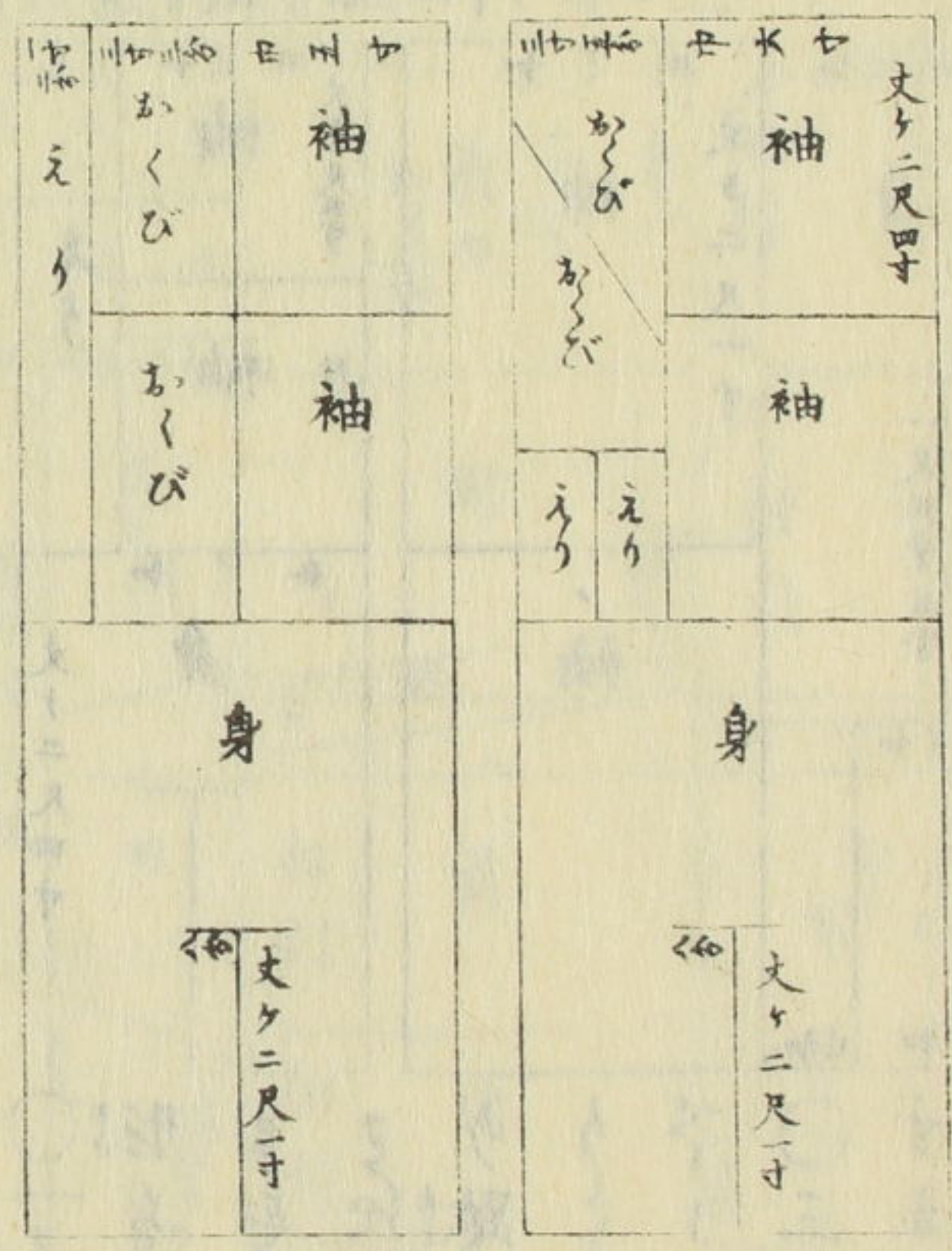


三尺六寸と二寸巾欠る後ろ紐とて夫より堅六寸と  
とろ腰切となりて又二寸づ二丈巾を落して前ひもと  
ち残り巾三寸三分と両すちと前紐のたるとまへり  
○一ツ身襦袴の裁  
形を五尺の切を  
まぎ袖を裁ち袖  
己代より襟を取  
り跡を二ツ折  
りく身おろと  
ざり  
○三ツ身ハ八尺二  
寸五分の切を袖  
ふたちくその袖  
とれよりそりを

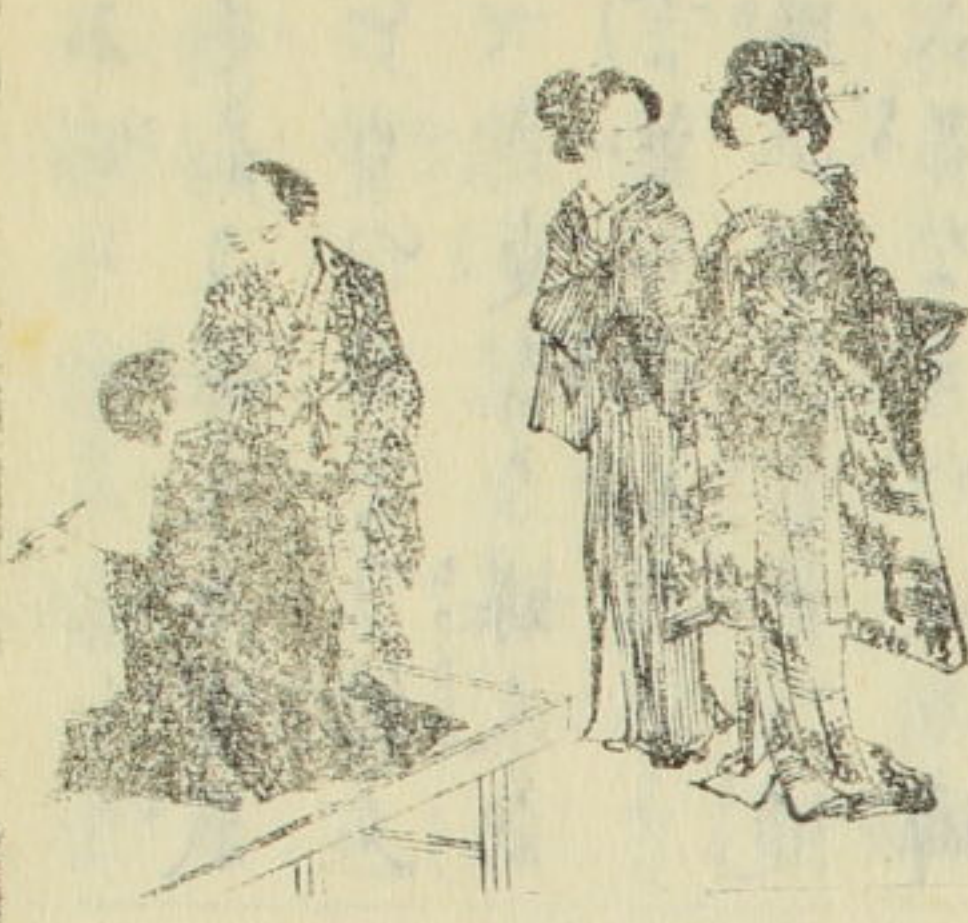


むに奢り結至りな  
まの宜しからむ又  
道具等も有任せ  
く用むる然きと  
も長柄の鉋子あり  
合せはとて散人結  
容姿ち拙なきい不  
都合なきより身  
代相應順も所  
と知く執行ふと死  
を見うしからむ  
世間の見榮を兼く  
その費と思もさる  
ハ不吉を好む小同ト

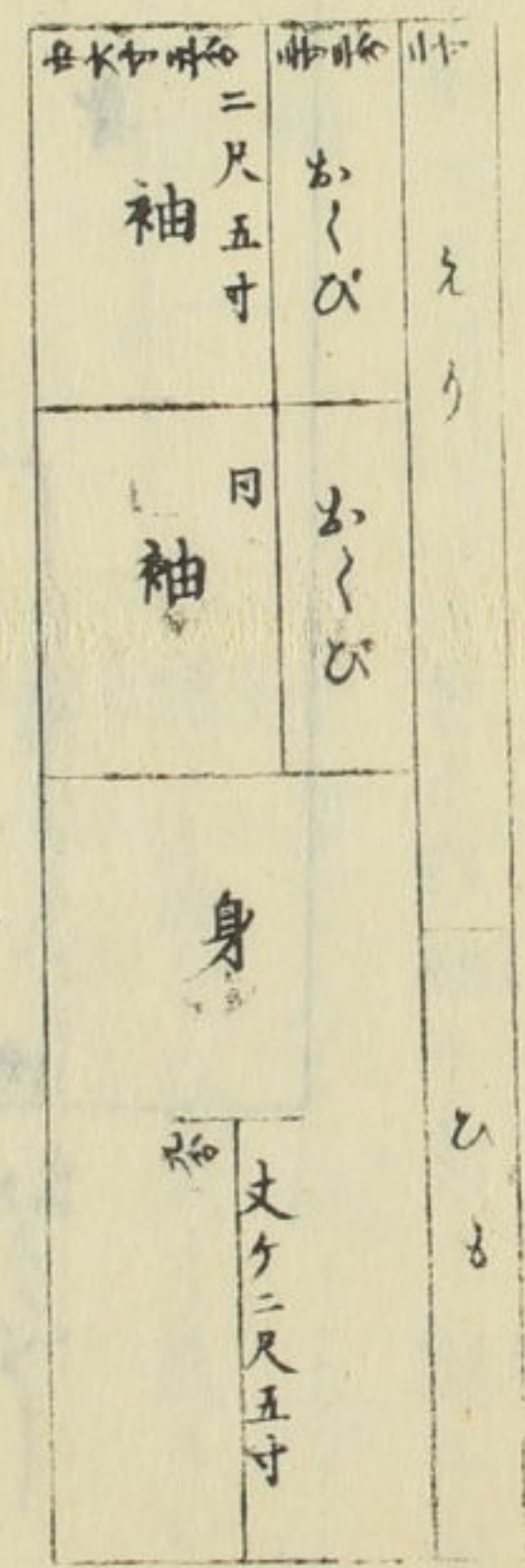
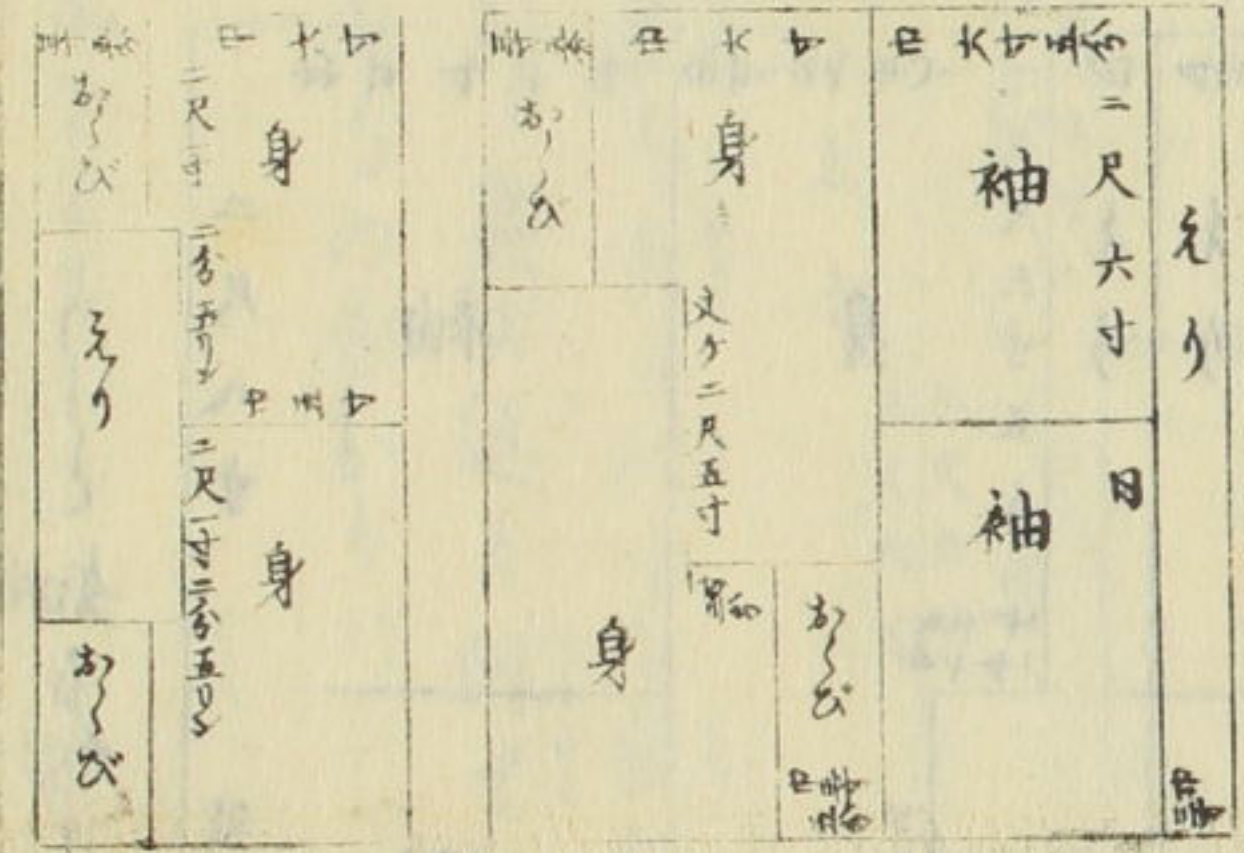
取り跡を三ツ折く圖の如く裁ちかひをすれば前ハ  
半巾となり後ろ巾の少くひろくするあり  
○一ツ身の  
衣服ハ九尺  
の切とせ  
袖を裁ち  
袖を取  
社を取  
又とせ  
襟を取  
身あら  
一巾よりえり肩とあらく後ろ前とちをせし又棒  
あくびありて社下よりえりと取くやせしは小用か  
あともありちりめん中巾絹地もひろの物ハ巾よりて



かゝる  
○夫婦の縁を結ぶ  
を家相續のためな  
まの強ち小美目容  
をのを見合せむの  
らぞそと相應の好  
作を見合せむ故



三ツ身裁形圖



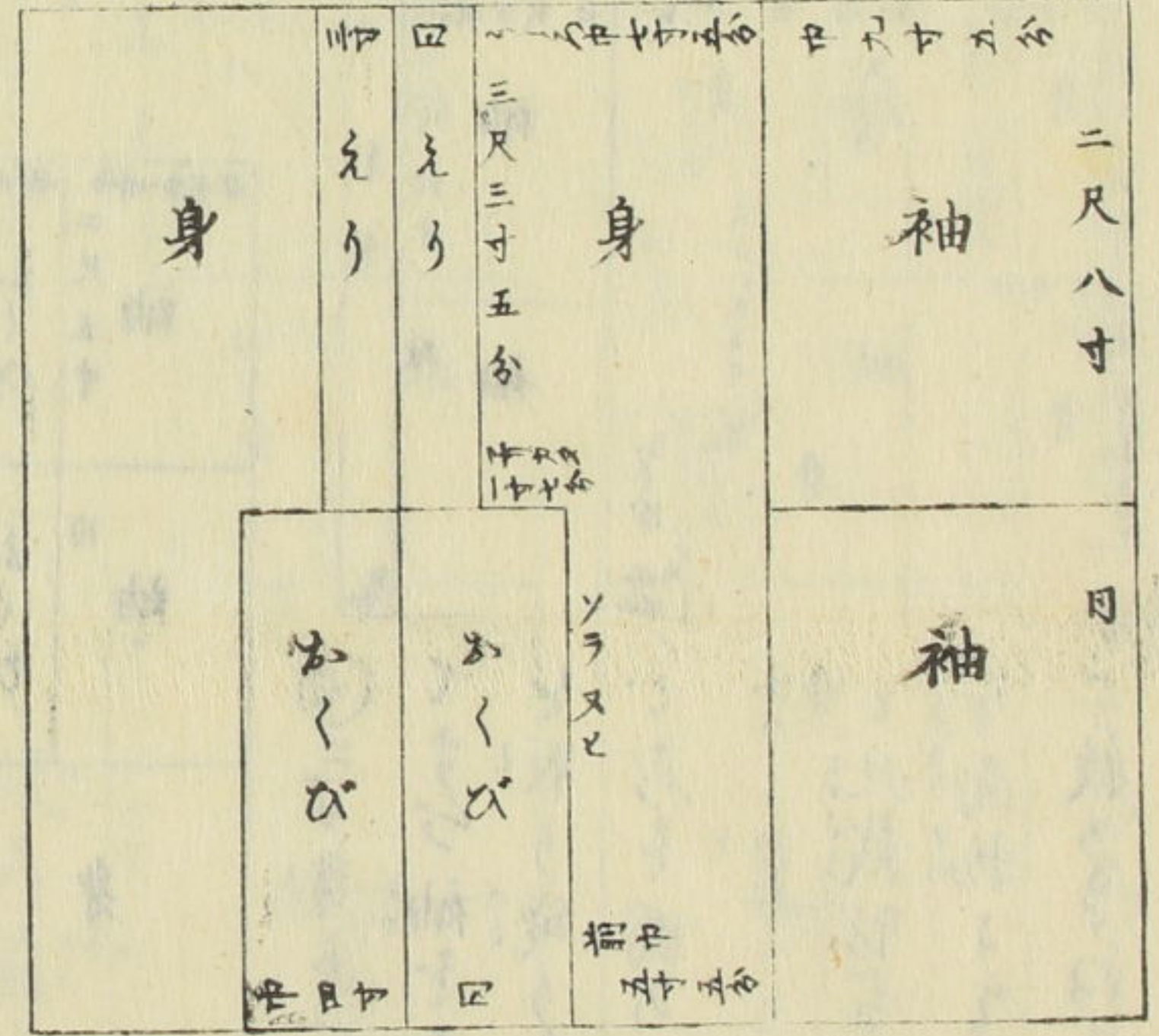
丈巾を見つゝより丈も長く裁べし左の圖の如し

○三ツ身を一丈二尺七寸せしむ  
てすづ袖をたちそ結脇より襟  
を取り残りをも三ツ折あて身  
ぐるを圖の如く裁ちかひより  
ち一背より社をとるなり尤  
も此裁形を両面の品も限り  
片面物をいなきがた但し  
二枚をねく裁ちかひ身と  
ろとゆがり合せむは片面も



至宝 女用 裁縫 鏡  
 お始々見合とな  
 きふり媒人を實氣  
 をめつくとり結ぶ  
 べき夏なり媒人を  
 言葉も両家の信ト  
 用ひそ結言葉も隨  
 ふ者なきは武を癖  
 持病等其外何よよ  
 らせ少しも色すむ  
 語るべし偽り飾の  
 なきと記を子々孫  
 々長久基あく未  
 々双方の喜びとな  
 るす偽を以て取

四ツ身裁の形圖

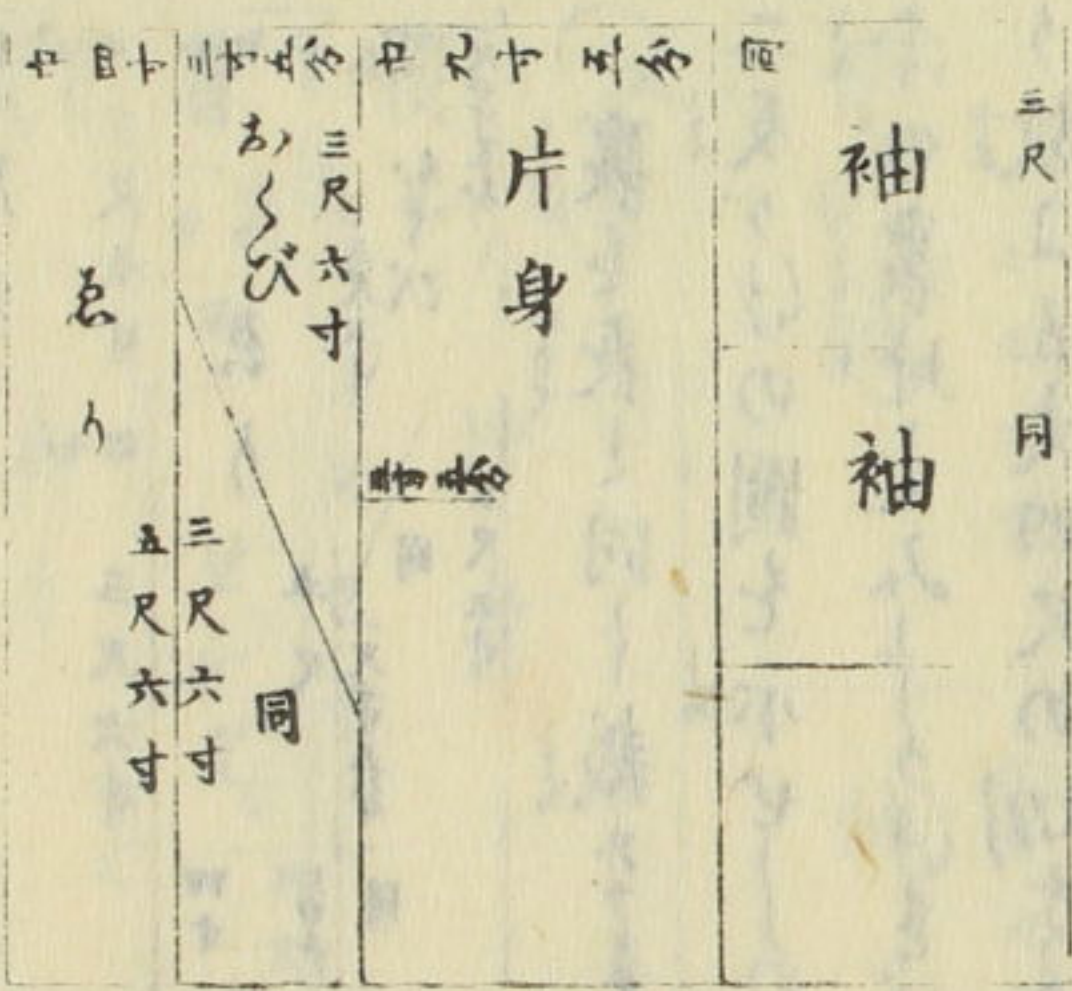


のあてもよくと知るべし

④ 四ツ身を一丈九  
 尺切を袖と裁く  
 残りをも二ツ身  
 前後ろのこま  
 め背より襟を裁  
 ら前まで衽を裁  
 ら縫ある物を  
 まが中のすれ  
 ぬべし

貴女 裁縫 鏡  
 むきふと記し日々  
 相違の度出来く  
 家内の不和合やむ  
 と記ふりる危し斯  
 るときハ両親の心  
 づくしも消行く動  
 もまきバ家を破る  
 基となすべし依る  
 媒人たる危き人を  
 返さず正直ま  
 て取り計らふべし  
 又聾の心をハ好色  
 利欲かかむらむ只  
 孝貞の婦を嫁るべ

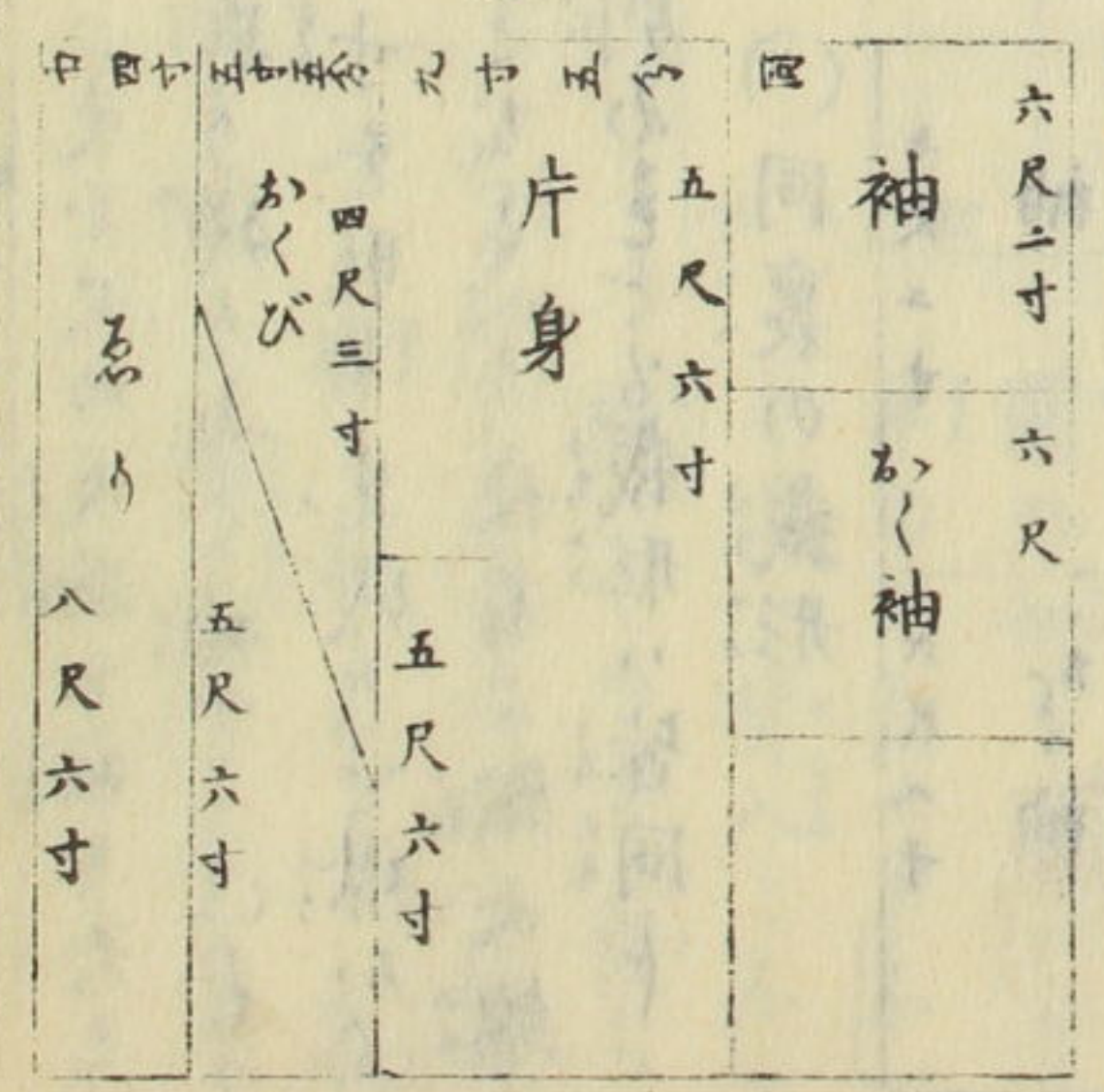
① 間袖裁形



裏ら表よ似たる裁形よ  
 てた裏の返り何寸と見  
 つくるのふり

① さいさい二丈七寸の反物を  
 をすの袖を裁ち跡を圖の如  
 く身とらと衽とを裁く  
 但し衽をひろくをせす  
 裁あすべし

② 同く裏の裁形



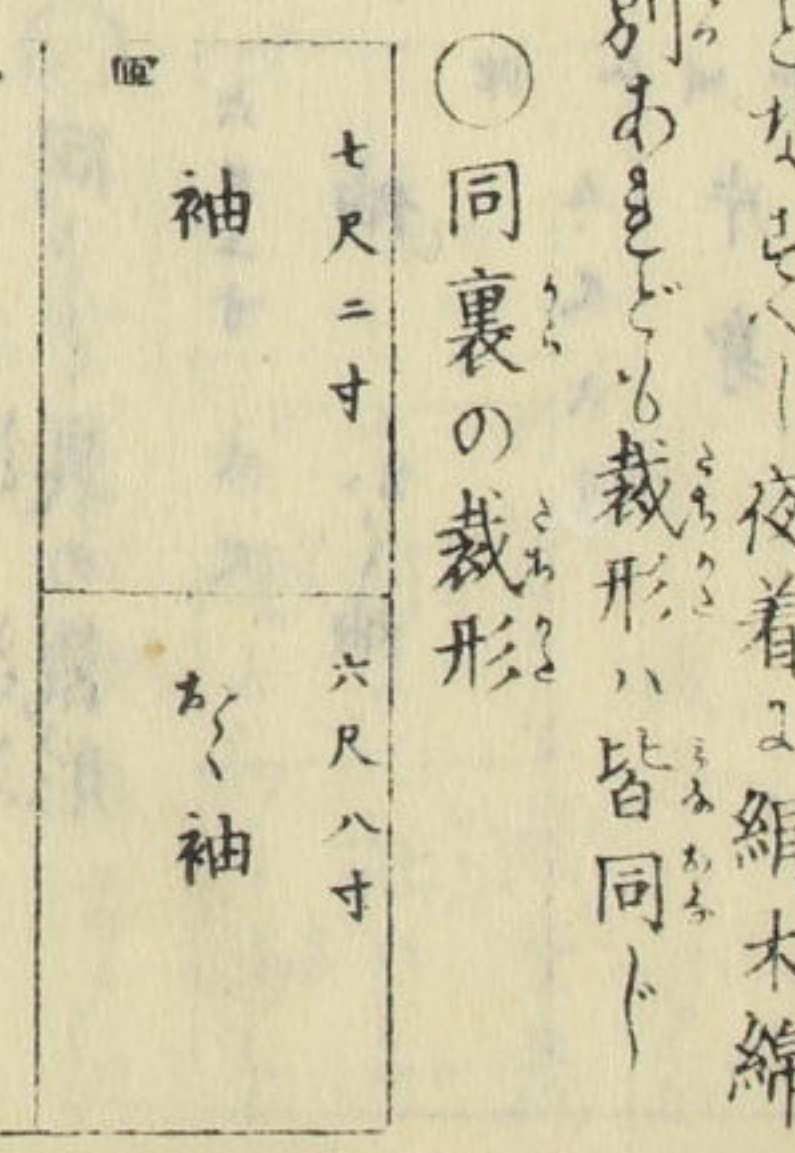
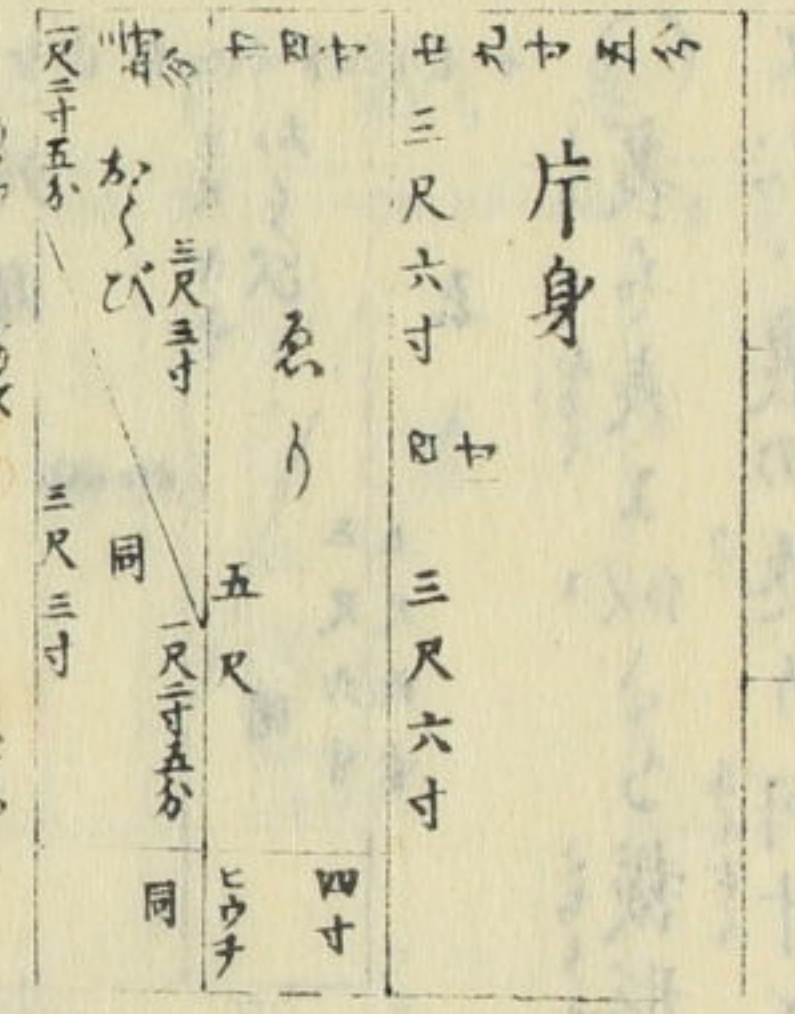
貴女 裁縫 鏡  
 六尺二寸 六尺  
 五尺六寸 五尺六寸  
 四尺三寸 五尺六寸  
 八尺六寸



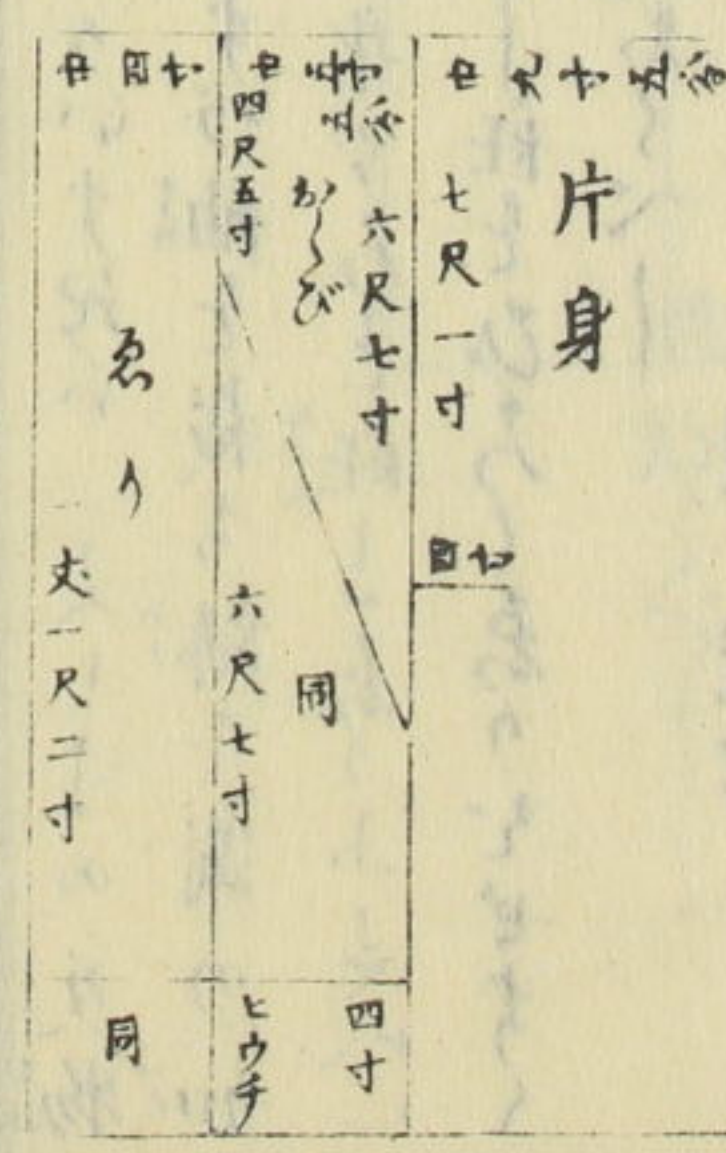
一世の中よ若き者の癖とて大つたをそ結美色よ迷ひ心操の善悪の意ら糾きど兩親の意もかなをぬ賤しけふも女もも嫖きふの心うける男女は是誠よ家相續る縁邊にあらそ男女とも親よ孝心ふりき人かまばそ結あふろかなら正しき申をよ

○夜着裁形  
袖 三尺六寸 同  
袖 三尺六寸

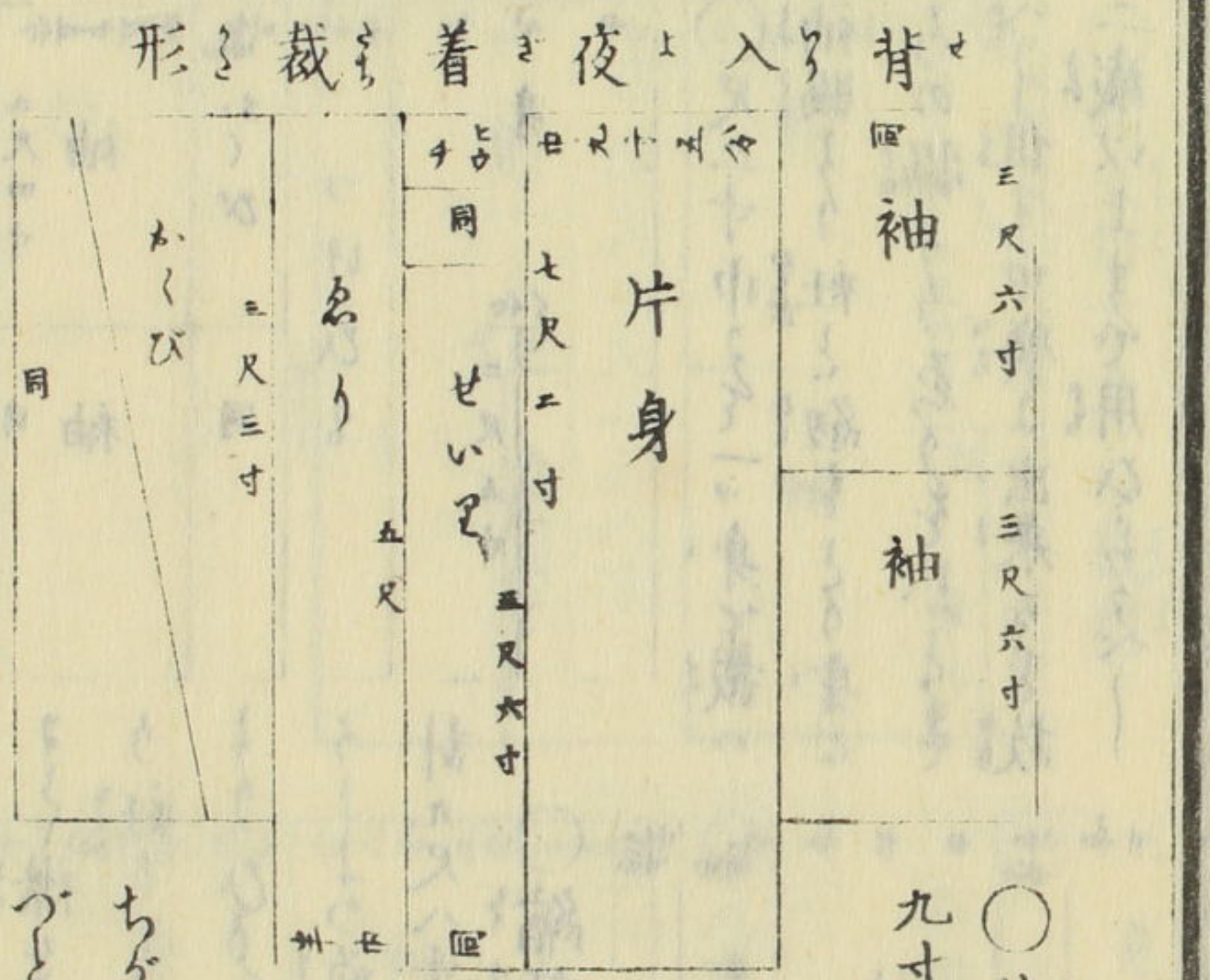
○夜着を二丈七尺の反物を袖をたち身ぶろを取り残りふく袖下へいさるひうち何寸を取り其残り襟の別あきとも裁形ハ皆同ト



裏を表と同一裁きとど二反がけの圖を示せし當今の裏地丈みどくけきばなり故よ五丈四尺の切なりと知るべし



野夫小吏へく貞操あふりあふり知べし氣質淑良なる婦女を娶ハ第一親への孝行となりどが子結あは師匠となまむいよろづあふろ違ひなく取らるらひ大切小家相續せんこと肝要なり  
○吉日を撰むも俗小従ひく大いり撰むべし是また慣習なまふ止を得裁べし



○背入夜着ハ二丈九尺九寸の切を用由裁くついで夜着と同一裁きとど背入なけ切をも多し入るゆのあり圖の如く一中より半巾とありと半巾と背入とあり社ハ中のみ裁ちちがひよまふ巾もかのつと廣くあるを裏



ぬふとなり然まど  
も強くあまふか  
るるあまふか  
如何となきを吉山



を人ふよりて日に  
よらむ夜令む稚子

本八丈巾一ツ身裁形

袖	二尺四寸	あり
袖	同	あり
幅	かくび	同
身	つけひも	同
身	二尺五寸	

○尺二寸巾一ツ身と裁ハ  
袖脇より社と紐をとり身ど  
ろの脇よりあつをかくま  
べし但し巾廣よ出来るを故  
二歳以上まで用ひらるべし

八丈一ト巾一ツ身と裁形

○八丈一ト巾一ツ身と裁形  
あたまづ両袖を裁ち袖口は  
まじ襟を取りまじ其のまじよ  
り社をとるべし身らんハ巾  
よりひめを裁ちとて残り  
うしろ前の身とを魚一(總  
計九尺八寸)

縮緬尺二寸巾一ツ身裁形

袖	ひも	あり
袖	同	あり
幅	かくび	あり
身	二尺五寸	

同大巾一ツ身の裁形

袖	二尺四寸	あり
袖	同	あり
幅	かくび	あり
身	二尺五寸	

右總計九尺八寸

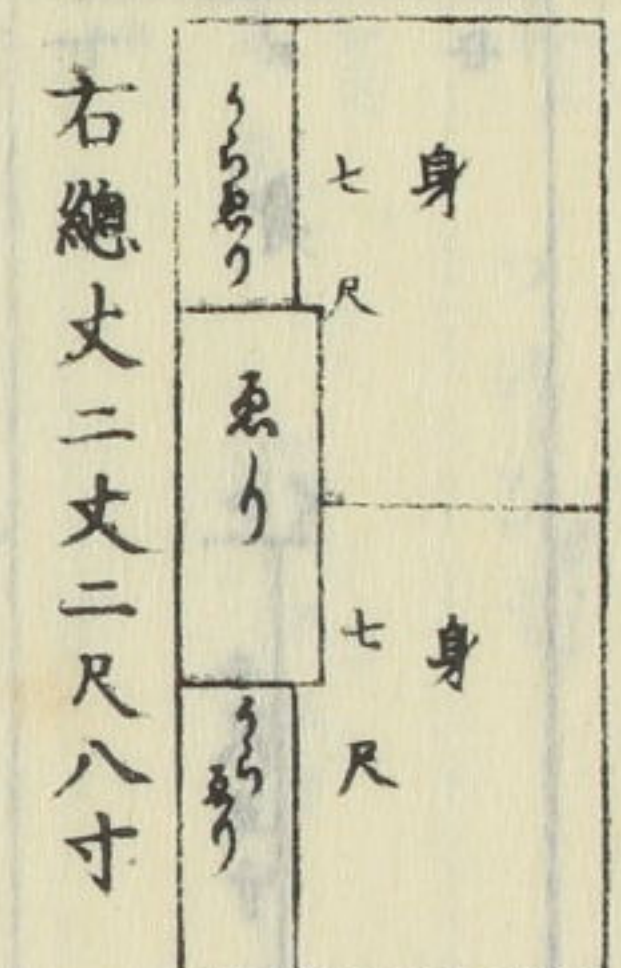
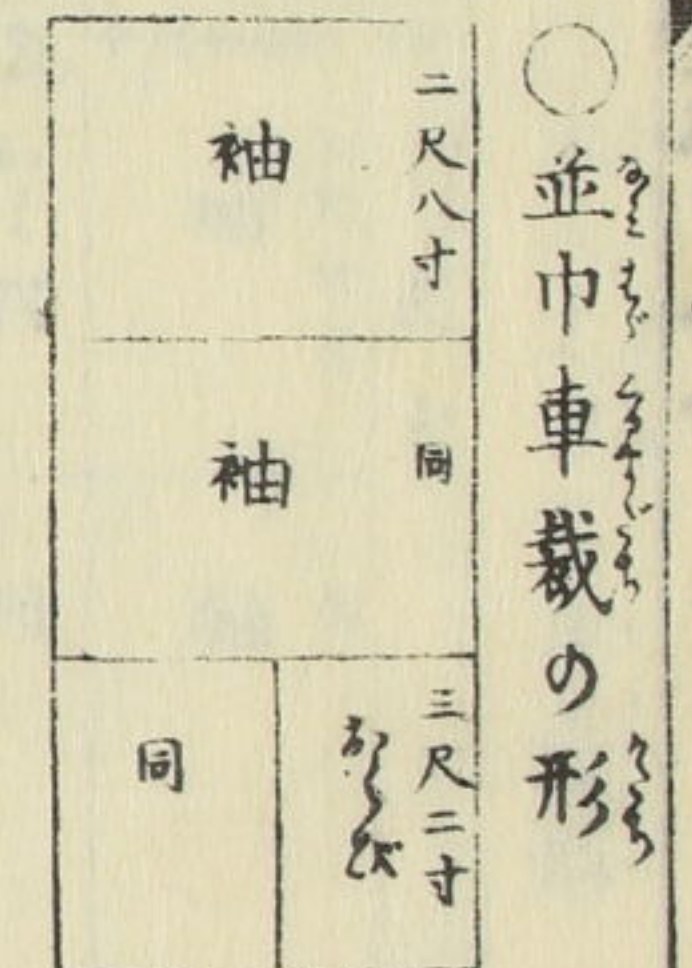
八丈尺一寸巾中裁の形

袖	あり	
袖	あり	
幅	かくび	
身	三尺五寸	
片身	三尺五寸	
右總計	一丈九尺六寸	

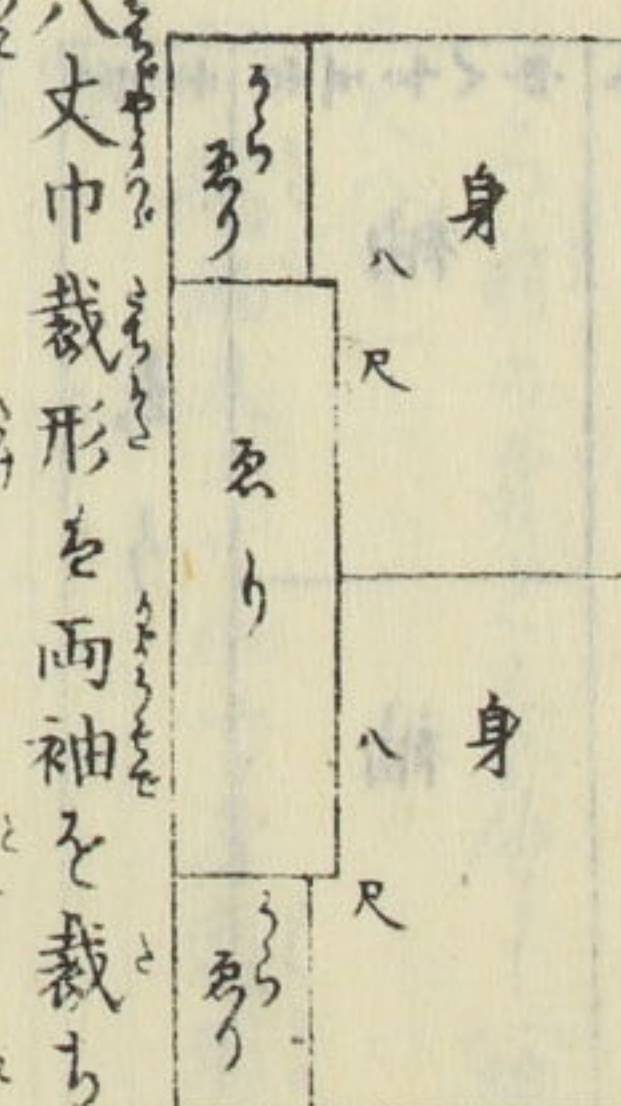
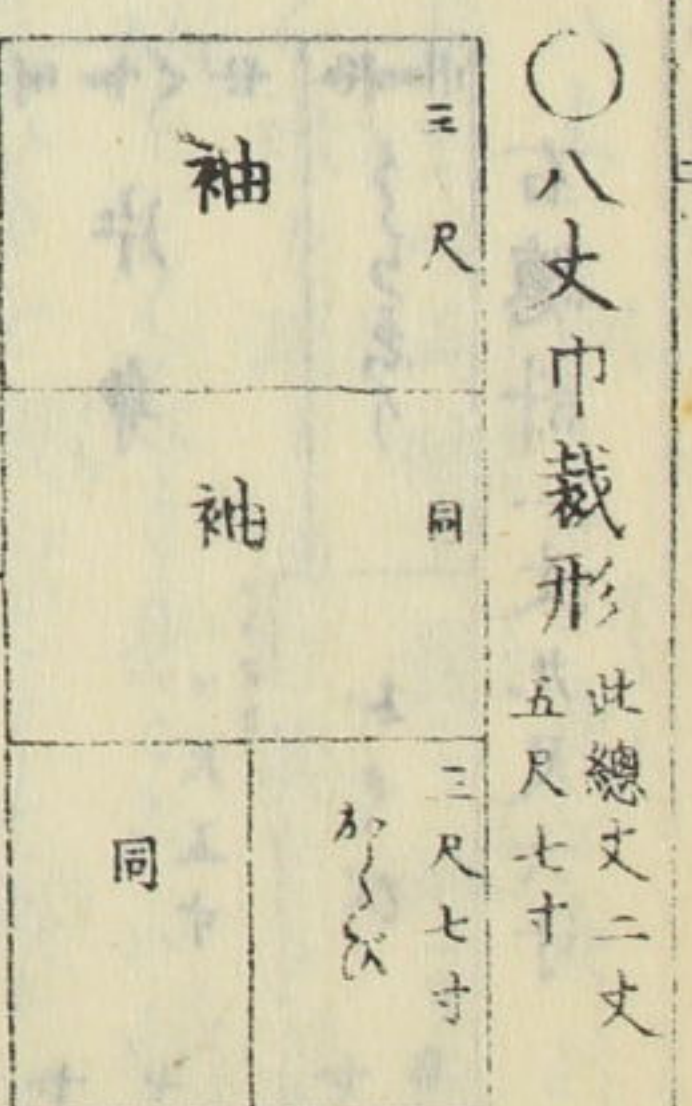
を學校へ入しむる  
ふ吉日とあらみく  
遣したる子日々小  
手跡よりくになり  
て手本あまを習ひ  
得たらハ日ふより  
べしといくとも左  
あくくも生質情弱  
あくくも怠りかちあ  
るといふとちかハ  
くく手跡あがるべ  
きふあらむ然まバ  
日をあらむをきふ  
もあらむ又天赦日



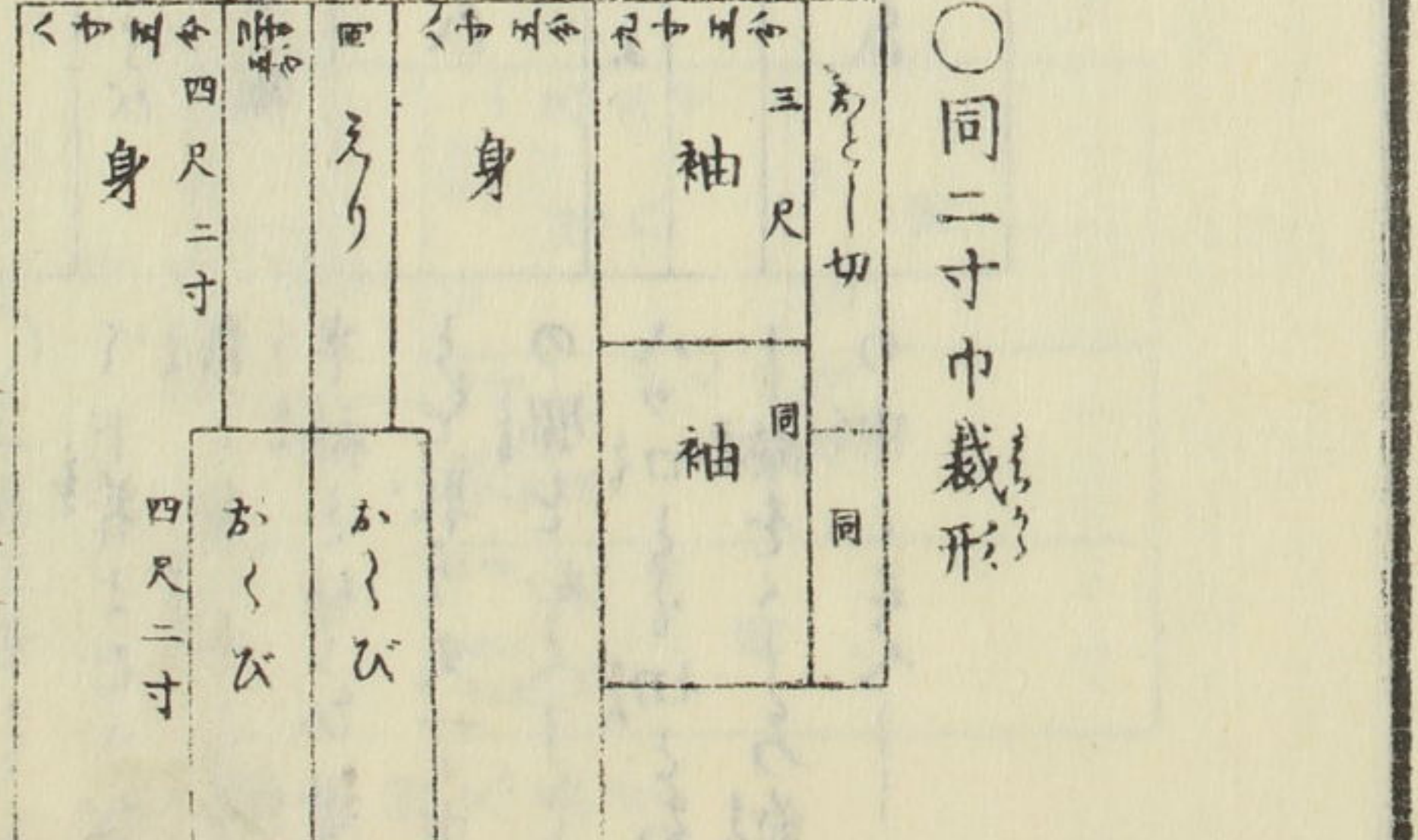
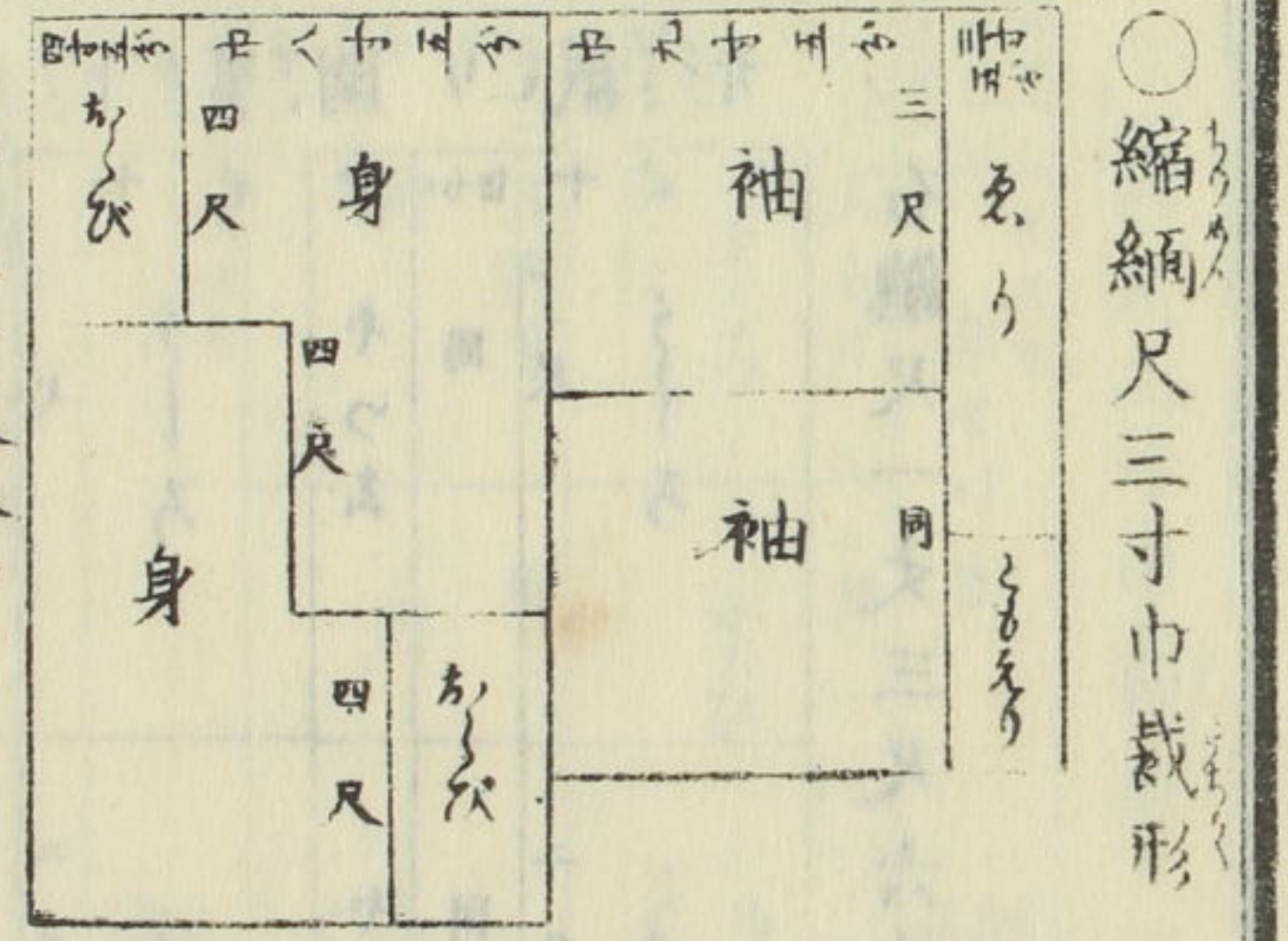
至宝 女用被帷鏡  
 なりとて人の物を盗みとらむを姑ぬ  
 天赦日なきはよく免く相くべきや  
 是と同一人相性  
 縦大吉の相性を  
 りとて縁を組む  
 女所夫不貞  
 不孝  
 家繁昌  
 性ありくとも女の



八丈巾裁形を両袖を裁ち  
 残りありく丈四巾を取り身  
 八寸とす前より襟をか  
 きて背より裏襟をわとし  
 跡を衽とすべし



親所夫をうやまひ  
 大切なきは何ぞ  
 や然らむをらむ  
 もを撰むをき  
 心あり  
 ○婚礼言入と互ひ  
 二媒を以て婚姻の  
 大と定め算の方  
 より言入を遣るを  
 あまを俗よ方のみ  
 とりか此禮をを  
 たり二とび變る



番女 女用被帷鏡

縮緬尺

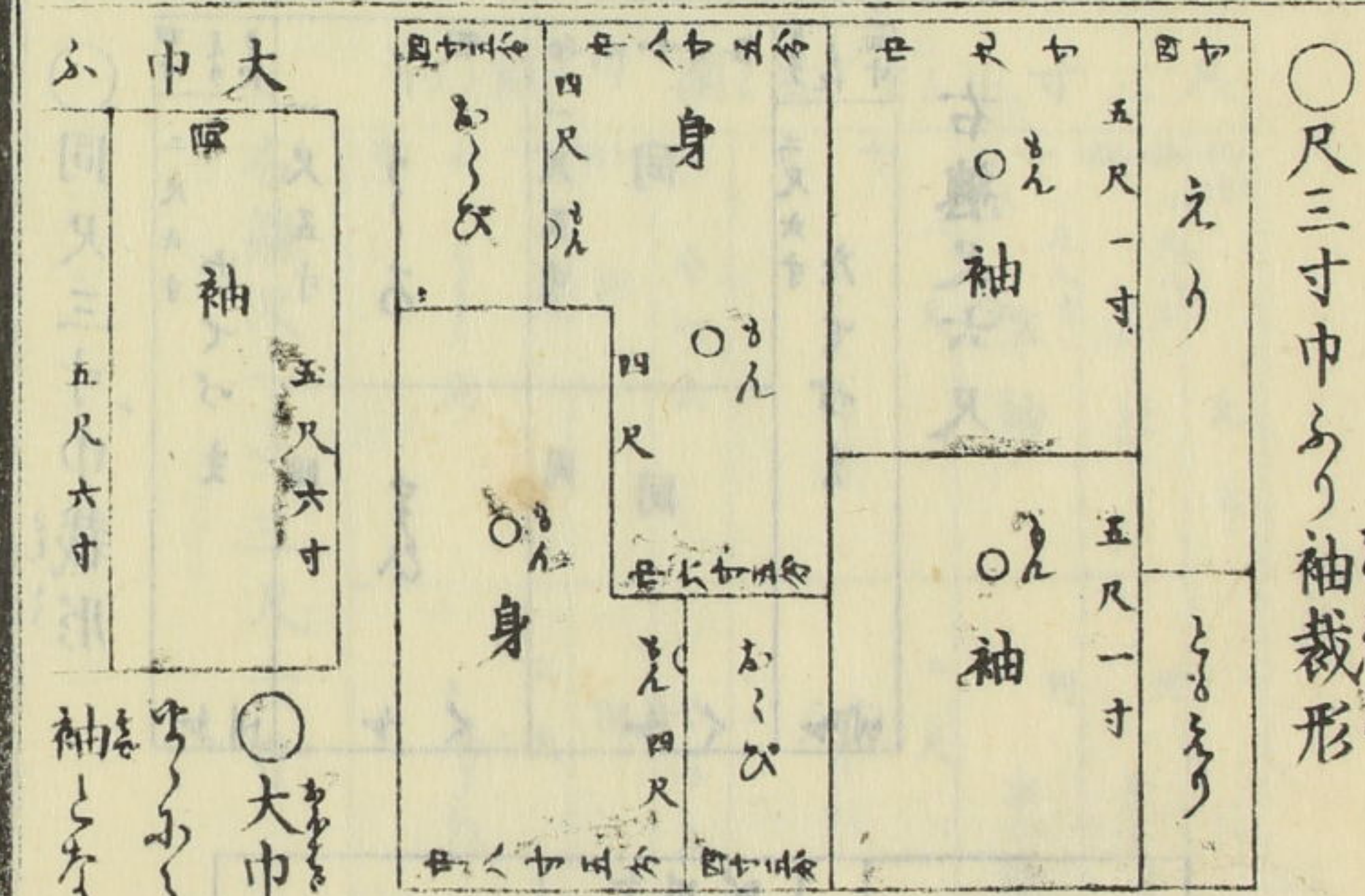
同二寸





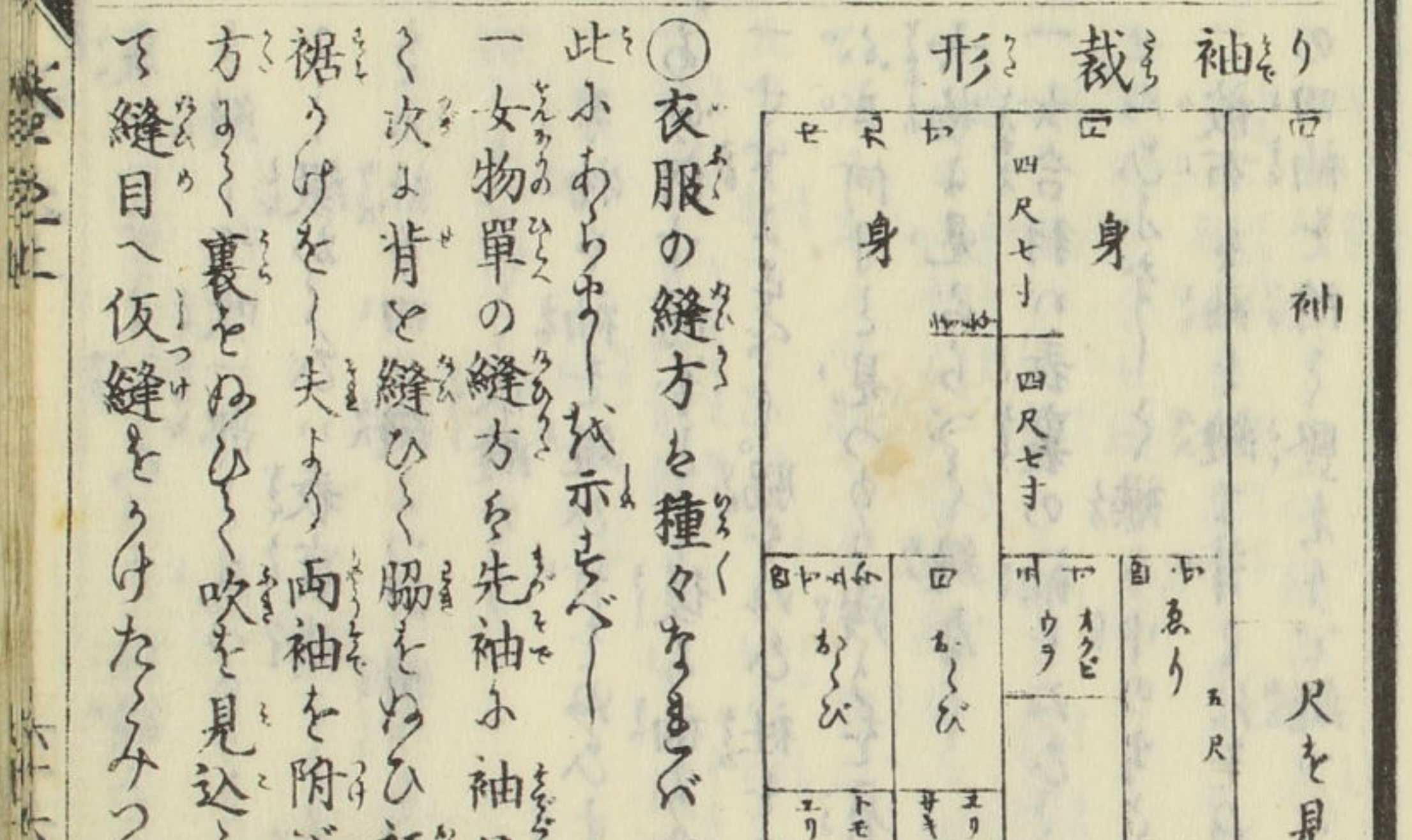


まうらを何色か  
 ても見合まべし何  
 きも一反は板紙  
 もの包みなり杉原  
 紙二枚を中を水  
 引お結ぶべし是  
 より下に至りてい  
 結納を帯代とあ  
 へて金子五圓又を  
 十圓五荷五種の  
 目錄書のみ添え  
 遣まよも何り  
 夫とも餘り省略  
 きて例式外るは



○尺三寸中より袖裁形  
 ○尺三寸中のふり袖  
 の裁形をすべし一丈二  
 寸を裁く兩袖とあ  
 袖脇より襟とも襟を  
 取り残りと圖法如く  
 裁ちて身はろく衽  
 と取りて此總尺二  
 丈二尺二寸なり

を帯一筋を添え  
 たり  
 ○嫁女は道具を婚  
 禮の前日女中裁  
 りて飾るべし  
 ちいさ色あるは  
 時附添来り女中  
 かぎるなり  
 うらふを三かん  
 床を本式とまきと  
 も床を泥とまきを納  
 戸の戸をあか何  
 きも見ゆるやうに  
 飾りつるなり寝間



○衣服の縫方を種々示すべし  
 此小あらしり一紙示すべし  
 一女物單の縫方を先袖小袖口を掛く袖下を縫ふ  
 次は背と縫ひ脇をぬひ衽をつけ襟をぬひ附  
 裾上げを夫より兩袖を附ぎ綿入る是と同一縫  
 方より裏をぬひ吹を見込と裾を合せ四袖をつけ  
 て縫目へ仮縫をうけたらみつけ表をのむ綿を入



おら 姫女の持きた  
てし 夜着蒲團化粧  
道具も化粧の間お  
くを 此處ふかきる  
る

○婚禮は夜を嫁よ  
り 盃をやりあげ舞  
おさきと故實とよ  
むともあはれき小  
いふくと説河まど  
も 古代の慣習をま  
も 其とあり小行な  
ふをよしとほそは  
のち 部屋おの川と

裏とのせく引くく 仮縫あたるなり。衿せの背縫わ  
き縫して吹一部と見つめり。裏よ合せ背と脇と間  
よく綴あつてびの表裏襷よ合せ縫ひあつて前巾を  
きめ衿を四ツ縫よつけ襟下を縫ひ返す。襟も表裏も  
四ツよつけ仮縫なり

一 男物を袖を縫ひ背をぬひ丈何尺何寸とさだめ腰  
あけ何寸何分と。後ろ袖より五分下け前袖より  
一寸下よき。脇をぬひ衿をつけ裏の表の丈小比べて  
ふき何寸と見つめり。残りを肩よきあげ置す。餘を  
女物よ見らるる縫る。

一 女合羽の表裏の袖をぬひ身ぶりの背脇とも合  
せぬひ小なり。襟の中の中の小閉す。

一 被布を袖を縫て背に衿をぬひおちを入る表と裏と  
の四袖を附く。堅えりと縫つけ襟をつけ綿入あれば綿

さのづきああり  
あまを 部屋は盃と  
云ふ 此とに男より  
飲ま じめ女へさそ  
あり 是より有増は



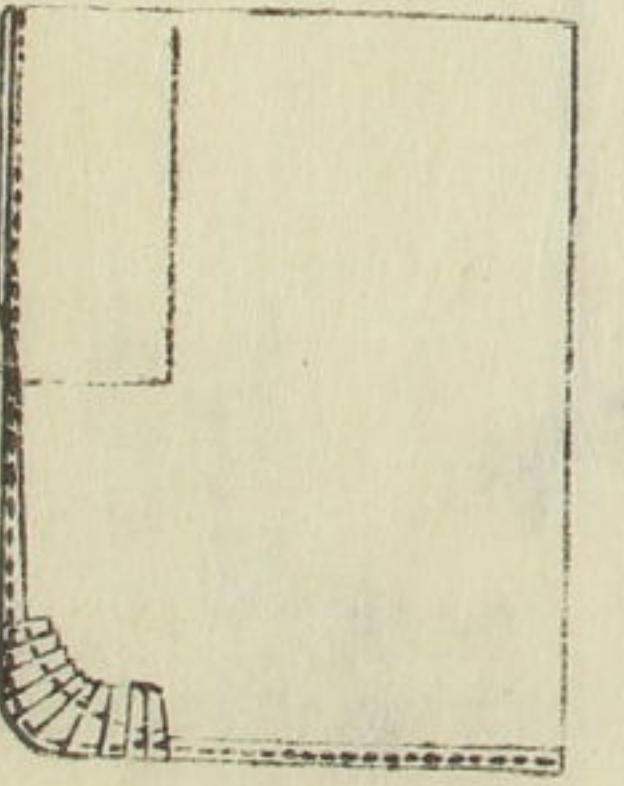
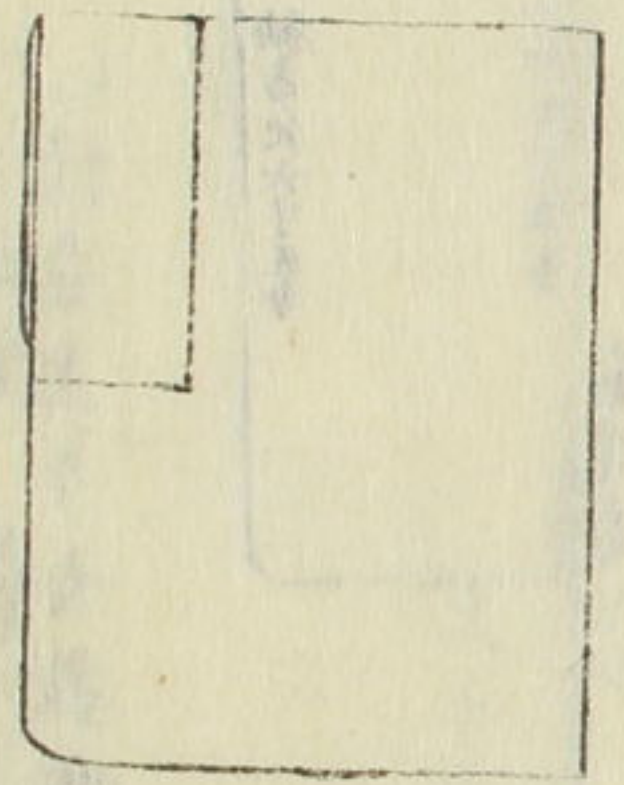
貴女 女用文女鏡

巻之十

六十一

を入り引くく 仮縫あげ夫より装束をつけ  
一 袴の縫方を先奥中へまちを縫つけ又前へ  
とき 袴を合せ縫て夫よりうら奥中へおちり相引  
の切を縫つけ前へ巾と前相引切とよつけ夫より  
後前の両相引を合せ縫ひ裾つけをなす。相引の上を  
ひたよ取あせ縫と。總ひどの左り三ツ右ニツ合せ  
五ツ小折へ。ひど巾を切の中よよき。後八寸とあ  
て折す。其後前紐をつけ後紐と腰板を附す。

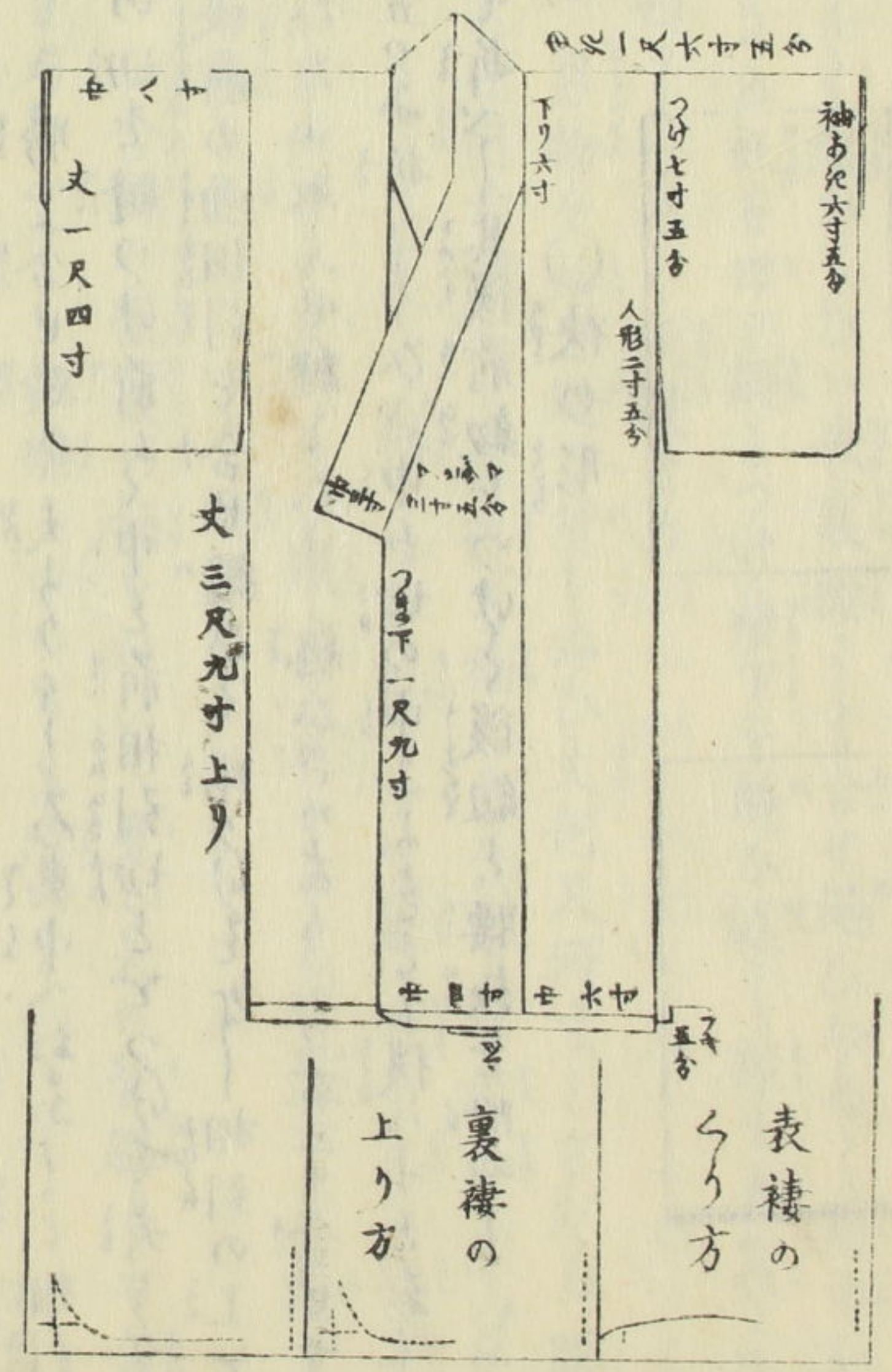
○袂の形



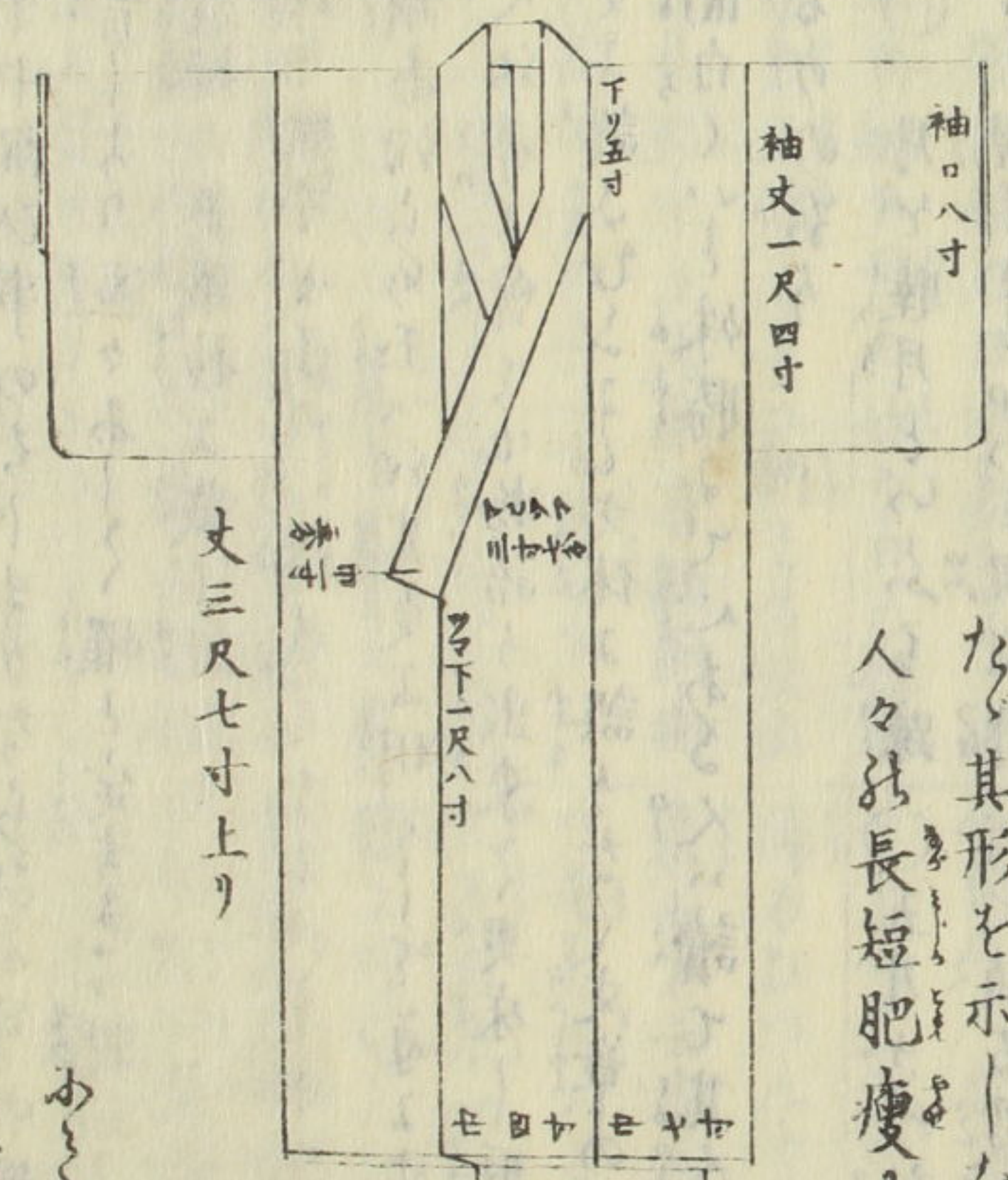


法式を濟なむ夫も  
 天子より下々る至  
 る中を夫婦は道小  
 ニツるあらを何程  
 軽く省きたる祝言  
 たりとも耻うと  
 おりふ危のらを繼  
 へ式三献七五三の  
 儀式をなす男を  
 不義と行なひ家業  
 を疎るふふ一家は  
 内和合せむ女を庭  
 訓を忘却る舅姑を  
 孝行を怠り野夫

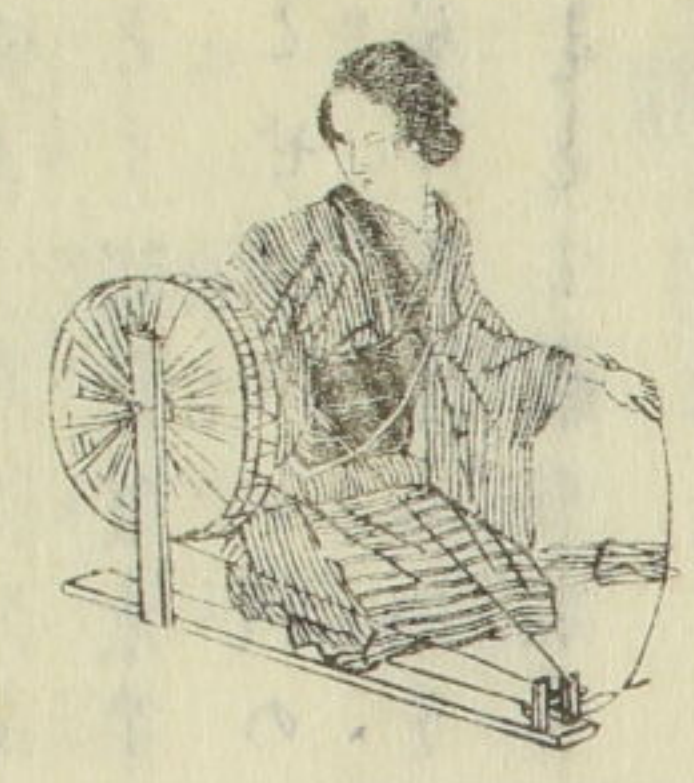
○仕立上り女衣服



○同男衣服



○此男女衣服仕立上りの圖の  
 其形を示したるの  
 人々其長短肥瘦より袖丈



貞節を失ふふ  
 の至りなり婚姻の  
 大責なり夫婦の  
 和むゆすく互  
 ひ小義を立て貞操  
 節烈とよく守り禮  
 敬辭讓厚くか下

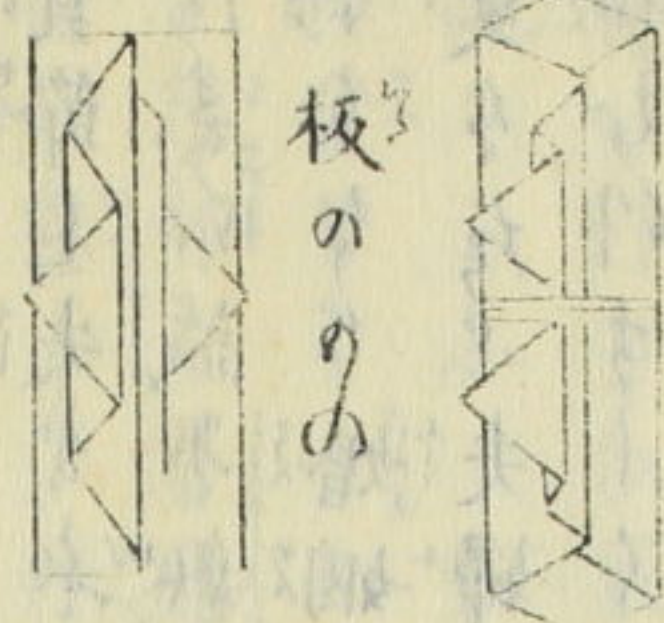
裁縫一玉  
 其心  
 別あは  
 袴の差  
 前の中  
 つげの  
 小る  
 なるび



を憐まじと慈悲を基  
ひとし諸支質素第  
一とせば仮令賤の  
伏屋みかをらひを  
なまとも最日出度  
あしそか

十九 萬包物折形

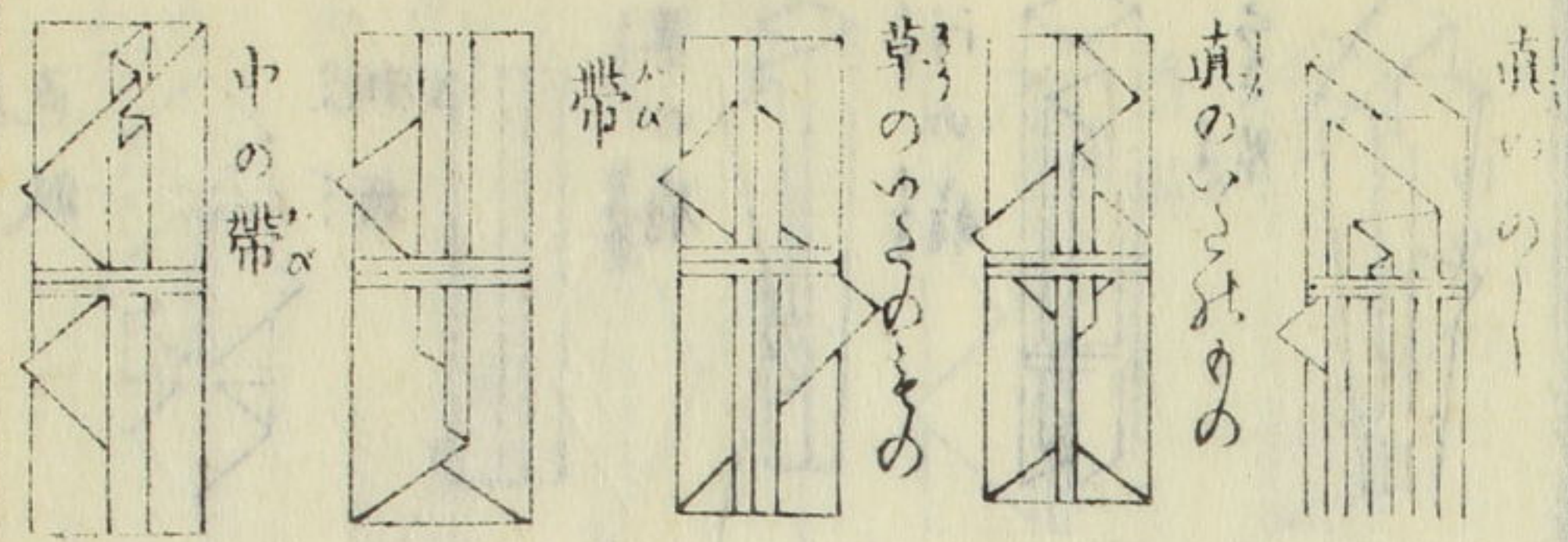
行のの



板のの

二十 年中祝事女子心得  
年中祝ひ事のもとりなりならび小月の異名の説を  
昔より區々あり確と定まざる説ふと雖も藤原  
清輔の奥儀抄に載り説を古今人の信ずる處なれ今  
此を取て女子の心得草となし此年中の謂をせり  
讀あはれらめ玉は其度も明くは母よりよまむ又  
人往尋ふ會ても物語り出来く奥床に取分け折々  
文よ認むむるも文体は誤りなく文章の面々のうら  
面白くいと殊勝めて心ある人の讀て其人品をあらは  
るののあり

○一月を睦月といふを踈  
きも親しまむと祝ふ月  
由名畧しを睦月と云ふ也是  
一年の始めなる故常々踈  
○五月まづ紀といふこの月  
田を植る最中由名早苗月  
と云畧し云ふ五日と端午  
と云ふ端はけいといふ字あり

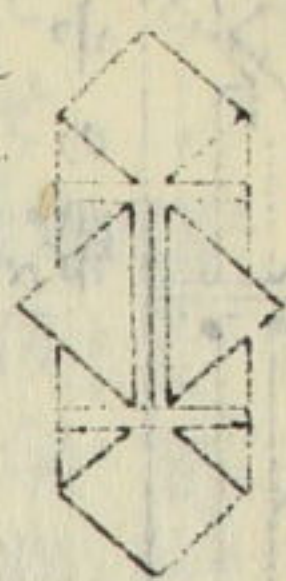


人も互ひ小拜礼して悦び  
へるまなり一日と元日と云  
一年の始の日由名なり又  
年の始め月の始り日の始め  
由名三始とも三朝とも云ふ  
大納言顯朝卿  
何ら玉のとも月日  
ゆきくもこのもめ  
表も表なり  
元日と祝ふの唐土より漢の  
高祖より始り我日の本を神  
武天皇東征し玉ひて天下と  
清り大和國の橿原より都  
玉ひて天皇の位に即き帝業  
征伐の吉例なりともいふ

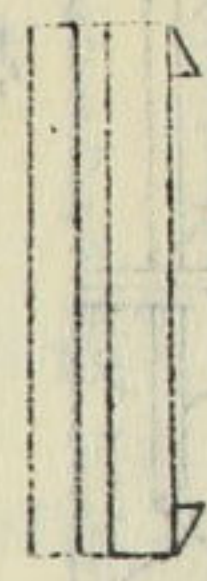
月の始りといふは  
る年よりつる由名  
は楚の人屈原と祭る遺風  
すといふ又粽を祝ふ  
陽あひつん氣散せ  
象ると云ふ此月陰生  
は是を祝ふと云ふ又  
五色の糸と付く翠  
壁より長生を保つ祝  
まなり此日懺り  
りて男子の祝と  
親王異賊を退治し  
吉例と云ふ又神功皇后  
征伐の吉例なりともいふ



色紙



短冊



草の扇



行の箱



花



を始り玉ふ其日元旦日小當  
 了たもは是より一月元日と  
 祝ふ更となきり日の本小  
 一の蓬萊とて三方に昆布  
 神馬藻くら栗伊勢海老お  
 すり蜜柑くら材米を盛  
 山とす客を祝ふ元日  
 より六日す門松を立く  
 あり繩をもちく松竹の十  
 世も色々の賞又神國  
 の風儀とく其家の不淨  
 と清めん爲は注連をかけ  
 るより衆貫標葉と閉るを  
 ぬけ里葉を若葉出く古葉

○六月を水無月といふ此月  
 暑氣甚しといふ水くれつ  
 きるおあよ名づくるなり此  
 月の末水邊に出く抜きと  
 身潔の抜ともよさなりこの  
 けらひといふ  
 ○七月を文月といふ文披月  
 と云を畧して云ふあつ七夕ふ  
 もろくの文書と披きかゝる  
 祭るといふ牽牛織女の二星ふ  
 つらつらの物を備へ領てけし  
 更あり元十五日と申元といふ  
 元正月十五日と上元十月十五

木の芥



香物



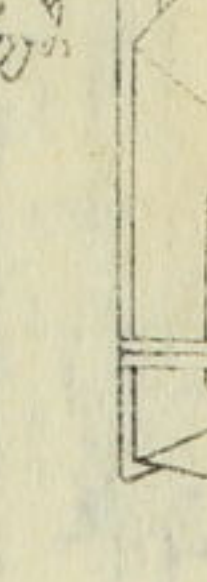
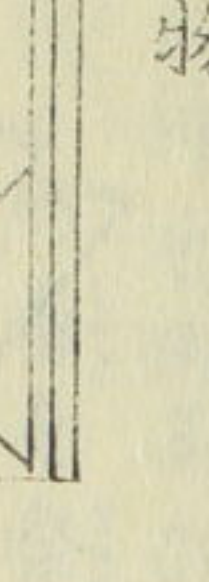
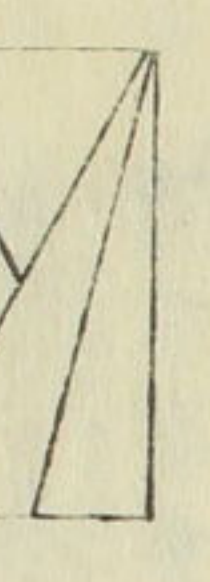
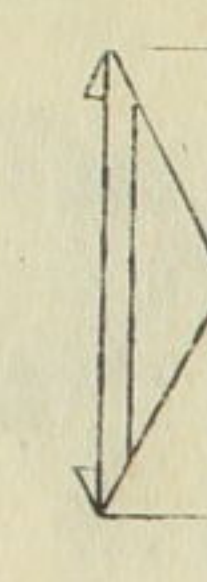
白ひ

ろ

手拭

ふき

ふで

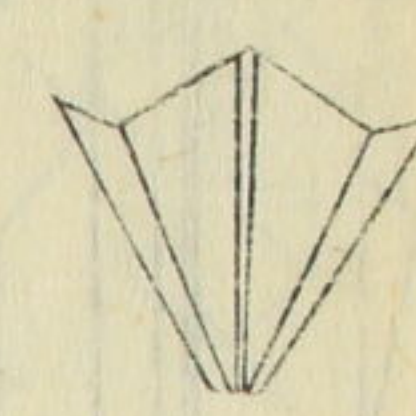


あつる者お名人の子孫小  
 かつり渡して世をさるたあり  
 なり衆貫をぬるむれとらふ  
 名よりて夫婦相生と保つ  
 べき祝ひ更ふ引あり七日  
 七種の粥を神武天皇の御  
 宇より始るあり七種といふ  
 芥蕭五形紫萎仏の座鈴菜  
 鈴代をり

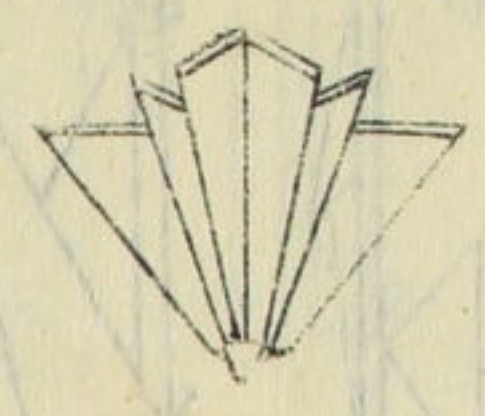
公朝卿  
 君が為七種の粥のなごきに  
 ちとほくえん万代のとも  
 十五日小豆粥と餅を入く食  
 するふと是も其年疫病を避  
 けたりといふ  
 ○八月を葉月と云ふ木結  
 葉もみちりて落る月お名  
 葉をち月と云と略して云と  
 たり一日と八朝といふ  
 ○九月を長月といふ夜此  
 月より漸く長きお名夜長  
 月と畧して云ふ九日を重陽



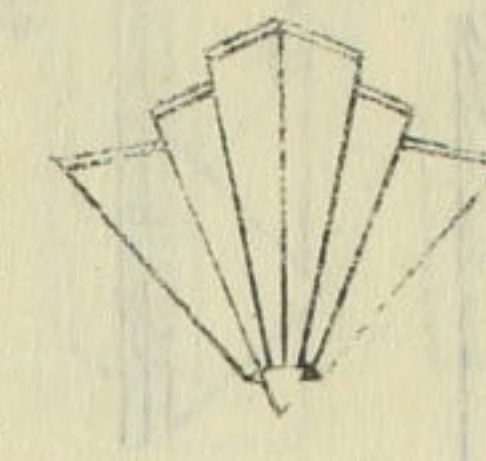
胡椒粉



男蝶



女蝶



廿一 新年中行支

一月一日 四方拜 此日天子親ら大地

ろためをり

二月夜更着と云此月を余寒烈しけも更衣を着

由云ふあり此月ハ陰陽交る月なま嫁取婚礼より

き月ありと云周礼ハ仲春男女を會せしむと見

十五日を涅槃會と云釈迦仏入滅し玉ひ日なり

三月弥生といふ此月を風雨和ら

き草木のり生るる日と上巳といふ古を上巳

この月九ハ陽の数を

この月九ハ陽の数を

飲む無病ありて長命なりと此支彭祖と云仙人の長

壽なり例より起る



十月と神無月といふ此月諸々の神達出雲の大社

四方を拜し豊年を祈らむ

一月三日 元始祭 此日天神地祇并び

御代々の帝を祭せたる

一月五日 新年宴會

一月廿日 孝明天皇祭

二月四日 祈年祭班幣

二月十一日 紀元節

祭りふり 春季皇天祭 春分の日

の日に用わが唐上穂の八

り三日と云上巳と云

此日蓬を餅と和して草餅と

桃花酒を造る此二品を食

ると時氣を攘ひて無病と



ある祝ひなりと古を母子

草と以て餅とせし由之母と

又此月伊邪那岐の神崩御

玉ひ月をばかしくいふ

謂り此月の亥の日ハ餅を

搗く祝ふ此を亥の子餅と

云ふ豕を多く子と生るもの

をばかしくいふやうらん

十一月と霜月と云霜ふ

り月の略なり此月髪置袴

着帯と紀元服をばかしくい

霜月ハ一陽來復の月なり

ばかしく祝ひる總て祝儀



四月三日 神武帝祭  
天子御先祖の御大  
つりあり

十月十七日 神嘗祭  
太神宮に新米と奉  
る祭あり

秋季皇灵祭 秋分の日  
十月三日 大長節  
天子御誕生の御  
祭あり

十月廿三日 新嘗祭  
太神宮へ新米と奉  
る祭あり

子と此睦すき婦女の佳儀  
となせあり又雛あそびを  
さる夏源氏物語も見え  
たり

○四月と卯月といふ此月卯  
の花盛りなれば卯の花月と  
云を畧し云ふなり一日を  
夜更といふ此日上方夏の装  
束とあり女中方下帯とふ  
り下々の裕せと衣初るあり  
八日を灌仏して寺院と金  
仏を立て五香水と以て之を  
灌ぐ釈迦仏誕生日なればあま  
年中祝夏女子心得草

○十二月と師走といふ昔  
此月仏名を唱へ經と誦せ  
る家々僧を引置故に師  
走と云ふなり三十日を  
除日と云ひ又大歳といふ一  
年の終りあまふ歳暮の祝  
とて各々進物を以て礼する也  
右も旧曆のこゝを拘るとい  
ふも日の本の國風よく  
今尚執行ふ家々多し  
心得の爲とて書記侍りぬ

至宝 女用文姫鏡上の巻かきり



